巨匠　飯田欠隠老師全集随感録

無無無

井上希道

序に代えて

吾人、非才の愚勇を振るい、飯田欠隠老師の全集を刊行すべく発願して既に三十年近くか。その志の遂行遅々として今日に至りました。生来鈍重にして怠惰たる吾人は忸怩たる日々です。

然りと雖も、いよいよ結実の時節を迎えました。全ての原稿が既に出版社に渡り、具体的に制作段階に入ったからです。

しかし懸念も拭いきれません。大応・大燈・関山の三国師已後、五百年不出世の巨匠である欠隠老大師の名すら知らない禅者が多くなりました。正法衰退の兆甚だしきが故の現象かと恐懼している次代です。

正に菩提心の希薄に尽きると言うべきか。知らさぬ者の罪か。ともに罪過弥天（宇宙一杯の罪）故に、これを知らさねば仏祖の誹りを免れぬ。仏法滅尽を恐れる者としては恥さらしを顧みず、愚勇を奮って身を忘れ、我れを憚るは他の慢に任せて走るのみと決意して多年。

思えば凡そ世の痛快な大事は堅固な信念、つまり己を捨てて事に望んで初めて為し得たものと言えよう。さればその任甚だ重く、されど吾人断固退かず。

さしあたるその事のみを思へただ　返へらぬむかし　知らぬ行末　（菅公）

ところが欠隠老師終始全体、真金純金故に、自戒し汗踵に至って大いに悶絶して軽快を得た事が無ければ、例え百読すれども到底無辺の有り難さが分かる代物ではない。

道元禅師（元古仏とも言う）曰く、「須く回光返照の退歩を学すべし」が分からぬ限り無理である。即わち仏道修行の要である「着眼」、分かりやすく言えば「前後の無い念・心の無い心・無我の事実」に気付くこと。ここを会得した者で無ければ皆目手が付かない孤高の法財である。肝心なことは、満身菩提心（努力心）に染まり、即今を練るしかない。つまり今していることから心を離さない努力である。

さはさりながら折角菩提心を駆り立てても修行の光と成らざるは遺憾である。甚だ遺憾故に、不遜ながら拙文を加えて資助となし、多少理解し易く前段を添えたものである。

言うなればこの一梓は「欠隠老師語録への誘い」であり、大安心への地図であり、世界大平和達成を願う諸仏への誘導灯と言えよう。

大きく出たが、決して慢心からでは無い。諸人の菩提心に訴え、老大師の暖皮肉、諸仏の血滴々を伝えたい一心からである。故にこれを諒とせられよ。菩提心、菩提心。

老大師去る（昭和十二年）こと三年後、昭和十五年に生まれた吾人故に、直接その偉人に会うこと叶わず。されどここ翫月山　勝運寺に逗留養生されること凡そ二年。我が師である井上義光（吾人の叔父）・妻大智（大智老尼、吾人の母方叔母）、父、母、道環（義光老師の長男）とその兄弟姉妹等、大家族に加え、南井金治居士など久参の士が、欠隠老師と共に生活して得た生々しい体験談は極上の法財であり、参師問法のその生の様子は山僧にとって百冊の祖録に勝る貴重な法財である。それを公にして包道の士の披見に遭えば法の幸いとなす。

初めより無用の用たるは免れぬ。されど参禅学道の士は決して祖師から離れることは無いし、離れては

ならない。巨匠老大師を欽慕する士に、更に親近感を深くして頂き、絶大なる法縁に成ることを信じて蛇足を敢えてなさしむは是れ大法を思う菩提心の一端とおぼしめされたし。

巨匠欟隠老大師（以後略して欟老・若しくは老大師と記す）その為人と孤高の境涯を知って頂きたくこの一梓をもって報恩の一端と為し、仏々祖々の暖皮肉（最も親密にして貴い道）を看取（手に入れる）する多少の資助となれば此れに勝る法悦は無い。

「ケフ（今日）成道忌ヲヤッタ。病僧ナガラ経ヲ簡ニシテ香語ヲトナエタ。出山ノ畫（釈尊が悟られて山から出てこられた画）ガ面前ニアル」と説明付きの香語である。

成道忌香語
常見星人不
用語堪笑古
聖在途中
翫月山上
方丈室咭嘹
舌頭仰臥翁
別々
遮莫往来八千遍
粉骨砕身不足酬
昭和七年
一月十五日
飯田欟隠九拜

成道忌香語。常に星を見る人、語を用いず。笑うに堪えたり。古聖途中にあり。翫月山上方丈室。咭嘹舌頭仰臥の翁。別々。遮莫往来八千遍。粉骨砕身も酬に足らず。

昭和七年一月十五日。飯田欟隠九拜

成道忌（釈尊が悟られた日）は十二月八日である。にもかかわらず一月十五日に書かれている。体調不良にてそれどころではなかったことが窺える。義光老師・大智老尼の元でようやく体調を戻されたか、菩提心に鞭打ってようやく報いた模様がする。この境地、誰か知る。嗚呼。老大師なるかな。慚愧、慚愧。

「常に星を見る人、語を用いず」常に星を見ている人は星を知りきっている。分かりきったことは思う必要も語る用も無い。身近に言えば、食卓に付けば食べる。何の道理も知的計らいは無用である。「只」坐禅をする。眼は初めからちゃんと眼をしている。眼は眼とも思っていないし、見ていることも知らない。美醜も好き嫌いも無い。何の心も意も無い。これを「自己無し」と言い即今底と言う。

この儂にはとんとご無用じゃ。釈尊と時々相見しておるぞ。釈尊の境地を見て取れとなり。しかしそれは容易なことでは無いぞ。先ず、菩提心を起こし、その物に成り切って自己を忘じてこい。さすれば「語を用いず」が手に入るわい。それからじゃぞと。「常に」は親しきの極。「切実」「真実」「同化」に同じ。前後の無い「今」のことだ。

仰うのいで　見るばかりなり秋の月

「笑うに堪えたり。古聖途中にあり」どの祖師方も見地は確かだし心眼には違いないが、多くは臭みがあり残りものがある。味噌の味噌臭きは上味噌にあらず。まだ途中辺連中が多い。転た悟れば転た捨てよ。山上尚山あることを忘れるな。好事も無きに如かずじゃ。菩提心が今少し足らぬぞ。自我の識神（意根・煩悩の本）を打破しても、もう一つ殺し切らねば成らぬ難関がある。これを成し遂げ霊妙無礙自在まで尽くし切った者が少ない。臨済、徳山の棒喝も何の効用かある。みな小さい、小さい。

腕を切り、母を捨てて不惜身命の大菩提心をして初めて現前じゃ。容易の看を為す莫れ。釈尊も今なお修行中じゃ。何となれば、一切衆生を救い尽くして居らぬからだ。身・口・意の三輪説法を駆使して衆生済度の修行中じゃ。ここが分かるようになれよと。恐惶。嗚呼。涙、涙。

たびたび聞き及んだことは、欟老が心底稽首していた祖師は趙州禅師ただ一人。元古仏も、「稽首す趙州真古仏。趙州已前に趙州無く、趙州已後に趙州無し」と言われた大宗師である。日本においては応・燈・関のみと。故に五百年間出の大宗師と称されている。老大師は全祖師の中の十指に当たる老古仏である。　迦葉尊者が西の横綱なら、欟隠老師は東の横綱。両々互角である。行持は知れたこと。三世の諸仏祖師方である。否、我等の菩提心である。昔の迦葉尊者が今の欟隠老師と知る者誰か有る。知らねば法は断絶する。命がけで本当にやれとの意である。

「翫月山上方丈室」説くに及ばず。されど語らずには居れない大事がある。写真の如く欟老の香語に、

「臨済曹洞百花天。大半凋落失其伝。勝運幸有義光在。続焔三百五十年。云々。（臨済曹洞百花の天。大半凋落して其の伝を失す。勝運幸い義光在る有り。続焔三百五十年。云々）」とある。

勝運寺創建三百五十年忌に因んだ香語である。証明に似たところがあるのは、義光老師に如何に信頼と期待を置いていたかを語るものである。もって少林窟道場三世を委嘱さるるも宜なる哉。

老大師は今、この「翫月山上方丈室」と言うたが、それは何処のことじゃ。此処とは何処のことか。しかと参究せよ、と響かせて居る。人々の即今即処の他はあるまい。今、此処に違いない。何時もここしか無いではないか。参。

「咭嘹舌頭仰臥の翁」口が悖ることもあり、聞こえたり聞こえなかったり、寝たり起きたりの身体となり懶い年になった。これはこれ。何も言う事は無い。これも自然の妙で面白いものじゃ、と言いつつも体調の不自由を訴えている。然して如是の法なり。釈尊も四大五蘊、時到れば死して自然に還る。全て百も承知の上だ。ご心配には及ばぬぞ。真箇仰臥坐臥、真実人体、即今如法（全て有りの侭・真理）を看取せよと。

この風で　何の不足か高座敷

「別々」だがしかし、この大法を伝統し護持された祖師方を思えば涙が出る。大恩を忘れた事は無いぞ。忘れるでないぞ。次の語句を肝に銘じて修行を怠るなと。

「遮莫往来八千遍」釈尊は娑婆を往来すること八千辺。生まれ変わり死に替わりして修行してこられた。遂には最高位である国王のもとに生まれられた。されど心の訣著が付かざる間はただの素凡夫であり、この時は我等と寸分も異なることはなかった。

しかし天地の差が有った。それは人間が最も執着して離さぬ諸々の一切を捨て、最後の修行に入られたことだ。国、名誉、地位、家族、財産等を捨てて真実の道を求めることを菩提心と言い求道心という。この菩提心の差が聖と凡の差を生むことになる。

樹下石上、端坐六年。十二月八日の朝まだき、一見明星の刹那、遂に自己を全忘して解脱され

た。この瞬間より誰もが根柢より救われる真実の道。解脱の法門が開かれた。それから四十九年間、ただ衆生済度に粉骨砕身されたもうた。その光、今なお宇宙を照らし抜いているではないか。

だから大聖釈迦牟尼仏と尊称し宇宙第一の聖人してと尊崇されているのである。因みに六祖は娑婆往来五百生、趙州禅師を七百甲子の老宗師と仰がれている。祖師の苦労は畢竟何のためぞと、檪老は我等に不惜身命の菩提心を促されていることを見て取らねばならぬと。恐惶、恐惶。惨悔、惨悔。

「粉骨砕身も酬に足らず」この大恩を思えば如何なる事も厭うてなど居れぬ。神光慧可大師は自ら腕を切り落としての求道者であり、六祖も洞山大師も黄檗禅師も母を捨てたではないか。発菩提心は上求菩提、下化衆生の心である。正法護持は菩提心無くして有り得ないぞ。仏祖の大恩を本当に感じられるならぐずぐずするなと、檪老の血を吐き骨を砕くの熱誠を誰か看取ぜざる。

これが老大師の神髄であり祖師の本領である。誰かこの大慈大悲、超仏越祖の境界を疑わんや。本源自性天真仏を全挙して諸仏祖師方の熱誠を伝えんとするの慈恩、粉骨砕身も酬に足らず。

嗚呼。慚愧、慚愧。

山僧の書斎に掲げられているこの香語を毎日拝し、無上の菩提心を駆り立てている。菩提心、菩提心。

巨匠　飯田欞隠老師とは

井上希道

一、釈尊、祖師方は何故尊いのか？

道統凡そ二千六百年。大聖釈迦牟尼仏の出現により、六年端坐の暁、遂に真実の道が現前しました。「大地と有情と同事成道。山川草木悉皆成仏」と一声され、人類が初めて根底より救われる道を明らかにされたのです。これが明星一見、解脱の法門です。

全人類の心は一つ。故に人皆信じ助け合い、互いの智恵や技術を結集して便宜を図り、みんなが和気藹々としてその場その場に安住する道。明朗闊達な人生への大道が確立したということです。この道を［仏道］又［仏法］と言い、仏の教えですから［仏教］と言うのです。

体得した時、決定的な自覚症状が有ります。この様子を「身心脱落」と言い「悟り」と言い、また「見性」とも言います。これが禅の命です。ですからこれを「一大事因縁」と言うのです。迷いや苦しみの根元がスコンと抜け落ちて重荷がすっかり無くなった自由な心を得た。無限の宝を得たので［一大事因縁］と表現したのはまことに至当の上にも至当です。だから釈尊・諸仏祖師方は聖人であり偉人なのです。最高に尊いのです。

「見性（悟る）」した無我の力は即大愛心となり衝突や争いの根元が無くなるのです。この道が世界を救う力となるのです。この偉大な精神を「大慈大悲・無上菩提」と言います。救い尽くす絶大な心です。諸仏祖師方は「大慈大悲・無上菩提」の偉人であり「見性」し悟ったから尊いのです。

二、拈華微笑

さらに幸いしたのはインドの霊鷲山においてこの絶大な道を伝統することが出来たことです。これが有名な釈尊拈華、迦葉破顔微笑の一大事因縁です。つまり、釈尊がそこにあった華を「只」取り上げた。此処に出来物が一人居た。それが迦葉尊者です。釈尊の拈華を「只」見てすっかり頷き微笑んだのです。釈迦牟尼仏の内容をすっかり体得された様子です。禅ではこれを灼然（よく分かった）と云います。

これが世に名高い「拈華微笑」です。身心脱落であり「見性」です。これが重大な出来事なのです。何が重大か。迦葉尊者が身心脱落（本当の「心」がはっきり）して釈迦牟尼仏と同じ境界になったからです。欞隠老師もその人です。

それを見届けた釈迦牟尼仏は「吾に正法眼蔵・涅槃妙心・実相無相・微妙の法門・不立文字・教外別伝あり。摩訶迦葉に付囑す」と大衆の前で宣言されました。これを印可証明といいます。釈尊ご自身が見届けて間違いないぞと証明されたのです。私亡き後は、この迦葉尊者に随って修行せよ。さすれば迦葉尊者のように解脱するぞ、と証明されたのですから間違い有りません。

正しく努力すれば人類みんなが救われると言う事です。だからこの上ない重大な出来事です。奇なる哉、有り難き哉。

だからこそ迦葉尊者は伝統者の第一祖と仰がれて居るのです。飯田欞隠老師はここまで体達された大変な方なのです。過去の迦葉尊者が今の欞隠老師となって現れたのです。欞隠老師は祖師の中の祖師であることを知って頂きたいのです。まさに大正・昭和の迦葉尊者なのです。

三、印可証明の大事

こうして釈尊の内容を実践体得して、代々印可証明により第二十七代般若多羅尊者に伝統しました。般

若多羅尊者は第二十八祖達磨大師を仕上げて印可証明しました。そして中国に渡ってこの大法を伝え残すよう委嘱されたのです。達磨大師は師の命に従い三年掛かって漸く渡来しました。これを仏法東漸と言うのです。その時既に御年百二十才だっと言われています。この年齢をして釈尊の命脈を命がけで伝えたのです。尊くて涙が出ます。

それ故にインドは二十七代で正伝の仏法が断絶しました。人物が居なかったと言うことです。逆に中国、そして日本は幸いしました。釈迦牟尼仏の生き肝が伝来したからです。

釈迦嫡嫡相承第二十八代の達磨大師が中国の第一祖です。尊中の尊です。幾ら尊んでも余りあるお方です。ですから［震旦初祖円覚大師菩提達磨大和尚］と尊称されているのです。

大変な法難も有りましたが、達磨大師が伝えた釈尊の正法は五家七宗（五家とは、曹洞宗・雲門宗・法眼宗（石頭系）と潙仰宗・臨済宗（馬大師系）を五家と言い、更に臨済系は宋代に入るや、黄龍派と楊岐派が生まれ、合わせて七宗となって広がりました。

やがて我が国の道元禅師が中国に渡り、第五十世の如淨禅師より［解脱の法門］を正伝しました。釈尊より第五十一祖道元禅師が日本の初祖です。

その後多くの渡来僧も正法を伝えてくれましたが、日本からも命がけで中国に渡り正法を伝統したのです。それにより我が国には曹洞（永平寺・總持寺の二大本山がピラミッドの形で布衍）・臨済（十五派の大本山より布衍）・黄檗（宇治の萬福寺より）の三派が栄えることになりました。

こうして釈尊の［解脱の法門］を体得によって嫡嫡相承しているので、［禅は仏法の総府］と言われているのです。

道元禅師は［所謂ゆる諸仏とは釈迦牟尼仏なり、釈迦牟尼仏是れ即心是仏なり、過去現在未来の諸仏共に仏となる時は必ず釈迦牟尼仏となるなり］又［是れ即心是仏なり、即心是仏といふは誰というぞと審細に参究すべし］と厳命しています。

菩提心を発して正しく努力すれば［解脱の法門］が開かれる。仏とは自分の本来の心である。自分の心を自分で見届ければその事が確かであることが分かるぞと。何と言う素晴らしい道なのだ。改めて釈迦牟尼仏の尊さが伝わってくるでしょう。

四、日本の精神、その文化の源

こうして花咲き、蘭菊色を競って政治を始め我国民性と文化に大きな影響を与えてきました。歴史の裏に高い禅の精神文化が少なからず影響を与えていたのです。

とくに有名処を二三上げてみます。先ずは後奈良天皇の大悟です。大休国師に就いて参禅し、遂に大事を了畢（体得）されました。国師に宛てた御宸翰に、「末後別峰において徳雲比丘（本来の心）と相見してより受用自在。仏祖の鞭を受けず。この恩何を以て報いんと、拝しまつる」。天皇にあってこの境界。何と有り難いことではないか。

檀林皇后は、「ワレ死ナバ　焼クナ埋メナ野ニ捨テテ　痩セタル犬ノ腹ヲ肥ヤセヨ」と。生死を呑却（飲み尽くす・超越）して一点の執着無き堂々たる心境やお見事。檀林庵の跡が今の天竜寺です。皇后においてこの心力や尊し。

「身の為に君を思はばふたごころ　君のためには身をもおもはじ」と言い放ったのは北条の将軍です。国のトップがかような誠実さがあれば国は清くなるのです。

後醍醐天皇に大應国師、大燈国師、関山国師あり。夢窓国師は南北の両朝廷に重んじられた巨匠です。徳川三代将軍家光には澤庵禅師が就いていました。このように朝廷、公家、将軍、武将、学者、剣客、俳人、茶人、商人、一般へと、禅の精神が浸透し重んじられたため、治政にも一般の意識にも反映していったのです。

「乾坤をその侭庭に見るときは　我れは天地の外にこそ住め」宮本武蔵は大きいぞ。大きいぞ。熊本の春山禅師に就いた俊才です。

「俳諧はその中に在り梅柳」俳人にしてこの心眼あり。こうなれば不平不満は無い。

「心をば水の如くにもちなして　方と円とを物にまかせん」衝突の余地が無い。世界平和の源です。自然に国家も社会も治まってくるのです。或る商人は又、

「この経の　心を得れば世の中の　売り買う声も法となりゆく」家業に専念して事を為せば誠実になる。又、

「白隠の隻手の声を聞くよりも　両手を打って商いをしよう」と。世法仏法不二なるを言うたは参禅弁道の境界からです。祖師方のお陰によりここまで清い心が一般化し坐禅は浸透していたのです。これは捨ておけぬとばかり白隠禅師は返して、

「商いがすぐに隻手（真実）の音じゃもの　両手を打つはいかいご苦労」と一層の勉励を図った。売り手と買い手と一つに成ってお互いが満足を与え合う。これが仏法です。隻手の声です。本当の商人道を教えていたのです。

これらの歌に見る如く、世塵を超越した禅定力は限り無く美しい姿です。これが世界に無い日本の深くて尊い精神土壌なのです。偉人の威力や是の如し。

「半宵剣をたずさえて寒月を望めば、古今の英雄眼中に在り」との大抱負を吐いたのは明治維新を成し遂げた西郷南洲です。彼も無三禅師に就いて大悟した豪傑です。

山岡鐵舟も滴水禅師下の英傑でした。胃癌のためいよいよ死ぬ時が来た。「腹はれて苦しき中に明け烏」と嘯き、苦しいに成り切って泰然と五十一年の露の世に幕を閉じたのです。波瀾万丈の英傑の辞世、まことに天晴れ大和魂と言うしかありません。

恨みや憎しみの戦いではなく、西欧列国の餌食になることを憂慮し、植民地化を防ぐための策だったのです。国有って私怨無し。江戸城の無血開城は、双方小を捨て大を取り、日本国の将来を思って成し遂げた快挙です。これこそ日本にしか出来ない美しい革命でした。双方の指揮官はみな禅定力によって私念が無かったからです。虎視眈々と狙う西欧列強国の動きを見据えていたのです。アジアで植民地にならなかったのは日本だけです。あの手この手で侵略しようとする列国を、腹が据った偉大な指導者が巧くかわしたから救われたのです。こうした偉人の功績と歴史は正しくしっかり伝えるべきです。

大雑把に言えば、アジア全体、乱暴列強の植民地支配から独立することが出来たのは日本があったからです。この底力を欧米が恐れたのです。

夏の夜も寝覚めがちにぞ明かしける　世のため思ふこと多くして　（明治大帝）

記憶に生々しいあの大災害の大混乱においても、一人々々の矜持精神が高いが為に、助け合いこそす

れ略奪など卑劣な事をしなかったのです。そもそもからして素晴らしい精神土壌の国に育ったからです。世界中が本当に驚嘆した美徳です。

君よ聞け　仏の説きし法はただ　国を治めん謀なり
四方の海　みな腹からと思う世に　など波風の立ち騒ぐらむ　（明治大帝）

五、偉大な祖師現わる

ここからは生ぬるい言い方は止めにする。事が重大だからである。欠老は医業専一の時、コレラの大流行により日々死者七百名を見る。忽ち大無常観に襲われ、広島県三原市にある仏通寺管長香川寛量会下に身を投じ、昼はもちろん、夜は猛虎岩にて命がけの打坐。わずか六ヶ月で一隻眼（心眼）を体得されたことは有名である。直ちに証明印可された。

さらに、これで足れりとせず、公案を持っては天下第一と知られた南天棒（中原鄧州）の門へ身を投じられた。児玉源太郎大将も乃木大将も、自照居士も大智老尼も参じた時の巨匠である。

南天棒の往くところに随って居を移し、行くところで医業を営みつつ菩提の行願を究尽すべく参師聞法された途方もない努力家であった。人みな菩提心居士と称し近寄りがたかったという。この過程において公案をすべて看破し、これが後に或物になる。

一方では暇を見ては虎溪山に赴き独坐。即わち只管打坐に精魂を傾けられていた。遂に天地と融合し世尊明星の那一刹を体得し、真箇の解脱を得たのである。虎溪山中にて余塵を尽くし切った道力は、将に迦葉尊者の復活であった。一隻眼を具し、悟後の修行十六年の後である。転た悟れば転た捨てた大悟底は一千七百人の諸仏祖師方を凌駕し、真箇の古仏となったのである。

あれほど私淑していた師を、

「南天棒、仏法未だ夢にだも知らず！」と吐露された。仏祖の堂奥をもってこの言在り。決して軽蔑したのではない。さすがの南天棒もここの四智円満、無用の用までは至っていなかったと言うたまで。南天棒も公案禅の殻から免れ得ていなかったからである。なんと師を超えること百歩。応・燈・関以来の境地に達し得た近現代の途方も無い巨匠である。

ついでだが、何故虎溪山に赴かれたかの真意は本人のみぞ知る。吾人一人思う。関山国師八年の思慕にあるかと。関山国師は大悟して虎溪山の村に入り、小さなお堂で生活しながらお百姓さんに毎日こき使われて道力を錬った偉人である。大法の人は常にこうした祖師と共に在ることを熱望して止まないからだ。熱烈なる菩提心の故にである。大燈国師亡き後、直ちに朝廷に引き出されて後醍醐天皇の師となった巨匠である。

香厳は忠国師を慕い、霊墓のそばに庵を立てて祖心を敬う純心な毎日であった。果たせるかな純の純に至り、撃竹の音で自己を忘じ大悟した。これがあの有名な「香厳撃竹」である。菩提心と祖師は一枚ものである。只管打坐がその証明である。

菩提心居士の名で知られた欠老にしてこの勝跡無きにしも非ず。今まさに我ら、愛すべし学ぶべき欠老のこの勝跡。道統を願うものはみな然りとなさん。元古仏いわく、「須く慕古を具すべし」と。真なるかなこの言。斯くて正法は伝統されているのである。嗚呼。

六、博覧強記

東大医学部を次席で卒業された頭脳は正に博覧強記。一度読んだもの、聞いたこと、見た物、考えたことなど、その殆どを記憶している頭脳のことである。全祖録に参じ、古人の足らざるを補いつつの提唱録は凄い。「槐安国語」「仏祖正伝禅戒抄」「碧巌録」「無門関」を初めとして孤高ものばかりである。

七翰林（超アカデミックな文才）圜悟・宏智・萬松・無門・雪竇禅師をも凌いだ力量故に格調がすこぶる高い。仏法護持のため専門家育成を目下の急務とされていた。そのため専門語を駆使し、諸仏の語話を自在に引用されている。どまでも高尚なのはそのためである。それゆえに容易に手が届かずみな投げてしまう。易きに堕すと無道心の輩は語句に捕らわれるからだ。大慧禅師が碧巌を焼いたのはその害を救うための大きな慈悲である。それほど高度であり深淵無比なる法財である。

それ程の法財故に、欟老の全集に精通すれば全祖録を周知したことになる。正に正に、祖録の中の祖録なのである。第一級品であり南針中の南針である。それだけレベルが高くて難解である。

世は安易を望む。否否。菩提心を起こせばたちどころに無辺の功徳を得る。菩提心の眼とは何ぞと参究すべし。

大燈国師曰く、「無理会の処に向かって究め来たり究め去るべし」と。「今」「只」せよということだ。分かっても分からなくても「只」読め。何度でも読めと言うことである。

七、欟老と自照居士

大智老尼の父・島田自照居士は五家七宗に精通していて、各地で仏教演説をし、遠くは招かれてハワイまで行き、その講録が現地の有志により編纂されているそうである。後には欟老の弟子となり兄弟杯を交わした道友である。出会う度にお世話をしていた娘の大智老尼は、欟老より直接或いは自照居士より堂奥の秘中の事を多年にわたってごく自然に聞取されていた。是れが大いに吾人の底力に成っていると言えよう。

吾人の母・天地は自照居士の娘であり大智老尼の妹である。平成二十三年百歳で逝去したが、老大師より悪辣の鉗鎚を受けた最後の人であった。最早欟老の指導を直接受けた弟子は誰も居ない。

欟老・自照の両傑はそれまで無縁であった。時節当来か、将に因縁か。或る人士の計らいによって対決することとなった。そのご褒美が凄い。吾人も聞いてビックリ。「負けたら弟子に成る」と言う生涯を掛けたとっときの賞品である。自信横溢たる二人はこうした約束で法戦が行われた。これが出会いの発端であったというから、並の出会いではない。剣客なら決闘であり命がけだ。勝って何かある。優劣を決するのみ。こうした法戦は双方のみならず法の為、世の燈明となるものが格別大きいのだ。

仏典に精通しているといえども自照居士は未徹の人。されど法を解す力は卓越していたので、忽ち老大師の力量を深く見抜き心底感服した。極めて潔く即座に弟子の礼を取って教えを請うことと成った由。痛快思うべし。見習うべき美風ではないか。皆斯くありたし。

大智老尼曰く、

「それはそうだろう。欟隠老師は釈尊の落とし子ぞ。祖師の中の祖師ぞ。さすがの自照居士も勝てる筈が無いでは無いか！」と呵呵大笑。大法の親子は是の如し。その破顔微笑なお目に鮮やかにして懐かしきかぎりである。この粋な計らいをした人物が誰であったのかは遥として不明の侭である。

吾人の推測に過ぎないが、中館長風居士（軍医総監）か岡田自適居士か。或いは大石正巳居士か。はたまた両参人か。共に欟老下の大居士連であり名医であり政治家である。

欟老を出家せしめ、あの「槐安国語提唱録」の法王を世に出さしめ、欟老六十五歳の時、時の内閣総理大臣若槻礼次郎を始め、閣僚一同、政財界の有志を欟老に参禅せしめた歴々たる大家である。二両傑の出会いを内心ニヤリとしながら見守っていたに違いない。勝敗は初めから決まっているからだ。自照居士の負け振りを楽しみにしていたであろう臭いがする。思った通りの成り行きに一同満足したはずである。仲間に一人の豪傑が加わることになったからだ。

「興禅護國会」は誰も知る大禅会である。渋沢栄一・後藤新平・高橋是清・岩崎久弥・鳩山一郎等、政財界の御歴々が名を連ね参禅していた、当時日本最高の権威有る大禅会である。老大師の時、未曾有の大盛会を極め、その数四百数十名だったという。その会長が大石正巳（大典）居士であった。

推測の根拠がただ一つある。大石正巳居士は漢文詩偈にも精通していた学識豊かな傑物である。自照居士も然りだ。その彼が愛用していた龍の彫り物入りの豪快な黒檀の「笏」（威厳具の一つ）。これがここ少林窟道場に有ることだ。自照居士が直々に頂いたものである。重大な縁が無ければ有り得ぬ筈の物だからだ。自照居士より大智老尼に渡り、そして吾人に授与されたその謎の一品が小さな床の間で燦然と輝いている。

大法を筋書きにした往時の華々しいドラマを彷彿とさせている大切な代物である。毎日これを拝するにただ涙あるのみ。

ちょっと筋違いの話だが、紙の全面統制時代に突入したとき、「大乗禅」と「大法輪」の冊子のみ紙が供給され出版が続いた。二冊子とも禅を中心とした宗教誌である。「興禅護國会」のメンバーによる政治的配慮であり、国を挙げて精神性を如何に大切にされていたか、日本の徳性を知る好材料と言えよう。

八、欟隠文敬の由来

大法成就された欟老は、後世の為に法系をキチンとしておきたい念があった。祖師における祖録に準ずれば当然である。そこで応・燈・関の流れである白隠禅師。その神足中、遂翁系の一枝軒敬峰を訪らいその法系を継いだ。「敬」の一字をもらい、ほんの一時期「欟隠文敬」を名乗っていた時がある。これで稽首していた応・燈・関の孫であることを証明したことになる。

九、「敬」と無字

「右題趙州無字」と書かれた掛け軸がここ少林窟道場にある。有り難いことに、弟子の幽雪和尚が探し求め寄贈してくれた貴重な物。是れから言うことは、熱燗に焼きたてのウナギだ。美味いぞ、美味いぞ。

一枝軒に嗣法して間もなく、まだ出家以前に拈提したものである。「敬」或いは「文敬」と書した揮毫は珍しい。この手は此の一幅のみであろう。内容が面白いのでここに記して諸人の眼睛を楽しませたいと思う。

無々々々無々無生死逆只是無了々・々了
時無可了無々々無々無々無　・一字贅順欿
別々六月買松風人間恐無價
右題趙州無字　無聖　敬　□　□

これが全文である。人々の力で見れば良い。ちょっとこじつけてみる。大方の批判も楽しからずや。

「無は無なり。無は無も無し。無は生死無し。逆けば只是れ無なり。了々。・々。了の時、無を了ずべきなし。無は無なり。無は無にして無は無も無きなり。・々の一字は贅にて順に欿く。

別々。六月に松風を買う人間恐らく価い無し。

右趙州無字に題す　　無聖　敬　□　□」

吾人はこのように読んでみた。色々読み方があって良い。他人の口では食えぬが、語句は死物ゆえに勝手に如何様にも解することができる、これが危ない。高く眼を着けよとはこのことである。さて、

「無は無なり。無は無も無し。無は生死無し」。このように読めば分かるはずだ。次の「逆」の字は面白いので人々調べて見てはと思う。欟老は、「別の言い方で説けば」の「説」の意に使っている。蛇足だが祖録の語句は中国の方言が多くある。我が国の漢字辞典では意味の違った訳になってしまうこともある。『中日大辞典』（愛知大学編）なども併用すると良い。

「逆けば只是れ無」。分かりやすく言えば「只」これ「無」よ。この「只」が恐ろしい急所である。要するに「只」は禅の結論である。脱落身心の内容である。安易に見るなよと。「只」即「無」よ。

「了々」。そんなことは初めから分かりきっておる。口は鼻の下にあり、眼は横に並んでいる。今更なにを言うのじゃ。眼が眼と言うか。「無」は「無」であり何の理屈も無いことぐらいとっくに分かっておるわいと。次が又愉快なところだ。

「・々」。これに就いては後に説く。面白いから取っておきたい。

「了の時、無を了ずべきなし」。喉が渇いたら一杯の水を飲めばよい。たったその一事実で喉の渇きという問題は忽然として消える。更に渇きを詮索する必要はない。古人曰く、「更に頭上に頭を案じて何かせん」と。問題が無ければ即わち「了」である。

烏はカアカア、犬はワンワン。しかしカアカア、ワンワンは烏でも犬でもない。ここが大切な処だ。真実と虚像の境が分かるや否やである。カアカア、ワンワンは「只」カアカア、ワンワンである。当然では無いか。これが法であり真理である。ここが本当に体得できれば見聞覚知が一瞬の作用で終わっていて何事も無いことがはっきりする。まさに「了々」である。

道元禅師曰く、「薪が燃えて灰になるにあらず。薪は薪の法位に住し、灰は灰の法位に住す」「今」「今」既に完結し終わっているぞと。これを冷煖自知と言い欟老は「無を了ずべきなし」と言うた。有無を超えて初めて「了」である。本当の「無」である。

もう聞き飽きたよそで啼け　うとまれるなよホトトギス

「無は無なり。無は無にして無は無も無きなり」。これも一読了々。人々の力で「無」の真意を識得すれば良い。無を「空」に置き換えても面白し。

無というもあたら言葉の障りかな　無とも思わぬ時ぞ無となる　（至道無難禅師）

思わじと思うものを思うなり　思わじとだに思わじな君

歌にすれば右の事だが、実地は「行かんと要せば便ち行き、坐せんと要せば便ち坐す。咳唾掉臂（がいだたくび）（咳込んだり肘を上げ下げする）豈に別人の力を借らんや」。これを本当に知ることを「見性」という。

「・々の一字は贅（ぜい）にて順を欲（か）く」。面白いと言ったのは是れだ。「・一字」とは前の「・々」を指す。つまり「・」でしめした「々」の一字、即わち「了」が一箇余分であり無駄でありくどいと、白状して訂正しているのだ。丁寧は君徳を損ず。好事も無きに如かずを示された。

「分かった、分かった」の返答ならば、「ああそうか、分かったらそれで良い。許す」となる。だがその

上一言余分に「分かったよ」となればムッとする。俺に喧嘩を売るのか！　となる。口は災いの元と通じている。つまり、過ぎたるは及ばざるが如し、と言う訳だ。だから過ちを改むるに憚ること莫れ、を看取せよと。先に謝り改めた方が後々良いぞというわけだ。間違えるという真理もあるが、潔く訂正するところが檪老らしいではないか。この潔さ、自己の無いところが万能薬で、ここを見習わねばならぬ。

因みに「贅」は贅沢と連なり無駄で余分なぶら下がり物のこと。くどくて見苦しいということ。「順」は水が同じ方向へ流れて乱れぬ様。「欽」はかけるで、上の字にかかり「順」を乱すので見苦しいの意と見れば良い。とにかく余分で無駄だということ。

「別々」。この語句は祖録にしばしば出る。それはそれで良いが、別にとっときが有るぞ。見誤るなよ、との意である。前後にかかる語だから、使った人に成って読まないと真意を取り違えるやつだ。

「六月に松風を買う人間恐らく価い無し」。日本の六月は最も好時節である。暑からず寒からずだ。なのにわざわざ扇子や団扇や扇風機などを探し求めた人間は不必要だから恐らく使わぬはずだ。役立たぬ物、無用な物を探し回り求める愚を止めよ。「無」を探し回っても徒労に帰すだけ、と解するも間違いではない。しかしながら最上では無い。前に「別々」とある。気をつけねばならぬところだ。

「無用の用」こそが大切な法の極致である。六月ならやがて直ぐに夏が来て暑さに責め立てられる。「無」が無用になるまで徹底無を離すなという事である。これを、「無を参究す」という。ここを皆間違えているから埒が明かぬ。このままで良いと教えたり受け取るから修行にならないのだ。

無門慧開禅師曰く、「平生の気力を尽くしてこの無字を挙せよ」と。大慧禅師も同じく、「無を祇麼（只・ひたすら）に挙せよ」と諭している。満身無字に成り切れ。必ず徹して自己を忘じて悟るぞと。この言を信じないから間違ってしまう。とにかく四六時中「無」を離すなと厳重注意しているのだ。一心を錬るとはこのことである。皆見誤っているから徹することが出来ない。ここが初発心の真偽に関わる大切なところだ。とにかく祖師方が大手形を切って助けてくれている。誰かこれを信ぜざる。

夏が過ぎれば用いる必要がなくなるが、夏の間は離したら暑さから免れぬ。自我の葛藤迷道から救われぬと言う事。自我を殺す為の「無」であることを忘れるなと。

全て無だから要らぬと投げ出したらお終いぞ。多くの禅界が「そのまま悟り」の魔道を振りまいて迷わせているのは、みなこの手である。白隠禅師はこれらを「立ち枯れ禅」と言い、大慧は「土地神禅（お地蔵さん）」と言って役立たずの禅を戒めている。

煩悩即菩提とは仏法の常套語である。煩悩と菩提がいっしょな訳が無い。仏法は実地で練り取る道である。何の為の坐禅ぞ。自己と物と隔てている癖を取って初めて煩悩が菩提であったと体達するのだ。取り尽くし捨て尽くせよという諸仏祖師方の金口を間違えてはならぬ。

使い尽くした後が「無用の用」である。ここが「無」である。檪老の真意や有り難し。「了々」。

性空禅師曰く、「多年擬著す趙州の無。疑い去り疑い来たって有無に渉る。銀山鉄壁己を忘ずる時、通身吐露す一声の無」。ここで初めて煩悩即菩提となり「無用の用」の一大事が本当に現成した。本当の「無」を得て自由無礙、闊達自在の快活無限の人となった。

「六月に松風を買う人間恐らく価い無し」を受け取りそこねるなよ。大切な処だ。檪老のお取り次ぎをした迄。別々。参。

無門禅師に面白い句がある。「無無無無無無、無無無無無無無、無無無無無無」と五言絶句にしたものだ。風流ならずや。欠伸はこれに和韻されたものか。欠伸独自の風光や鋭し。

大燈国師の、「無理会の処に向かって究め来たり究め去るべし」がやはり良い。何処までも向上底だからである。菩提心とは捨て尽くすことである。無理会の処とは、心念無性と体達した境界にて、［心意識の運転をやめ、念想観の測量をやめた］者でなければ分からぬ処だ。

「無」は尊く「敬」は珍しという話。欠伸の救いの「無」音や限り無し。無無、了了。参。

十、欠伸の出家

老大師は後には系統など全く問題にしなかった。何故か。宗祖の心がどこにもなかったからだ。欠伸を今でも臨済系一枝軒敬峰の流れと思っている者も少なくないし、又曹洞系原田祖岳老師の弟子だと言う者も居る。

文字上の流れはその通りだ。臨済より曹洞に鞍替えしたことになる。その真意をみな計りかねて色々に言っているが、吾人は老大師の真意を聞いているので、どちらも違うと伝えておきたい。満身ただ大法護持の一念から自然にそうなったまでだ。琵琶湖を見て大海と思う莫れ。欠伸はそんじょそこらには居ない。何故なら、超仏越祖の大修行底は老大師のみ。仏眼祖眼の欠伸には三派（曹洞・臨済・黄檗）は有って無きが故にである。

焦芽敗種（役たたず）の輩から仏祖の種芽を守らねばならぬ、とは欠伸の口癖であった。だが出家者は在俗に頭を下げて参師聞法に来ないのが現実である。だからプロが育たぬ。この世間の事実を憂慮した道友の大居士連が、欠伸をして世の涼蔭樹（真実の指導者）を輩出せしめんと、三宝（仏・法・僧）を備えるべく出家をつよく勧めたのだ。大居士連とは欠伸と自照居士と対決させた人物である。

欠伸には九人の子供が居た。大勢の子供の養育には相当の経済が伴う。それらを密かに大居士連の有志が賄うことを条件に出家を懇情した。道を思う道友の熱誠は欠伸直伝である。それに応えて遂に出家を決意されたのである。このことは一般には全く知られていない。知る人は恐らくは自照居士のみであろう。

大法の為に決意された欠伸は、私淑してやまなかった趙州古仏の六十歳再行脚に因み、自身も六十歳にして、大正十一年、発心寺の原田祖岳老師の下で出家された。弟子になったのでは無い。まあ、行持綿密で真面目だったからそこで出家したと。

十一、何故曹洞宗か

何故曹洞を選んだかを大智老尼に問うてみた。大智老尼は何でも聞いておられたからだ。

「ああ。そんなことか。自照居士が言うには、二つ理由が有ったそうだ。一つは、今日の公案禅は小賢しい理屈を増長させるばかりで一利無し。只管打坐でこの弊を打破すべし。それには曹洞が良いと。

もう一つは、寺や僧が多かったのと、放縦に走る僧が臨済に多かったらしい。百姓禅と言われるだけあって小粒ながらこつこつまじめにする坊主が曹洞宗に多かったからだと（老大師が）言ってた」そうである。又、「法は居士に移りつつある。坊主の子供に菩提心の有る奴を看たことが無い」と。

そう言えば吾人も思う。寺の息子が熱烈に求道している姿を見たことがない。祖録のことさえ知らないものが多い。志して出家した人はみな欠伸隠老師を知っている。欠伸の言や正し。

臨済寺院は五千余。曹洞は一万五千余り。僧侶の多さと只管打坐を宗旨とした曹洞を選んだまで。ただそれだけのようである。

古仏の真血悲心を曲解し悪毒を蒔いて魔道に落としている源泉は菩提心無き仏教学者による。形のみの

坐禅をして何の益ぞと示唆した諸仏祖師方の慈悲を無視した罪は恐ろしい。惨悔、惨悔。

十二、「少林窟道場」の開闢

それほど簡単な話だったようだ。その本心は嘆きでもあるが、何処にも大解脱の法門を説く人物が居なかったので、系統も宗派も全く問題ではなかったのである。欠老にはもはや各印可状は全てただのちり紙であった。

大法滅尽の危機を救わんとされた老大師は、遂に高槻に**「少林窟道場」**を開単された。昭和六年のことである。その瞬間、それは**「欠隠宗」**が誕生した事を意味している。目出度き哉、有り難き哉。

そこで真の宗師である**欠隠老大師を宗祖**として、義光老師と大智老尼は殊更に**「欠隠宗」**を掲げ正法の旗印にされた。それが**「少林窟道場」**である。勿論欠老はただ大法護持の一念のみ。ことさらに「欠隠宗」と言うは禅要を尽くし切った孤高の禅機・禅風を慕う門下の標榜に過ぎない。新たに宗派云々という娑婆臭い話ではない。

老大師の真訣を敬慕し、以後菩提心で宗祖の心血を道統するに違いない。乾竹に汁を搾ることの容易でないことを菩血提涙に託されたのだ。諸仏祖師の復活を願うのみである。この混迷する世界を救うは菩提心を喚起し、只管打坐、即脱落しかないからである。少林窟幸い菩提心有るあり。看よ。咄。

十三、 翫月山（がんげつざん） 勝運寺（しょうううんじ）

ここで欠老の舞台となる「翫月山　勝運寺」をざっと紹介しておく時が来た。

風光明媚な瀬戸内海は今や世界的にその美しさが知られつつある。波穏やかにして大小様々な島々が語りかける大自然の絶景は見る人を魅了する。ましてや船旅をした者には忘れられない。平（たいらの）忠盛（ただもり）や清盛（きよもり）が往来した一千年前のドラマを知ればいよいよその美しさは歴史に裏付けされて格別重厚なものになる。

海と島は変わらないが、歴史や人々は変わる。人は変わる物も変わらぬ物も見る。海も空も、流れも時々変化する。その変化することは変わらない。そこにそのまま昔をも見ているのだ。

瀬戸内海は干満の差が激しく、潮流の変化も著しい。海上の戦となればそれを熟知したものが海上を制することになる。平家が敗れたのはこの熟知の有無にあったという。知る者と知らざる者は、初めから結果が決まっていると言えよう。

戦国時代、天下の秀吉が恐れた「浦（うら）（能美（のうみ））宗勝（むねかつ）」という武将がいた。智勇共に突出していたようである。熟知した海の強者（つわもの）を束ね、瀬戸内海全域を制していた武将と言われている。彼が菩提寺として建てた城構えの感がする寺がこの「勝運寺」である。この寺には珍しい宝とすべきものが五つある。

第一に、万仞道坦（ばんじんどうたん）禅師（1698－1775）がここに客僧として逗留し、道元禅師の「仏祖正伝禅戒抄（しょう）」を編纂した寺であること。この祖録は仏祖の堂奥を説き尽くした元古仏の血涙だけに、容易に紐解ける物では無い。今流布しているものは元古仏の真意を伝えやすく、且つ活用しやすく道坦禅師が組織立てられたものである。他に広く読まれている「生死辨（しょうじべん）」「三物秘辨（さんもつひべん）」も道坦禅師の力作である。

それを五百年間出の巨匠　飯田欠隠老師が、奇しくもこの寺の同室にて提唱されたことである。それが「仏祖正伝禅戒抄提唱」である。欠老にして初めて可能となった名著であり、誇るべき二つ目が是れである。これを一梓として吾人が初めて世に出したが既に在庫無きを怨となす。つぎのドラマに続く。

それが三つ目である。欠老はここで他に「普勧坐禅儀（ふかんざぜんぎ）一茎草（いっきょうそう）」をはじめとして「般若心経恁麼来（はんにゃしんぎょういんもらい）」

「証道歌提唱」「趙州録開演普説」を執筆された。趙州禅師は檪老が私淑された最高の祖師である。

「趙州録開莚普説」を書き終わられた時の描写に次のような一説がある。（一〇四頁）

「この床の間にかけてある雲門の肉筆が風に吹かれてコトコト。あな尊と、あな心地よし。千年以前と相見了じゃ。この頌が有り難い」とある。それを記してみる。

説到忘言処。　説いて言を忘ずる処に到る。
無詩可飽君。　無詩にして君を飽かしむ。
復将臨別意。　復び将に別れに臨んでの意。
一点落黄雲。　一点黄雲に落つ。

一千年以前の祖師中の祖師の書である。写真の如く実に筆を自在にされた書き振りに感嘆おく能わず。裏書に「雲門大師の敷き写し」と有るから真筆では無い。されど非常に近い物であろう。そこには「飽」ではなく、「贈」となっている。檪老は「飽」と読んだ。吾人もそう読んだ。裏書きに拠ってようやく読める物で、実に判読が難しく、筆勢も書体も見事なものだ。

頌や詩、或いは文化や芸術などはそれぞれが味わうべきものであろう。「贈」としてこじつけて読めば、無詩こそ君に贈らんとす（妄想・妄念・妄覚を離れた心境を君に贈る）になるし、「飽」とすれば、無詩が分かれば君もう充分だろうの意にも成る。

吾人は後者をとる。

「黄雲」は「黄」に意味が有る。中国では黄色を最も高貴・幸運の色とする。去って行く空に目出度い黄色の雲がある。あれを君に贈る。それがお別れの私の気持ちだとも何とも思わず、「只」一点黄雲に落つと。

去来今を絶した雲門大師。じつにさっぱりとした心境が染み渡る大切な軸であり、今少林窟道場に寄贈され輝いている。

もう一つ、之の詩に因んだエピソードがある。雲門大師四五百年後、有名な詩人「陳献章」が次のように謳った。

説到忘言処。無詩可贈君。許将臨別意。一点落黄雲。

よほど惚れ込んだと見える。わずか一字か二字異なるだけだ。パクリだとも言えそうであるが、時として現れる諸説は後の編集者のちょっとしたことで生まれることもある。

四つめは、日本画壇を代表する平山郁夫画伯と劇作家の高橋玄洋氏が下宿していたことだ。ここから直ぐ近くの「エデンの海」で知られる現在の忠海高校へ通っていた。池田勇人首相も出た学校である。小学時代、吾人も両人に遊んでもらった？　弄ばれた？　若かりし時の画伯はあれでなかなかのいたずら好きであった。

彼は秀才であり狩野派の系につらなる人だと聞いたが、やはりその筋の才は光っていた。筆でもペンでも鉛筆でもささっと描いた何気ない絵が、子供の吾人も凄いと目を見はらせるものだった。すんなり芸大に入り、学長にまで成られた画聖である。学生時代帰郷の途には必ず立ち寄りみんなを笑わせる人であった。

最も印象的だったのは、「この度は新しい香道を披露します」と言ったかと思うと、棚の小さな花瓶を持ち出し、にんまりしながらその中に「えい！」というかけ一声「屁」を忍ばせた。香道よろしく恭しく嗅いで、「これ、如何ですか？」と手でふさいだ花瓶を父に渡した。

父も義光老師・義衍老師の弟であり歴きとした禅僧である。ふさいで受け取った花瓶をそれらしく嗅

いで、「うん、まだまだじゃのう」といったかとおもうと、「どうじゃ！」といって自分の屁を入れて同じように渡し、みんなそれぞれ自慢の特別な香を回して蘊蓄？を楽しみ、彼が来るといつも大爆笑づくしだった。

子供はこの奇妙な戯れに大人の余裕と想像も付かない変なことをして楽しむ光景が不思議だった。だったら子供のいたずらぐらい怒るなよ、と思ったものだ。そういう面白い人であって思い出すと懐かしい。

ついでに言えば、平山郁夫画伯の父である平山峰吉氏は義光老師にも義衍老師にも参じていた禅者である。シルクロード編もそうであるように仏画が多いのはそうした父に大きく影響を受けていたからである。

後に出てくるが義衍老師と平山峰吉氏がとった或る行為が、間接的ながら命に関わる事になってしまったのだ。決して両人の責任では無い。

五つめは、欠隠禅の宗風を掲げた少林窟道場があることだ。以上これが大まかな勝運寺の紹介である。

十四、療養の中で

因みに義光老師と十八歳も違う病弱な大智老尼を結びつけたのは他でもない欠老その人である。担架で嫁入りした話は聞いたことが無い。そんな重病人だったのだ。看語に付き添って来たのがまだ十六歳の妹であり、後に我が母となった人である。大法の存続を念願とする老大師と、既に亡き自照居士の切なる道念の約束からであった。将に道あって身を忘る底の両人である。誰か泣かざらんや。あゝ。

欠老は高槻に少林窟道場を開単されて間もなく不幸にして病に倒れられた。だが既に立派な跡継ぎが出来上がっていた。伊牟田欠文老師である。彼を二世に定めて各地の禅界と少林窟道場を任せた。そして勝運寺へ客僧として来られたのは二つの目的が有った。療養がてら義光老師と大智老尼を最後まで仕上げて道統を愛でることだった。

我が如く我れを思はん人もがな　さてもやうきと世を試みん

大智老尼は元看護士であったため薬も器具も一通り持っていて、幼小の吾人は薬品臭い大智老尼のあの部屋は苦手であった。昔のあの病院の臭いである。ともあれ思い出とは懐かしいものだ。

環境のよろしきを得られた欠老は執筆に駆られ、資料豊かな義光老師のもとでいよいよその活動を専らにされたようだ。義光老師は一時期、広島大学で講義されていたため資料には事欠かなかったようである。

正に席の温まる時がなかった事は明らかである。病躯は完治したかに見えて帰られた。しかし法筵の途、再び発病されたことを思うと、やはり完治していなかったのだ。大智老尼の愁嘆は更に菩提心を駆り立てることとなった。

十五、南井白巌居士

既に故人ではあるが、又欠老を知る上で吾人にとって更に幸いしたのは、二十年以上南井白巌居士と深く関わったことである。縁あって吾人は彼の次男さんの仲人もした。晩年我が海蔵寺において出家し、親子ほども年下の吾人の弟子と成った好人物であった。老大師も当時のこの若き求道者をいたく愛していた。

菩提心切なる人で、彼は常に老大師を語って止まなかった。こうした老居士より問取した数々の話も又禅機極まるものである。欠老に終始随身すること六年。

「女でお前より先にぶち抜いた者が居るぞ」と大いに叱咤激励を受けた猛烈な参学者だ。欠老遷化を見届けた、ただ一人の他人である。吐露して曰く、

「遷化の時をあれこれ言う弟子達が居るが、親族と私以外、誰も居なかったので皆嘘だ」と。

老大師遷化の後、南井居士は更に義光老師・大智老尼に就いて多年研参した老居士である。二條健基公（明治大帝の御孫様であり昭和天皇の御従弟様）とすこぶる親交の篤い方であった。
勿体ないことに、吾人もこの殿下ご夫妻には大変ご親交を頂いたのも南井白巌居士のご縁である。

南井居士の菩提心は欟老譲りであった為、欟老亡きあと義光老師に師事するためここ勝運寺へ初上山した折り、大智老尼の振る舞いを一見して、
「あんたさんがぶち抜いたという大智さんでっか？」と聞いたら、
「どうしてそれが分かる？」と言われて、
「今、今の動きが欟隠老師と同じ雰囲気ですわ」と言うたら、
「私を見抜いたのは貴方が初めてだ」と言われた。
「ワテはな、通算六年間ずっと老大師にホッペタを、或る時は警策で散々叩かれて来ましたんやで。一見して分かります。と言うたら、とても喜んでくれましたでっせ」と初参の感想を聞かせてくれた。

死期迫る大智老尼の最後の見舞いに来られ、全く平素の侭、二人は意気軒昂で法談されていた。
「貴女さんが居なくなると、欟隠老師の話が出来なくなりますな。それがワシには寂しいですわ。一日も長生きしておくれやす」と、終始にこにこしている老尼に品の良い会釈をしつつ歓談が続いた。それが二人の最後であった。肉親のような情でなく、透明で深く、気高くて暖かい、温情に満ちあふれた情は、正しく老大師の菩提心を源としたものである。そこには生死を語りながら生死はなかった。元古仏の、「須く慕古を具すべし」そのものであった。

南井居士は御国の為と、終戦直前には木製飛行機を完成させ、試験飛行までこぎ着けたり、松下幸之助氏や元宇野総理など政財界の人と深いつながりを持ち、希有にして恐れを知らない面白い快人物だった。

南井宅は宮家も泊まられた旧家である。二條健基公（明治大帝の御孫様。昭和天皇の御従弟様）と御昵懇であり、不遜ながら吾人も殿下ご夫妻には大変お世話になった。これもみな南井白巌居士のご縁である。　吾人が知る当時は配達用トラック四十台を有するほどの滋賀県一の家具屋を清栄していた。縁去って既に久し。現在は如何なりや。琵琶湖大橋をまっすぐ守山市に向かうと、左側に「至道会本部」と大きな看板が立っていた。欟老が信心銘の「至道無難」に由来して彼に与えた坐禅会の名前である。小ぶりだが宗教法人格を有し禅堂・衆寮等を具えた本格的な修行道場である。
二條健基公もしばしば訪れておられた。一時は三万人の会員を擁し、宇野元総理もその一人であった。吾人は彼一人の為に毎月提唱に行っていた。
京都五山はもとより清水寺など、大抵のお寺は彼の戦い慣れた法戦で全戦全勝。陰で「道場破り」として各お寺はみな彼の訪れを恐れ嫌われながら尊敬された特異な人である。

本格的に至道会が稼働するに当たり、少林窟道場そのままを実践したことは素晴らしいことだ。それに先立ち賛同者を記した立派な芳名録を持参した時の話である。京都の名刹の有名な老師方の名前もずらりと並んでいた。例によってみな撃破された記録とも言えよう。そこへ大智老尼の名前列記を依頼した。一見した大智老尼は、
「あんたには名誉心があって真実の法の人では無い」と言って拒絶された。あの南井居士を百雑碎し、一句で天下太平にしたはさすが大智老尼である。

禅堂前の段にしゃがみ込み、何とも恥ずかしそうと言うか悔しそうと言うか、あんなに小さくなった南井居士を初めて見た。法に対してどこまでも純でありたいという意志が漲っており、とても真面目な人だけにちょっと切なく同情した吾人である。

奇しくも大腸癌となり尻から血を流しながらも悠然とし、法を語り呵々大笑して微塵も臆すること無きはなかなか大した力量であった。縁に任せて堂々と目出度く死んだ希有な人物であった。吾人が引導を渡したが、何と言ったか忘れてしまった。合掌。

十六、道環老

赤ちゃんは親も兄弟も一切の選択肢は無いまま知らないで生まれて来る。生まれ出たらその時その場の環境が自分の人生の始まる所である。勿論両親を始め色々な人間関係もすでにそこに存在している。何故かは三世の諸仏祖師方も分からない出た時勝負である。これが真理であり仏法では因縁所生の法と言う。人智の及ぶ世界では無い、将に計り知れない縁としか言いようが無い世界が今の現実相である。全てそうであり誰も皆そうである。だから面白いと言うべきであろう。

吾人にとって既にその時、大切な一人がそこに存在していた。吾人の兄弟子の道環老である。それが又義光老師の長男であり従弟であるから愉快な話だ。吾人が欟老を語れるのもこの道環老のお陰が大である。

今は道環老と親しく呼ぶが、欟老と過ごしたその時分は人生で最も多情多感な年代であり、真剣な求道者の青年僧であったから、欟老のいちゝが斬新であり刺激的で、欟老との生活がとても楽しかったようである。とても幸運であった。彼の詳細な記憶から欟老の所作全体がドラマのように伝わってくる。

彼は実に個性的で、分かりやすく言えば仙人であり無頼でもあり、変人にも見えるし聖人にも見えるような、風采など貪着の無いところが魅力だった。ちょっと変わっていたが、抜群の記憶力と独特な洞察力が鮮烈で当時子供の吾人は彼に魅了された。

彼についてここに一つ、とっておきの逸話を記してみる。もしこの話で呆気にとられなかったら余ほど腹が据わっている大物か変人か、若しくは感性が壊れている人である。有り得ないそんな話だ。

昔はどこも土葬であった。占領軍の命により放置された小山の墓所は道路や学校の埋め立てに使うため崩されていた。乱暴な話である。そこからいろいろな人骨が現れ子供心に無惨に思える光景であった。彼はそこから完全な頭蓋骨を持ち帰り、供養にと平然として磨き上げ大切に部屋に飾っていた。そんな彼を不気味ながら尊敬した。ところがである。それを拓鉢に必ず持ち歩いていたことから奇妙なドラマとなったのだ。当時の本物の禅僧はみんな托鉢遍参していたから結構な豪傑がうろうろしていた時代である。

元日や　冥途の旅の一里塚　目出度くもあり目出度くもなし

と元日から一騒動起こしたのは一休禅師である。それを気取ってか杖の先にその頭蓋骨を取り付け、京都市中を托鉢しバスに乗り込んだから話が話では無くなってしまった。

当然の如く事件となり警察沙汰になった。その時に南井白巌居士の名前が出たため呼び出された。近くであったし親しい間柄であったから身請け人としてである。

南井居士は彼の逸脱した破天荒振りに対し、人生の無常を骨子として堂々と一休禅師の宗教的鋭い示唆の大切さを説き、無理矢理に説得して道環老を立派な禅僧と位置づけて無事解放した。南井白巌居士の凄い一面である。

現在であったら大変なニュースになったろうけれども、当時はまだ余裕というか遊び心というか、何でもかんでも大袈裟に報道して罪にすることはなかった時代であった。結末は警察官の粋な計らいで、風呂敷で包んで人目に付かぬようにすれば宜しいで済んだのだ。何とも愉快な時代だったことよ。

警官相手に真剣勝負した当人の二人から事の子細を聞かされ、三人は腹が捩れて痛いほど爆笑した。奇っ怪か大胆か菩提心からかと、往時の一休騒ぎを現実に実感した。道環老はそういう特異で不思議なところが有り、愛され、疎まれ、尊敬されつつ飄々と我が道を楽しんだ自然体の人であった。

晩年は不幸にして片足を切断することとなり、いささか不自由な彼を吾人は常に同情して止まなかった。謂われ有るその逸品はその後も変わりなく自分の部屋に長く飾って供養していた。入って直ぐの、しかも調度目線の高さに有るから知らぬ者が入室した途端、腰を抜かさんばかりの悲鳴を上げていた。それを聞く度に吾人は爽快なる爆笑をした。別にそれを楽しみにしていたわけではない。自然発生的な無邪気な爆笑である。やっぱりなと。

どこまでも無風流な仙人であったが、欟老の生々しい人間的な別の様子は有り難くも彼から多く得ることが出来た。深く感謝している。近頃の変人奇人には大義も徳力も無く、危険な人物ばかりの気がする。こうした時代であればこそ後味の良い貴重な変人奇人が欲しいものだ。今なお道環老を愛して止まず。合掌。

常の道　踏み迷うなよおぼろ月

十七、自負する由縁

こうして吾人は幼少期よりとにかく老大師の話を聞かない日がなかったと言っても良い。山僧は図らずも斯様な環境に逢う。これ偶然か、これ菩提心か。事大法なれば今生のこの至宝、私を公にすべしと思うも自然であろう。

間接的であり大いに不遜ではあるが、巨匠欟隠老大師を語る任は我れに在ると自負する由縁は正に此処にある。

仏法残燈明滅の危機にある今、多年懐中に温めて『欟隠語録全集』を大成せんとする偶然では無いことを知っていただきたい。

少林窟幸い菩提心あるあり。乞う。菩提心をもって、次の祖関（そかん）（欟老語録抄）を百雑砕（ひゃくざっすい）（祖師方の難しい難問を粉々にする）する底の葛藤（語句であり救い。囚われたら迷い）を看取して頂けたら老大師の復活であり法の幸いである。百雑砕の砕はスイともサイとも読まれている。

老大師のこれらの法語は全体真金にして孤高の法財である。肝心なことは、満身菩提心に染まることである。菩提心、菩提心。

聞集

老大師の聞集に当たり

いよいよこれからである。ここから欟隠古仏の聞集となる。体験者からの聞き集めである。二聞（またきき）では無い。そこに求道者としての真剣さがあり、真実と熱意と気迫が直接伝わってくる。吾人も求道者だからだ。読む諸氏の眼睛（がんせい）もまた然りと思う。

否、欟老の熱誠溢れる生々しい様を通して、老大師の豪快無比なる活説法（かっせっぽう）を再活現前し、老大師の大慈大悲と大機に浸って頂きたい。

とにかく凡そ世の痛快な大事は堅固な意志と信念で貫き通した命の結晶である。吾を忘れて事に処して初めて為し得たものばかりだ。見るべきところは正にそこである。成り切って自己の無い闊達自在さ。余念余物、仏見法見無き境涯は応・燈・関以後の巨匠であることを看取されたし。

ただし、記憶に基づいての列記であるため前後のつけようがない。そのことはお許しいただきたい。

賽銭泥棒と老大師

誰でも若い時は色々なことをするし考える。道環老も漏れなく若さを発揮したようである。聞いて驚くかもしれないが、寺の息子にすればその寺の賽銭泥棒は格好の智恵試し物である。そこでいろいろのやり方を考案する。腕の見せ所というやつだ。彼は竹の先に鳥黐（とりもち）を付けて狙ったそうだ。そこへいつの間にか欟老が現れていて驚いたという。誰だって驚く。

「ほほう。巧いことを考えてやるんだな。坊は偉いな」と褒められたそうな。

ところが老大師はその事実を持って直ちに大智老尼を揺さぶる点検材料にされた。世間ではこれを告げ口と言う。しかし老大師は違う。どこまでも法の人を育てるための格好の法縁として闊達自在に使う。是非善悪の世界に居るような欟老ではない。常に仏法護持の人物を打ち出すためのみである。別目的があって法のために敢えて犯したのだ。とにかく大智老尼を仕上げたいばかりに。大慈大悲である。

持ち物、引っさげた者が内に有ったらすぐ外に現れる。何故か。真空太虚の眼を持って見れば相手がそのまま写る。黒白がはっきりする。一口に言う点検がこれである。

それを聞いた大智老尼からは、

「教育上よろしくない。老大師ともあろうお方が、何故注意をされなかったのか」らしき反撃があったそうだ。忽ち影が現れたということだ。

善悪を無視すると無秩序となり世を乱す。当然である。大智老尼は既に一隻眼（心眼）を具し、確かな法を得ているから自信を持って老大師に言えたのだ。だがあまり子供の自由を奪い、発想を妨げると大切な発達要素を阻害してしまう。善悪だけの道理一辺倒を悪差別と言い悪平等と言う。縛って融通が効かぬから成長を欠くし、一辺倒の個人尊重は放縦になる。普通一般の道徳論上の教育はそうであろう。

ここが大切なところで、誰にも個性という尊厳があり、道義に叶っていくように個性を伸ばすのが教育である。ここがなかなか一般ではできないところだ。成長と自由には発展（平等）と反省（差別）が伴わねば健全ではない。

元古仏曰く、「今はしばらく賓主なりと雖も皆これ当来の仏祖ならずや。大衆は乳水の如く交わるべし」とある。

善悪を超えた根本を自覚して大悟させるためである。病が分かれば薬が要る。欟老曰く、

「それが子供であり、親元だからイタズラしたまで。子供の智恵とはそうして発達していくものだよ。子

供を信じ切ってやれ」と道徳論を超えたところを諭されたようだ。
吾人には、コラ！　又引っかかったな！　と言う檪老の声が聞こえてくる。

同じ楽しみ方でも吾人はひと味違ったやり方だった。弟と二人であったからまんまと成功した。本堂のガラス戸は大きな音がするのを幸いに、弟に思い切りガラガラ開け閉めさせ、私がすかさず賽銭箱をひっくり返す作戦だった。あまりにもうまく行き過ぎ、根こそぎだったからほんの幾らかを返しておいた。空腹の為とはいえ痛快であった。檪老が見たら何と言うであろうか。

その時も決して良いことをしたとは思っていない。しかしとんでもない悪いことをしたとも思っていない。ただ滅多に出来ない悪戯にはそれなりに胸のときめくスリルとサスペンスがある。成功した時の満足感からは納得するものがある。何かが成長し何かが発展していて、興味は別へと進展していくものだ。だからそれで泥棒や悪人になった者は誰もいない。

子供は興味を持ち、確かめてみたいこと、危険で痛い目をしてでもどうしてもしてみたいことが沢山ある。して見なければ成長しないことが沢山ある。それをさせない親も沢山いるし、ほったらかして放縦にする親も沢山いる。いずれも適正とは言えない。

こうしたことを善悪で決める事は単純で楽なことだ。しかし健全な成長と自立を願うならば、信義や道義と智恵の発達。そして意志や五官の関係を単純に善悪だけで決めてはならない。ここに教育の妙味と大切さがあり、教育者や親の内容が問われるところである。

檪老は大教育者であるから大智老尼がそのことを知っているかどうか。悪差別や悪平等に陥っていないかどうか、大自然の摂理を知っているかどうか、畢竟、仏法を知っているかどうかを点検しているのである。

「ほほう。そんな面白い智恵が有りましたか！　先が楽しみですね！」と超越してけろっとしているどうかを試されたのだ。檪老ならではである。この老大師の真意を見て取るものがあれば大法は滅ばぬ。

急ぐ時は急ぐのが法

当時飛行機は魔法のような存在であったはずだ。学識豊かな老大師にしてみれば、飛行機の到来は時代の先駆けとして喜ばしく思われていた節がある。それは「安全に飛ぶ飛行機が出来た」と檪老の記述を読んだことがあるからだ。

或朝、老大師は飛行機の音を聞くや、急ぎ飛び出して、

「あっ、あっ。飛行機だ！　飛行機だ！」と、まるでみんなを誘いだすように叫んでいたとか。

道環老曰く、

「その時は単なる小包紐で着物を縛り、裸足だった」と。もしそうなら急ぐときには急ぐ。帯が見つからなければ間に合わせの物で急ぐ。それが差別地（智）の働きであり実地の自在さである。「今」を自在にするとはこのことである。何の道理も理屈もない。また裸足は履き物がなかったからか、急いでいた為か。あるいは別口か。これが急ぐ時の法である。檪老の境界天地一枚、自由無礙である。心に事無く、事に心なき境界の人を大善知識と言う。この限り無き働きが度衆生であり慈悲である。

耳に見て　目に聞くならば疑はじ　おのずからなる軒の玉水　（白隱）
枯れ果てて　しかも花咲く梅が枝に　声もたてず鶯の啼く

自我という迷いの袋が破れたらこの歌の有り難さが分かる。風吹けども入らず。水溌（みずはじ）けども著（つ）かず。四方八面来是れ何者ぞ。行為に上下も真偽もないが、人格には雲泥の差が有る。尋常の人が寄りつき得ぬは檪老の自在底であり、知音稀（ちいんまれ）なりとはこのことである。利口な者がここまでバカになることは難中の

難。容易なことではない。
　檪老越格の作用、如今に跡無し。見えたか！　見たら見ていない。見えなければ野狐の漢。参。

「潜行密用は愚の如く魯の如し。只能く相続するを主中の主と名づく」は洞山大師の名句であり、聖人の偉大さは自己を忘れた大馬鹿のことであるぞと、即今底の大切さを肝に命じてやれとの大師の厳命である。
　薬山大師の語を借りれば「経に経師あり、論に論師あり、山僧が事にかかわらず」と。「山僧が事」とは何ぞやと参究功夫すべし。仏祖も寄りつけぬ。さもありなん。他は是れ我れに非ず。即今に足りて他を要せぬ境界と知るべし。参。
　誰か知る遠き烟浪、別に好思量あることを。凜々たる高風、自ら誇らず。ただ道あるのみ。仏法の極致は自己を忘じて事に当たる。即わち、満身その物に成って自己無きを自得することにある。徹底身を忘れて見せつけているこの檪老の大悲を有り難く思わぬ者は更なる勉励を要す。菩提心を喚起せよだ。
　檪老の自在な働き、電光より速やかなり。「心に事無く、事に心無き境界」を見て取り迷雲を打破すべく修行を疎かにしてはならぬ。慚愧、々々。忽念々起、恐るべし、々〻〻〻。
　この時はさすがに大智老尼は引っかからなかったようである。

法要中の出来事

　お寺全般、色々な行事がある。父方の祖父は頑固ながら器用で細工物を作らせると相当な腕前だったが、桁違いに厳格だったらしい。子供も孫達も皆行持にきちっと準じさせていたという。
　その法要最中に飛行機の音がした。その瞬間檪老は、
「坊、飛行機だ。行こう、行こう。能く見ておきなさい」と子供達を外へ連れ出されたそうだ。みんな驚いたと言うが驚かない方が可笑しいだろう。是れ恁麼の消息ぞ。一体これはどういうことだ？
　大事な法要最中だというのに？　と一般の思うところはそんなところだ。爺様は内心激怒した。当然である。故に檪老を評して曰く、
「儂の目からすると、檪隠如きはまだまだじゃ」と大いに憚った。無理もない。世間の道理からすれば爺様が常識に違いないからである。そのようなことは承知の上の事。檪老それを聞いてにんまり。
「本まじゃ。本まじゃ。あの老漢（気骨のある禅者）からしたらそうだ、そうだ」と言われたそうである。純金は火に入れども変せず、転た鮮やかとはこれである。度量、正に極まりなし。自己なければなり。

　勿論道元禅師の「行持即仏法。作法是れ宗旨」の真意を知りきっての檪老である。真実の仏法は実（今）に成り切って自己を忘ずることにある。その時本当に「行持即仏法。作法是れ宗旨」と現成する。この消息を体得して初めて仏法となる。そのための坐禅修行ではないか。大事を為す者は大事を事とする。諸仏祖師方は仏法を事とし仏法を伝えて真箇の大安楽を得させようとする。大慈大悲とはこの大事大愛を言うのだ。言葉を換えれば菩提心の限り無い働きと思えば良い。もちろん形も大切であるが、大法の重さは比べ物にはならない。
　子供即将来。将来即仏法。徹底即今底の自由底は全世界を救っている。檪老の独壇場ただ是の如し。正に神通妙用、運水搬柴、自由無礙。乾坤独歩の境界これなり。神通妙用とも読む。
　一点の曇り無きを見誤ったら地獄に落ちること矢の如し。今の神聖を無視して勝手気ままととったら仏祖の罪人となる。目に立つものが何も無い。大活現前、軌則を存せず。大機大用とは是の事である。その人の大自由底が即度衆生である。大更に大を呑む檪老である。天真爛漫、子供の如し。

菩提心が深くなればそれがはっきりする。無い者はそれが分からんからどうしても二見に落ちて捕らわれ自失するのだ。大抵は道徳論や因果論で理屈をこね回すに過ぎない。是非の論議で侃々諤々請け合いである。これで世が乱れるのだ。

本当に大切なのは、今真実にあること。それが本当の供養だからである。そのことを身をもって示されたとっときの好事例である。活動即「空」を体得せしめ、世尊祖師方の大安心を味あわせたくて全てを投げ出しての済度である。四祖が牛頭法融を、南嶽禅師が馬祖を度すべく身を忘れて行くに似たり。実に勿体ないことではないか。

これらは何人からも何度も聞かされた。真似ては成らぬ。学ぶべきは別口であり根本である。菩提心なければ多くは看あやまる話だ。要は大を取って小を捨て、真を取って偽を捨てることだと心すべし。「清浮の行者涅槃に入らず。破戒の比丘地獄に落ちず」と経にある。即今底作麼生。地獄、涅槃作麼生と参究して初めて正路に入る。仏道修行の神聖と権威は「見性」にあることを決して忘れてはならぬ。

ともかく我が爺様は文化財並みのおっとろしい頑固者だったことは確かである。

狂と呼び暴と呼ぶ。他の評するに任す。桃紅李白自然の色。眼中に諸仏を見ざる底、大敵恐るるに足らず。ここいらで丹霞木仏、南泉斬猫、倶胝が法盗した童子の指を切ったのも慈悲徹困、時時宇宙百雑砕なるを解すべしである。されば欠伸老健在なり。仏法健在なり。

荒海や　佐渡に横たう天の川

何事もいふべきことは無かりけり　問はで答ふる松風の音

天晴れ、恥を知る禅僧

日本民族と言えば当然歴史を共有して日本文化を携えることに成る。我が国の文化は根底にワビさびを秘めていて、畢竟それは農耕中心で育まれた自然への感謝と願いと恐れと諦めが本となり、恥や謙虚さや忍従や協調性に通じ、信義・道義の本と成った。日本民族のしなやかな感性は此処に由来していると言えよう。

欠伸老の話なのに何故こんな事をと思うかも知れないが、前述した命に関わる大事に通じているからである。箸休めの話では無い。法とは命である。命がけの話である。

欠伸老は仏通寺で一隻眼を具した。自照居士も大智老尼も修行した仏通寺派の大本山である。少林窟の門下は御開山最初の修行場であるこの聖地を訪れている。雪舟も二年居たようだ。実に閑静で良いところである。訪れた者はみな喜ぶ。

七朝帝の師として有名な天龍寺開山　夢窓国師のもとで出家し、十九歳で中国に渉り仏通禅師の法を体得して帰朝したのが愚中禅師である。

三原城主の小早川春平公が、その愚中禅師を迎え開山として一三九七年に創建したのが仏通寺である。当時は九州・中国地方一帯に三千とも言われるほど大小の末寺があり、寺領内には八十八ヶ寺の塔頭があったという。

時の足利四代将軍義持は、その高僧を三度呼び出したが応じなかった。為に遂に国主の三原城主に、もし上洛せずんば国を滅ぼすと通達。

三祖大師も同じ法難が有った。「これでもし応じなかったら首を切り持ち帰れ」と暴君。そのお達しを聞いた三祖は、「こんな首が欲しけりゃ、切り取り去れ」と首を突き出した。法を自在にするとは、法有って身を忘れ、事に処すことを言う。恐れ帰って告げた。暴君その境地に驚き帰依したということだ。暴

君を名君に導くはただ命がけの徳力以外に無い。
自分はともかく大勢の命に関わるとなればしかたなく三度出向いて説法した。下って檪老の最初の師である香川寛量老師の時代も終わった。ここからが本題である。

その後席の管長の力量を試すべく、義衍老師と平山峰吉居士が参上して相見問答に及んだ。命がけで修業した禅僧同士の法戦である。これなくして禅無し。どしどし聞法法戦し切磋琢磨して仏法護持すべきである。

管長は坐禅の要旨を全く得ておらず無眼子（むがんす）だった。本当の修行をしていなかったことが直ぐにばれたのだ。テーブルを一打して、
「山僧はただ是の如し。和尚作麼生！」ぐらいのことが何故言えなかったのか。正面より義衍老師が、後ろから居士が、
「良い子だ、良い子だ。子供は黙って静かにしておるものだ」と言いながら、二人は管長の頭を前後から撫で回したそうな。
この一部始終は吾人が義衍老師より聞いた話である。実際尼と天龍の如くだ。徹と不徹の力量の違い是の如し。大本山の管長とし禅僧として全く手も足も出なかった断腸の思いが、次で決定的に成った。

後日、広島市においてその管長が坐禅会指導に来ているのを知り、たまたま市内に居た檪老は、嘗て世話になった大本山の山主に御挨拶に往かれた。檪老は管長という格（立場）に対し、下座にて丁重に三拝され礼を尽くされたという。
実るほど　こうべを垂れる稲穂かな
天下の大宗師に御拝された管長は、身は管長にして心は凡愚であることを恥じて割腹自殺されたのだ。それを知った檪老は、
「死ぬ覚悟があったのなら、何故一介の修行者に成って求道しなかったのだ」と、涙して彼の死を哀れんで居られたという。ずっと後、円熟された義衍老師は、
「まさか死ぬとは思わなかった。自分も若かったな」と。一隻眼を具し昇天の志気を恣（ほしいまま）にしていた時のことである。恐ろしや、恐ろしや。危ない、危ない。
堂々たる見事な法戦であり、禅界の護持には参師聞法は欠かせない生命線である。微塵も責任は無い。だが寂寥たる何かが残る事件であった。管長は俗職ならずや。禅僧が成るべき職ではなさそうだ。

法華経に精通した法達という大学者が居た。遼天の鼻孔、自信横溢、議論全勝の実力者だ。六祖は無学であり、たかが木樵、たかが米搗が何だとばかり無謀にも六祖に法戦を挑んだ。照魔鏡には皆見える。傲慢振りが影となって現れた。太虚の眼は誤魔化せない。六祖曰く、
「先ずは礼拝し来たれ」と。大法の重きを知らしめ、優劣を争う人我の見を落としめた。さすが六祖である。たまげた法達は偉人の実力を見抜いて即弟子になった。彼にも素晴らしい法縁、即わち菩提心が潜在していたから救われたのだ。檪老の力点は常にここに在る。

縁ついでに語らん。井上玄魯義衍（げんろぎえん）老師はたびたび檪老の鉗鎚を受けた大宗師である。正法を担った一生はただ法在るのみ。原田雪渓老師、青野敬宗老師の二神足を打出し、板橋興宗老師は大本山總持寺禅師となった。多くの宗門人を始め世界に勇猛な居士大姉を輩出した傑僧である。夥しい提唱録は絶大な信を得、確かな境地と相まって、筆を持っては宗門において右に出る者は居ないと言われた老宿だが、縁に任せて「はい、さようなら」してしまわれた。

惜しくも青野老師も遷化されたが、雪渓老師（妻は吾人の姉）は親勝りの真訣であり、小浜の発心寺において生涯を大法護持に尽瘁しておられる。大本山總持寺の西堂をつとめ、ヨーロッパ布教総監となり世界に正法を知らしめた老宗師であり、師資相伝の仏法は多数の語録に充満している。大いに目を通し世を正すの妙薬、即わち菩提心を堅固に引導せんことを願うのみ。ついではここまで。菩提心、菩提心。

坐禅と禅問答

禅問答について、欠隠老師に成り替わってちと横槍ならぬ著語してみる。参考にして貰いたい。或る者は頓知だと言うし理解不能だからか奇弁だと言う者も居る。坐禅を又冥想の如く思う者も居る。残念ながら全く違う。

「見る」と言えば目で見ることで尤もなことだ。そこで本当に「目」が分かっているかどうか？「見る」ことが分かっているかどうかを確かめたり教えたりするのが禅問答である。当然体得しているかどうかが問題となる。

「見る」のは何時だろう？　「見る」とはなんだろう？　「今」であり「瞬間」の様子であり、その事自体が自分の全体であり「心」の内容である。だから怖いのだ。体得者には丸見えだからである。

一秒前も後も絶対に見ることも聞くことも出来ない。これこそ決定的な真理である。不滅の原理原則でありこれを「法」と言う。しかも決して留まってもいないし跡形もない。戻ることも進むことも出来ない「今」「瞬間」こそ疑う余地の無い完成した現実である。この真相を体得するのが坐禅の目的である。

さてそこでだ、「見る」時、目が「見る」と言うだろうか。目が「美しい」と思うだろうか。目に思考系や分別力が有るだろうか。事実そのようなことは決して無い。我々の目を初めとして見聞覚知全てが前後も跡形も無くすっきりした純粋な無我・無心・無為の機能であり、微塵も執着も無く理屈も無い。この真実（仏法）を体得するのが仏道修行であり坐禅修行である。もう少し砕いてみる。

「見た」と認識した時はすでに事実（真実）は過ぎており過去になっている。それを意識で捉えて「見る」とか「見た」と言うがそれは真実では無く思考による観念世界に過ぎない。つまり夢事である。絵に描いた餅である。ここが肝腎な処である。次の歌は能く言い得ている。

今という今なる時はなかりけり　「ま」の時くれば「い」の時は去る

前後が取れて本当の「今」に覚めたら夢は自ずから消える。この瞬間に真実を自覚する。「眼中の様子そのものが自己自身」であることが分かるのだ。この内容の遣り取りが禅問答となるのである。

別の例をあげれば、「一＋一は何か」と分かりきったことを聞いてみる。たいていは「二」と答える。耳には二と聞こえたであろうか。そんなバカなことが有ろうはずがない。耳に確かにあるのは「一＋一は何か」ただそれだけである。これが事実であり真理である。誰が何と言ってもこれしかない。

この純粋な事実に気がつくまではどうしても見聞覚知の刺激に心を盗られ自失してしまう。［二］と思い込んだ概念は他の自在な働きを制する。このことが囚われであることに気が付く者が少ない。これが見た物、聞いたことに心を奪われ、損得、好き嫌い、執着や色々な要求理屈が発生して惑亂する根元である。禅ではこの様子を悪知悪覚と言う。つまり間髪を入れず過去が絡み付き知的分別が介入して自我となるのだ。

事実(真実)と自我の違いをまず知らなければならない。たとえ道理でこの事が分かったとしても役に立たない。実際と囚われとの決定的な境界線が無いからである。どうしても事実の作用、即わち真実を実体験する必要がある。実体験の自覚が生きた働きとなる。そこで一＋一は理屈無く二である。誰が何処で計算しても二である。この実際の働きを決定的に体得しているかどうかであり、学びと点検と証明に至る遣り取りが禅問答である。これはすべて心の問題であって知性や知識の世界ではない。

心を解決するには過去を含めて心の一切から離れるしかない。ここを道元禅師は、［心意識の運転をやめ、念想観の測量をやめ］と丁寧に説かれた。要するに心を使うな、動かすな、一点に置いてブレさせるな、目や耳に捕らわれるな、心から離れよ、と云う事である。禅門ではこれを「成り切って自己を忘ずる」と言う。自己を忘れると、囚われの元が落ちて無くなるので現実の真相、本来の心がはっきりする。

成り切って徹するためには真剣に愚直に一つことに没頭するしかない。徹し切ると執着していた心身が落ちて「今」の真相が明白になるのだ。確かに「一＋一は一＋一」であると決定し、「二」と訣著する。命がけで坐禅するのはまず過去を決定的に過去にすることである。過去が無ければ「一＋一は一＋一」。本当の「今」は働きであるから「二」と現成し［法］となる。

至り得た自覚を「見性」と言い「悟り」と言う。これが大安心、大平和の境地であり涅槃寂定ともいう。命がけの修行上において導いたり導かれたりするのが禅問答である。祖師祖録の復活である。

道元禅師曰く、「人々分上豊に具われりと雖も修せざるには現れず、証せざるには得ることなし」又云く、「行の招くところは証なり」と。正しい修行をすれば必ず「今」に目覚め「悟る」ぞと。今生に於いてこの身を本当に度すことが出来る仏法が今日存在している事は何と有り難いことではないか。欠老はこの大法護持の一生だったのである。グズグズ言わずに真剣に正身端坐すればよいのだ。

菩提心、菩提心。合掌。

下手な提唱をするな

「碧巌録」は祖録の代表である。それに就いては人に語れぬ秘話がある。口外してはならぬものではあるが、師去って五十年近し。故に無断で時効に処してみた。我が師も許してくださることを信じて門外に披瀝する。師、許されよ。合掌。

義光老師が国泰寺の後堂たりし時「碧巌録」の提唱をしていた。それを聞かれた老大師が、「あんな下手な提唱するな。儂(わし)が為(し)てみせるから止めとけ」と言われたそうだ。欠老の探竿影像(たんかんえいぞう)（実力を探る）にさすがの義光老師もぐうの音が出なかったようだ。こんな時も有ったのだ。それきり止めたそうである。

痛烈な鉄拳ではないか。親が子を哀れむ。哀れみて更に厳しい慈愛で慈しむ。これ尊い慈悲の涙である。冷や汗三斗だったであろう義光老師に合掌する。みな覚えがあるからだ。

こうした鉄槌(てっつい)を経てこなければ有無の二見を超えることは容易に出来ぬ。ここでお悟りをへし折られたようである。本当に活かすには邪魔者（自我・隔て・癖）を本当に殺すしかない。即今底を錬るのはそのためである。従前の悪知悪覚を只管打坐で坐り殺す。禅者の本懐はこれを体得するのみ。

辱めを受くるは福を受くるが如し。大きな慈愛の本には必ず厳が有り、悲痛なる叫びも起こる。ここで逃げたらそれまでの者。ゼロからの出直しを決意されたことであろう。老大師の大菩提心が乗り移ったに違いない。その後のとっときのご褒美が無量無辺である。断じて退く莫れだ。

「欟老の提唱録を見た時、さすがだなと改めて恥じたよ」と。あれほどの義光老師が厳師の有りがたさを噛みしめるように懐かしそうにその時の様子を語ってくれた。吾人、聞きつつ冷や汗三斗であった。滅多に説法してはならぬ。しかし求められれば説かねば更によろしくない。何の為の修行ぞとなる。

因みに義光老師は、毎晩吾人の為に提唱して下さった。無門関・従容録に始まり、普勧坐禅儀・坐禅用心記・学道用心集・参同契・宝鏡三昧・証道歌・般若心経・毒語心経そして鉄笛倒吹の下巻半ばに至って遷化された。何と勿体ないことよ。この高恩や報いがたし。南無義光老古仏。慚愧、慚愧。

欟老の「碧巖集提唱録」は絶古今である。逸品中の逸品である。求法の士は読まざるべからず。

食事説法

大智老尼は既に一隻眼（空を体得）を具していた。だから老大師の期待は絶大だった。老大師の食事には必ず近侍してしつこく問法していたと、道環老より聞いた。当時青年僧の彼も又求道者であったから真剣に見聞していたようだ。大切な事は老大師の説法である。誰もが聞きたいところであり、知りたいところである。

説法は身・口・意の三法輪をもってする。大智老尼の質問を一切無視し、欟老はひたすら食べるだけで一言も発しなかったと。食事の時はただ食べるばかり。全身その物に成って自己無き様子を丸出しで見せた身輪説法である。即わち全身で説き尽くしていたのだ。これが活きた提唱であり答えである。

「維摩の黙、雷の如し」の句を知らぬ禅者は居ない。聞く時は全身で聞くばかり。「黙」が答えである。偉大な答えなのでこれを「雷の如し」と褒めた。達磨面壁九年。これが坐禅であり答えである。一言も発せず坐禅丸出しと、「只」食べると一枚である。曇希叟（どんきそう）曰く、「西天東土、衲僧の様を示す」と。達磨大師が九年間ただ坐禅していただけ。食べる時はただ食べるだけ。歩くとき、作務の時、ただそれを本当にする。本当にする時、事実ばかりで自己が無い。これが本当の禅僧であり良き手本であるぞと賛嘆した。

何か尊い者が有ったら真の仏法ではない。即今底に何物があると言うのか。徹し切っていない証拠だぞ！　とも何とも言わずに「只」食べていただけと。見事。々々。誰か知る、この消息を。

自己無きを「行ぜず」と言う。これが分かれば良い。欟老は何もして居らぬ。食べて居らぬ。聞いて居らぬ。「只」涙あるのみ。これを、法において大自在という。

老大師多年、打成一片の真髄を見せつけ、真の打発を促されたのだ。打成一片とは、純一無雑にして真実丸出しの意。ここを見て取れと。欟老は、見ずして見る底の大智老尼に仕上げたいばかり。身代を尽くして、「これだ、これだ」と大提唱をされたのだ。

道環老が語る欟老の活説法は常に身震いするほど心底を剔（えぐ）ってくれた。有難たや。合掌。

本当の事を本当に知るから本当に安心するのだ。本当に知るには本真剣にならねば得られぬ。本真剣はまだ精神的エネルギー段階であり決意である。気持ちに過ぎない。だがこれが無ければ本当の修行が出来ないので絶対必要である。だがこれだけでは何にもならない。本当とは真実であり事実である。一切理屈も道理もない絶対世界を本当と言う。既に事実の世界であるから、日常「今」「今」を本真剣に実地に行すればよい。本真剣の時、自我は無い。「今」ばかりに徹し切った瞬間、本当が顕現するのだ。

フンドシ説法

どうしたことか老大師が下痢されてフンドシを汚された。欟老の慈悲の凄いところは、そのフンドシを

わざわざ大智老尼のところへ持ってきて、それを嗅いで見せ、
「ああ臭！　ああ臭！」と。何と言う慈悲徹困だろう！　満腔の熱血を注いで仏法を伝えんとす。ああ、真の古仏なるかな。
糞は臭いに決まっておる。法は万物である。万物とは万事である。物の外に見るべき法も聞くべき法も知るべき大事も無い。今の事だ。是の事を、事（法）丸出しで見せつけていたのである。
老大師は「ああ臭！」の無自性空の一声に身を隠した。何処にも檻老は居ない。ここが大事な所である。趙州の「無」と同か異かと参究しなければ解決する時節はない。

或る祖師は礼拝するであろう。又或る祖師は一見して「ああ臭！」と言って立ち去るであろう。又、呵呵大笑する祖師もいるであろう。当然であり言うまでもないからである
各祖師が対するであろうそれぞれは皆、自己無き様子を自在にして見せて救わんとした働きである。
「見性」せしめんが為の涙であり慈悲である。真意が本当に分かれば良いのだ。
無相即脱落身心に二つは無いのじゃと、檻老はこれを知らしめたいばかりに涙を全挙して示されたのだ。
吾人ならさし当たり、「春風啼鳥自然の妙。烟霞影裏内海の島」とでも言っておこう。老大師の涙が分かるや否や。これが根本問題である。

トゲ説法

又或時、指にトゲが刺さった檻老は、指を抱えてやって来られ、
「ああ痛い！　ああ痛い！」
涙が出る示唆ではないか！　これでも分からんのか！　と言わんばかりである。
人多き人の中にも人ぞなし　人になせ人　人に成れ人
誰か知る、この血涙を。馬祖を度すために瓦を磨いた南嶽禅師の再来である。南嶽・檻老の護法の涙が分かるや否や。
趙州禅師ならば手を叩いて「勘破了」と。黄檗なら檻老に、「老婆親切が過ぎるぞ！」と言下に一掌したかもしれぬし、大燈国師ならば、「前三三、後三三と言う莫れ」と一括処理したやも知れぬ。誰でも何時でもトゲが刺されば痛いに決まって居る。分かりきったことを今更言うは無用じやと。倶胝禅師ならば勿論「只」一指を竪るのみ。
これらの作家（生々しい説法）はみな祖師の涙である。解脱せしめんとしての作略（働き）である。これを看取しなければ大法護持は出来ぬ理りなのだ。祖師方の真意や如何にと参究功夫しなければ迷雲を破る時節到来は無いぞと。

「こんなに懇切丁寧に示されていたにも拘わらず、ワシはまだ抜け切っていなかった時分なので分からなかった。「老師、汚いから直ぐ洗濯しますから」と言うて汚れたフンドシを取ったり、「老師、バイ菌が入ったらいけませんから直ぐ抜いて消毒しましょう」と相手立てていたと、大智老尼。
向上の一路、千聖不伝。檻老は凡情聖解、何もかも捨て尽くして大活現前せしめ、花蔟々、錦蔟々（見事見事、よくやった）と言うて、泣いて抱きしめ、大法久住を喜びたかったであろう。
世の中は窓よりいずる牛の尾の　引かぬにとまる心ばかりぞ　（道元禅師）
さすがの大智老尼もこの時はまだ捨てるべき垢（悟りの跡形）が残っていたのだ。

「いいか！　徹しきらん時はこんなもんだ。徹し切ることの容易でないことを自覚して、即今底を練り、しっかり単を練らんとだめだぞ！　お前は菩提心が鈍いからな！」と大智老尼に一喝されることたびたびだった。檻老の再来である。

花蔟々、錦蔟々

ついでだが、ある僧が洞山に、「如何なるか是れ仏」と問うた。「山曰く、麻三斤」と。当時典座（食事係）をしていた洞山（良价大師ではない）は、そこに胡麻か麻布が三斤有ったのか、測っていたのか、さりげなく何の意も無く「麻三斤」と応えた。趙州の「庭前の柏樹子」も、雲門の「乾屎橛」（糞かき棒）も然りだ。

ありったけで天地を投げ出したこの一句は諸仏祖師方も手が付かぬ。まさに千聖不伝である。この跡形の無い絶大な口を「舌頭に骨なし」と禅門では言う。言語に口無く、口に言語のないことである。元古仏が言うた「有語中の無語、無語中の有語」とはこのことである。

自己無ければ口も心も何も無い。何も無いとは無限大と言うことだ。つかみ所が無いではないか。これが「本来本法性、天然自性身」である。その見事さに雪竇禅師はヒザを打って喜び、「花蔟々、錦蔟々」と賞賛したのだ。因みにこの語はあの香林の法嗣（弟子）の智門禅師が言い出した名句である。香林の師はあの雲門であり、雲門四世が雪竇禅師である。

この智門の法嗣が雪竇だから、師匠の「花蔟々、錦蔟々」を、ひとしお愛していたのだろう。

老大師の涙、身代尽くしての身・口・意を使って仏子打出の護法護念。君子は千里同風である。誰か泣かざらん。慚愧、々々。

大智老尼も他日大悟し、思わず汗顔恐慌。その広大の慈恩にたびたび涙されていた。

慈悲の一掌

二十歳であった我が母も又、本堂の片隅で執筆されている檪老のもとへたびたび独参に行ったらしい。部屋へ入るや否や、母の真剣さに呼応されてか、檪老はいきなり横面をビシャ！　とやって、

「これ何ぞ！」母は咄嗟に、

「無の働きです！」と答えた。さすがに自照居士の娘だけある。すると間髪を入れず、

「能く言うた！　これ何ぞ！」とまたビシャ！　とやられたとか。

母より五歳年上だった岩崎達雄居士も、

「お前、まだ悟らんのか！」と一喝され、ビシャッ！　とひっぱたかれたそうだ。儒学者で温和しい堅物が、逢う度に叩かれた頬を、懐かしそうに撫でながら語ってくれた。菩提心を駆り立てる涙の一掌である。

「老師はいつも真剣だったから、自然に菩提心が高まったね」と嬉しそうに微笑みながら語った母も今や亡し。その母が言うには、「優しくて暖かい人だったが、法においては厳しく怖かった」そうだ。

当然である。道得も三十棒、不道得も三十棒は徳山底ではないか。徳山の上の上ぞ。

ツクツクボウシと野生

母と大智老尼は姉妹である。母は大智老尼を評して、

「夏につくつく法師が鳴くとね、老尼は一時、「トウインロウシ、トウインロウシと聞こえる」と言ってたそうである。全山檪隠老師だらけということだ。

檪老はそんな大智老尼を、

「大智は野生だ、野生だ」と能く言っていたそうである。不遜ながら吾人も野生と言った檪老を微笑ましく思う。その通りだったから。

とにかく大智老尼は法しか無く、慈悲の塊りであった。事に当たっての直線的な働きは子供の如く無邪気で、常に効率などお構いなし。何を言うにも躊躇は全く無く善悪を超えていた。常識を旨として見る限

り不条理だらけである。とても着いていけるものではない。確かに野性であった。
しかも法において余りにも峻烈だったために、義光老師遷化されるや、随身者は僅かになった。特に学者系は寄りつけなかったようだ。
一切の小理屈は其場で叩きつぶし、何か説明じみたことを言おうものなら即、「それがいらんのじゃ。又我を出した！」と即一喝。
「本当の菩提心が無い者は来ない方が良い！」と大声。檪老ゆずりの菩提心と野生は火の如し。吾人は六回破門された。その度に意を決し、懺悔をしては入門を請い逃げなかった。吾人も結構な野生であるためか、兄弟親族から敬遠されて久しい。老大師はこの野生女？　を愛して止まなかったのである。

少林窟道場の産みの親と言ってもよい立川淨州居士（今は出家して吾人の弟子）はどんなことも「はい」としか言はず素直に随っていた。出会ったことの無い純一な修行者である。だから絶対の信頼と法愛を得ていた。そんな彼が参禅初期に、「老尼は本当に女ですか？」とそっと義光老師に問うたという。大学生でありながら能くそんなことをぬけぬけと聞いた者だと感心。淨州居士は吾人が最も信頼を置いている一人である。
「ちゃんと儂が確かめて居る。確かに女だった」ときっぱり言ったと話てくれたから間違いない。だいたい想像が付くだろう。まさに大火聚（何もかも焼き尽くす）の如し。うっかり寄りつかれぬ。

温情や気遣い等において母親以上の母親だと思うことはしばしばあったが、女性だと思ったことは殆ど無い。正に法に男女の相無しである。闊達自在、本物の野生の、第一級の老古仏である。潙山下の劉鉄磨を出ずること七歩。天下無敵の劉鉄磨も紫胡に張り倒をされたではないか。
紫胡の有名な句がある。曰く［一狗有り。上人の頭を取り、中人の腰を取り、下人の脚を取る。擬議せば則喪身失命す。（とんでもない犬が居る。仏であろうと何であろうとアッと言う間に一切合切食い殺す。この期に及んでこの凄まじさが分からねば皆即死じゃぞ）］自己無き解脱の凄まじさは全く手が付かぬ意なり。彼は南泉下の禅傑である。犬も上中下も意味は無い。語句に引っかかると大事になる。
そう言えば同じ南泉下の長沙景岑もあの仰山を張り倒した。それからみんな岑大蟲と呼び恐れた。大蟲とは虎のことである。
大智老尼は真箇無敵であった。みんな能く泣かされたものだ。知る人ぞ知るで、天下の大宗師も嫌がっていた草原の荒っぽい大蟲であった。遂に生涯この山から出ることは無かった。慧中国師は四十年山から出なかったが、帝に切に望まれてつい出向いた。すると法友から、無様なことをしたと叱られた。上には上がいるものだ。
大古参連中曰く、晩年は檪老を超えていたのではと。八年ほど長生きされただけ、練りが深かったことは確かだ。分かるが、檪老は完全に沒蹤跡故に比較のしようがない大境界である。大智老尼の「信心銘提唱」等を見れば分かるように、やはり無礙自在において勝るとも劣らぬことは確かである。

大智老尼曰く、「六祖壇経に、六祖に非ざる余分な句がある。誰か付け加えて六祖を汚して居るぞ。ここがオンマラカ（自分の手のひら）を看るが如くはっきり見えなければ本当の法では無いぞ。今お前に言うと怪我をする。自分で能く看えるように只管（純粋・一心・前後の無い今）を練ろ」と吾人に厳命。
又曰く、「ワシは六祖が好きじゃのう。六祖もワシみたいに無学じゃったろうが。法は学問などとは関係無いことが分かるだろう。あの境界を見てみろ」と。慚愧、慚愧。合掌。

或日突然、「永嘉大師の証道歌をワシに見せてくれ」と言われ、半日後、「永嘉は一期に差別智（地）までぶち抜いておる。大したもんだな！」と。その関心振りは数日続いた。それから来る古参連中

を捕まえては、
「永嘉は大したもんじゃ。いいか。先ず悟らねばいかん。それから悟後の修行をして大成するのが普通じゃが、本当に即今底を大切にして徹し切ればいっぺんにここまでぶち抜けると言う素晴らしい手本じゃというこっちゃ。本当に即今底を練りきるんじゃ」と眼光鋭く鉄槌。続いての言葉は何時も、
「みんな菩提心が鈍い鈍い。欠隠老師が泣いとるわい。真剣さが足らんのじゃ」と。あな恐ろしや。
慚愧、慚愧。合掌。
これしか無いではないか。大智老尼の「病床生活三十余年と禅の力」をみればその凄まじさが分かる。確かに法有って女ではなかった。光り輝く野生であった。

火鉢説法

「どうして欠隠老師と二人だけになったか忘れたが、火鉢で暖を取っていたら、欠隠老師が、
「手をこうしておると何故暖かいのかのう」と言われたと、道環老が深く回顧した面持ちで話し始めた。道環老は多年この事が気に掛かっていたようである。いや、その事がはっきりしたので吾人に語りたかったようである。
「それは反射熱と輻射熱と言い始めたらな、欠隠老師は手を振って、
「そんなことは学者や一般の言う事じゃ。相手を認めて説明してはいかん。それらは皆意識で作り出した観念にすぎん」と直ぐにワシの理屈を取り上げてしまった。その時はよう分からんかった」と、歯抜けの笑顔で話し始めたが次の瞬間、真顔になっていた。
今は違う、と言う確かな自信が彼を輝かせていた。やはり胸中に欠老の言葉は謎めいて潜み、芽吹くのを待っていたのだ。「今」の無為自然で何の道理も要らない様子が分かって、漸く心の焦げ付きが判明して暗い影が消えたのだ。その刹那、霧が晴れて清々しい朝日に照らされたのが余ほど嬉しかったようである。

すかさず吾人は、何がきっかけでその事が分かったのかを聞いてみた。するとやはり欠老のちょっとした次の法話が響き続けていたという。

「相手を認めると自己が立つ。そこから色々考えが発生して今の事実から離れてしまうんだ。自分で問題を作って心が騒ぐんじゃよ。単調になっておれば余分な雑物が落ちて無くなる」
実に耳慣れ、聞き慣れた法話である。だが理論的だの科学的などと知性優位精神が勝っている限りこの言葉は理解できない。当時の道環老もその一人だったようだ。白隠禅師の歌に、
闇の夜に　鳴かぬカラスの声聞かば　生まれぬ先の父ぞ恋しき
こうなると如何に知性豊かであってもどうすることも出来ない。心を解決するには屁の役にもたたんと言うことだ。此処で言うなら知的な計らいを徹底打破することだ。打破した瞬間、この歌は明白となり笑ってしまう。お察の再来である。

「そしてこうも言われたんだ」と。
「分かろうと思わんでいい。素直になり、思いを捨てて、今、今、淡々としておればいいんだ。こうして手をかざしておれば理屈無く暖かかろう。水に手を入れたら冷たかろう。それが総てなんだ。単に成ればいいんだ」と。恥ずかしながらその時もまだピンとこなんだよ。それがずっと胸にあった」と。
人に語れば理解されない多くの個人的問題が誰にも有るものだ。却って馬鹿にされる。この「道」の問題は自分の問題であるから人に語る話では無い。その代わり解けた時は救われ感動した時である。自分の

宝であり天下である。
「或る時にな。そうだ、アンタの娘の薫ちゃんを乳母車に乗せて、いつものように散歩していた時よ。薫ちゃんが無造作に無心に戯れている姿を見てハッとした。その瞬間スカッとしたんだ。欟隠老師の言われた事が一遍に分かった。嬉しかったな・・」
嘗て見たことの無い歓喜に溢れた笑顔は美しかった。
「それ見性？」ここが大事な急所故に真剣に切り込んだ。
「こんなもんが見性であるもんか。ただ今まで引っかかっとった拘りが取れて、目の前が明るくなりとても楽になっただけのことだ。まだ決着がついとらんから・・」と。良かった。「見性」の大事は容易でないことを能く知っておられた。これも明眼の宗師にずっと寄り添っていた功徳である。
これを「見性」と言ったら例え義光老師の長兄であれ兄弟子であれ大事だけにただでは済まなかったところだ。そうして一言こう付け加えてくれた。
「欟隠老師が有り難かったな。あの時が鮮明に蘇って懐かしかった・・。あの一言が有ったお陰だ。心から感謝したわい」と。彼の涙は後にも先にも見たのはその時だけであった。
吾人も嬉しかったから心から感謝した。巨匠に手取足取りして頂けたことは、充分ではないにしても万劫の餓えが少しであろうと癒やされたことは法悦至極であったろう。何時でも全身で説法される慈愛は、こちらが明らかに成るほどにもろに伝わってくるのだ。道環老と共に南無欟隠老古仏に合掌した。

焼き芋と太鼓焼き

道環老はとても欟老に可愛いがられたようで、偶(たま)に来る映画、当時の活動写真とかは皆の憧れであった。特に思春期の子供達に対してはそこはかとなく気を掛けていたようだ。ために連れ出しては不満を満足に導いていたのだろう。欟老独特の教育観であり慈悲である。
父親として偶には子供らに気を遣ってやれと言わんばかりに欟老は義光老師に、
「井上老師。今日水戸黄門の活動写真が来るそうだ。みんなで行きましょうや」と声を掛けられたそうだ。すると義光老師は、
「いや・・私は・・」とか言って断ったそうだ。吾人が知る限り義光老師は決してそのような所へ行く方ではなかった。連れだってそこへ行く道中、欟老は、
「どうも井上老師は堅くて面白みが無いな・・」とかをボソッと言いながらステッキをこうして両手で回しながら行かれたと、その時の仕草をして見せてくれた。欟老の天真爛漫が目に浮かぶ。
その頃の忠海(ただのうみ)は想像が付かないほど随分と栄えていたらしい。目の前に地図から消された「大久野島(おおくのしま)」という毒ガス製造所があったからだ。乃木将軍も来られたほどだから、軍事要塞の一つとして重要なところであったらしい。
現在はサイトによって「ウサギの島」として世界的に知られているようだ。そのウサギの数や桁違いに多い。そのけなげなさは文明病にある人にとっては堪らない癒やしの島との評判である。だが現在この町自体は見る影もなくすっかり衰退して、人に会うのもまばらだ。勿論少林窟道場を知る者は殆ど居ない。お陰で世塵来たらず、山自ずから幽なりだ。純粋性を堅持することは容易ではないが妙なことで救われている。

道環老はその時の様子を何時ものように目を輝かせて語ってくれた。唯一そうした催し物をする劇場が有った。連れだってそこへ行く道中、欟老は、
「どうも井上老師は堅くて面白みが無いな・・」とかをボソッと言いながらステッキをこうして両手で回しながら行かれたと、その時の仕草をして見せてくれた。欟老の天真爛漫が目に浮かぶ。
その頃の忠海(ただのうみ)は想像が付かないほど随分と栄えていたらしい。目の前に地図から消された「大久野島(おおくのしま)」という毒ガス製造所があったからだ。乃木将軍も来られたほどだから、軍事要塞の一つとして重要なところであったらしい。
現在はサイトによって「ウサギの島」として世界的に知られているようだ。そのウサギの数や桁違いに多い。そのけなげなさは文明病にある人にとっては堪らない癒やしの島との評判である。だが現在この町自体は見る影もなくすっかり衰退して、人に会うのもまばらだ。勿論少林窟道場を知る者は殆ど居ない。お陰で世塵来たらず、山自ずから幽なりだ。純粋性を堅持することは容易ではないが妙なことで救われている。

往時は違って商店街も多く、風雅で作りのしっかりした入り江もあり、何軒も居酒屋や屋台や焼き芋屋があった。勿論高級料亭も、男が遊ぶ茶屋なども軒を連ねていたと聞く。吾人の子供の頃はその面影が充分有った。広島銀行の発祥はこの町からである。

不衛生か栄養不足のせいか、昔はなぜか鼻垂れ小僧が多かった。道中そんな子供がおいしそうに焼き芋を食べていた。立ち止まって物珍しそうに眺めていた檪老は突然、

「坊、この爺さんにひと口喰わせてくれんかのう」と頼み、反対側をガブリと一口食べたそうだ。そして、

「坊、ありがとう。いや本当に美味いもんじゃな」と一言。吾人に語ってくれる道環老はスットンキョウの顔をして、

「いやー、あれには驚いたなあ」と言いつつ白髪頭をかきながら歯抜けした口を大きく開けて大笑いした。よほど驚いたに違いない。分かる、分かる。どちらの心境も。

南井居士が檪老に離れることなく綿密に随身していた時のことをこう語ってくれた。

「京都の街を歩いていたら太鼓焼きを見つけ、それを一つ購入するや半分ちぎって「お前も喰え」と言ってくれたので、洛中の人中、二人はそれを悠然と食べながら歩いたことがあった。かたや堂々たる禅僧であり、青年の自分は少々恥ずかしく思った」そうである。

だが歩きながら食べながら色々大切な法話を聞いているうちに、そんな気持ちは消えていたと。人が眼中から消えていたのだ。別な言い方をするなら、自己が落ちていたのである。なんと有り難いことか。

正師に参ずる功徳の大なる事は、日常の上で自然に導かれ、菩提心さえあれば後々までその示唆で救われることだ。

碧巖二十三則の「福慶遊山」をみるとその有難味がわかる。散歩する時でさえ道力を磨く。常に道であり、度衆生である。見習うべし。今の事実を抜きにしたら法も救いも人生も無い。「今・只」あるのみ。

良價は深く蔵して虚なるが如く、君子は盛徳あって容貌愚なるが如し。こうした偉人の活動を受用と言い自在と言い作家（さっけ）という。これでこそ禅は活きてくる。しかし三輪説法を自在にすることはたやすいことでは無い。檪老を見習うなら、先ずは「今・只・即今底」を手に入れることである。とにかく自他や是非の念を打ち砕いてこそ初めて徹することが出来るのだ。　菩提心、菩提心。

肝に銘じ魂に銘ず

老大師は徹底正法護持の人であり、徹底即今底の人である。即処その時、それが法であり真実丸出しであるから、縁に随い時に応じて闊達自在、自由無礙である。ことさらに奇異な事をしているのではない。ただ自己なく、無礙自在の活作略（かっさくりゃく）をして見せつけ、感応道交（かんのうどうこう）あらしめたいばかり。これが真の祖師であり檪老である。

元古仏曰く、「種姓（しゅしょう）を観ずること莫（なか）れ、非を嫌うこと莫（なか）れ、行いを考うること莫れ、但般若を尊重（そんじゅう）するが故に日々（にちにち）三時に礼拝（らいはい）し恭敬（くぎょう）して更に患悩（げんのう）の心を生ぜしむること莫れ」と。

この言誠に重し。菩提心に鞭打ち、打坐して自己を忘じてその真意を体得するしか道はない。行住坐臥（ぎょうじゅうざが）、喫茶喫飯（きっさきっぱん）、如是の法を見せつけて、即今底にあらしめ前後際断させることの困難さ。他を見ない力を如何に培うか。容易なことでは無い。老大師の全体が道であり、常に身を捨てて満身そのものになって導いているのだ。

さらに南井さんは語る。

「本当に驚き、肝に銘じたことがあった」と背筋を伸ばして真顔で語り出した。自分を上座(かみざ)に座らせ、老大師が下座に下り、私に両手をつき、真剣に、

「仏法が無くなったら世は暗黒じゃ。本当に救われる道がなくなるからじゃ。頼む。そのためにはまず自分を済度しなければだめじゃ。菩提心に鞭打って本真剣に坐禅してくれ。・・大法の人となり、戦争をなくし世界を平和にしてくれ。・・頼む！」と言われたと拳を握って熱烈に語られる南井さんの目には大粒の涙があふれていた。

綿々密々、水も漏らさぬ心々の風光を得た南井白巌居士は幸せ者であった。聞いていた吾人も自ずから涙が流れ、二人は拳を握り肩をゆすって暫く泣いた。欠伸老に感謝して。

眼前に老大師の真骨頂、諸仏祖師方の暖皮肉を見せ付けられた衝撃的な鉄槌が有り難かった。老大師が本当に尊く、内心では渾身の礼拝をしていた。　希道　百拝

慈悲徹困

大智老尼も又、慈師の高恩を語られる時、能く涙されていた。大法重きが所以の、師弟熱誠極まる慈愛、正に菩血提涙であった。正装をして密かに礼拝している姿に幾たびか遭遇した。

道元禅師曰く「礼拝絶えざる間、仏法絶えず」と。黄檗(おうばく)の礼拝コブが如何に尊く有り難いかを知るべし。

定上座は臨済に一喝を被り礼拝する因みに大悟した。礼拝に自己無きことを自覚したのだ。仏法とは真実のこと。この大智老尼の下で弁道精進出来ることを誇りに思いつつ、感謝とその任の重さ、汗踵(あせきびす)に至っていた。今もである。

南井白巌（金治）居士は又、

「金治に頼みがある。儂(わし)が死んだらのう、骨は差別されて苦しんでいるエタ（差別用語。死語）の墓へ葬ってくれ」と老大師に真剣に頼まれたと。

語る南井さんも苦しそうであった。差別されて苦しむ人たちに対し忸怩たる思いがあったからである。どこまでも大慈大悲、広大無量の老大師である。仏祖正伝の心印と見れば良い。

しかし今日においても、格差社会は限りなく進み、子供の苦痛が読み取れない教師や親が増えている事実は見過ごせない。みな教えざる罪である。道を教える人を作り出さない罪である。人事では無い。我々修行者の罪である。宗教家は本気になって道を究めなければ存在意義は無い。老大師も地下で泣いておられることぞ悲しき。苦しいかな、苦しいかな。

隔て無き道友

「南天棒禅話」が老大師の著書である事は早くから周知されていた。欠伸老と自照居士は師弟であり兄弟であり、大の酒好きである。能く出会い、よく飲んでいたし、常にその世話をしていた大智老尼は、直接間接に大切な話を耳にしていた。間接にとは自照居士より聞いたという事である。

吾人も他言できない大切な事を多々聞かされている。門外不出故に今はこれ以上語れぬ。

ほどよく飲み、蚊帳の中で横になり楽しそうに語り合っていたある時、老大師が、今「南天棒禅話」なるものを内緒で書いていると話ているのを聞いていたのだ。自照居士にはなんでも話ていたようである。後にそれを読んだ自照居士が、

「やはりあれは欠伸老でなければ書けるものでは無い。南天棒ではとても無理だ」と言っていたと。因みに先の軍医総監であり文豪の森鴎外が、「引きつけられて一夜で読んだ」との逸話がある本だ。素晴らしい名著である。

早くから著者が誰であるか知られていたのは、自照居士の一言があったためであろう。自照居士は南天下では知られていたから。もちろん後語に欟老自身が詳しく書いているが、あくまで南天棒を立てて、師弟の格をわきまえた美しい姿であって、本心はただ仏法護持しか無い欟老である。

真意は、いたずらに禅の盛んなるを嘆き、実地に遠くなることを恐れて「南天棒禅話」を書かれたのである。実に痛恨の至りであり、同時に我らに一層の努力を求めての策励である。大智老尼はみな聞いていたのだ。

「相似禅評論」なるもの

欟老も自照居士も禅界の乱れを嘆き、とくに漆桶（実力無し）の師家による安売り公案禅に対して悲憤慷慨すること頻りであったようだ。欟老の著書に「近頃、公案や案件をすっぱ抜いて公表し、猿芝居禅を一掃しようと企てて居る者があるらしい・・」といった主旨を拝読したことがある。その語句からは、大いにやれやれと言う大賛成の意志が横溢していた。とにかく大法護持しかない老大師はとても見過ごせなかったはずである。

このいきさつについては吾人は全く知らなかった。義光老師が、

「そのようなことを企てている者が居ると、人事のように欟老が言っていたが、実は自分の門人を、点検がてらあちこちの師家に行かせて、大抵の案件を集めてやらせていた」と教えてくれたのでその存在を初めて知った。

義光老師によると、これらの案件は白隠禅師を中心として東嶺・遂翁等門下が集り、組織化し問題集にしたてたものだとのこと。その眼目は意根を打破せしむる大法護持への血涙であり法財としたのだが、祖師の心血に序列を付け、段階を付けた為に大きな問題が発生したのだそうである。

それが時代の降下と共に禅者の堕落が法財をガラクタにしたのだと。序文を見ると、その痛烈さは身の毛がよだつものだ。

欟老はとぼけて「近頃、相似禅評論なるけしからんものを出した者が居る」と。この「けしからん」は注意を引きつける論法で、「けしかん者を退治する良き法財だから、諸君よく読め」と言うことである。

大慧が碧巌集を焼き捨てたのと真逆ではないか。それは問題が起きるだろう。案の定それがその後の臨済禅の枢軸となり、真面目な修行者を狂わせることになってしまった。意根の打破どころか却って意根の増長に繋がり猿芝居の道具となったわけだ。つまり無眼子の師家の道具となり、学人を路頭に迷わせる決定的な毒薬となったという。地下に泣いているのは大慧禅師ばかりではあるまい。

「無字」一つ見ても分かる如く、本当に「ム」に成り切れば済むものを、あれこれ知解情量を引き延ばすように仕立てた罪は大きい。罪は源にあると言われても仕方が無い。だが猿芝居をやっていることの空しさは本人が一番能く分かっているはずなのに。やはり初発心の真偽によるのだ。

この悪弊を打破すべく、公案を纏め、いちいちに解答文と芝居の仕方を暴露した。それが「公案回答集」であり「相似禅評論」で、この手合いの者は誰もが飛びつく代物である。

「相似禅評論」の序文は「公案回答集」の序文を遥かに超えた極めて激しい仏道護持の叫びで貫かれている。大智老尼はそれを見て、

「はは、やっぱりそうか。この序文は老大師でなけりゃ書けん」と。まさしくこれは欟老を中心にして包道の士が結集して出された物である。序文の内容を確認し境界の上から大智老尼が断定されたのもよく分かる。菩提心と大法護持の熱血と涙と悲憤が高邁な文章で躍動しており、尋常の人が書ける内容では無い。

加えて言えば、序文だけは必読玩味、反省する好資料であり価値がある。中身は如何。火中に栗を拾うの是非は暫く置く。

師家の問いに答えたいばかりにうっかり読んでしまう。それが怪我をする始まりである。知解情量が心全域を掻き回すことになるからだ。それを殺すことの困難は本当の菩提心なくしてはあり得ない。書を悉く信ずるは書無きに如かずとある。但し、この序文は必読ものである。見事な標識である。

本当の求道者は一ページ見ただけで吐き気がするはずである。何故なら、如何に修行すべきか。如何にすれば迷雲を打破出来るかの燈明が全く無いからだ。大慧の慈悲を無駄にしてはならぬ。

投子曰く、「夜行を許さず。明に投じて行け」。無闇に暗闇を走り回ると谷底に落ちるか、岩にぶち当たって怪我をするから夜が明けて行けと。明眼の宗師や尊し。我等はひたすら打坐しておればよい。ひたすら即今底を護持しておればよいのだ。

天桂禅師は学人の内容を点検するために「幽霊を済度してみよ」とぶっかけた。果たせるかな学人は立って「ウラメシヤー」と猿芝居した。これでこの公案は透る。師家がこれで室内を通すから頭悟りの理屈屋がトコロテン式に出来るのだ。俺は某師のもとで「見性」したと得々と肩を張って言う。なんとしたことぞ。理屈が紛々とし心の定まりがないから俗眼丸出し。微塵も安心があろう筈が無い。これが世間の「見性」である。天桂はきつく戒めた。

曰く、「いつまでもそうしておれ」とはきつい仕置きであるが生ぬるい。吾人はすかさず痛棒を食らわすことにしている。カス妄想を殺して真実に生かす為である。それで気付けば儲けもんではないか。先般も無字を体得したと、得々として相見に及んだ。とんでもない傲慢な毒気は生活に及び、周りが些かその変人に困って居るだろう。張り倒すネグチも無かった。そのようにしたのも師家である。

何故こんな猿芝居が禅なのか。不思議に思うはずである。こんな芝居は禅では無い。これらの弊を打破するために言うておく。法は悟道により法と成る。悟るためには菩提心のもとに世念を坐断し、意識の根元を空ずるしかない。成り切って自己を忘することだ。その実際であり体得である。吾人もこの手の者を何人も殺してきた。殺すとは救うことであり生かすことである。迷を生み育てる者が居る限り、殺す者が居なければ法の人を腐らすばかりだ。

自己を忘ずとは、その物と一つに成る。同化である。一体である。よく、成り切れと言うではないか。この瞬間、本来自己の無いことが自覚される。この自覚症状を「見性」という。

つまり一体になった時が成仏であり「見性」である。済度したということだ。成り切って見せた猿芝居が「ウラメシヤー」である。この猿芝居を打破して済度するのが本当の師家である。

どうやって？　ここが参究ものである。頭で悟れるなら学者はみな悟る。そうはいかぬが故に意根坐断のために皆命がけで参禅弁道するのだ。

参考の為にもう一つ。この音を消してみよ、と言うのがある。師家が「ゴーン」と言う。「ゴーン」そのものになれば「ゴーン」は無い。「ゴーン」と自己が一つだからだ。その理屈が分かれば「ゴーン」と言えば良いことが分かる。そうすると「見性」したと言われるのだ。こうして次々にこんな屁理屈で引っ

張られ遊ばれて、猿芝居が師家の権威の道具に使われる。絵に描いた「見性」を喜ぶ哀れさ。決してこれを「見性」と思ってはならぬ。

とにかく「分かりたい」と言う知的要求と「分かった」と自分を納得させる心が捕らわれだと気が付いている者は少ない。これが諸悪、迷雲の根元である。「分からない、分かりたい、分かった」という意根を坐断して初めて真相が露堂々となる。ここを透過せねば埒があかぬ。無門関十九則にしかと参ずることである。ここらで公案の弊害を知ってもらいたい。「不知」を会得するのが禅の本領である。

岡山に吾人が尊敬していた浅羽武一という大居士が居られた。浅羽医学研究所の創設者であり名医であり、ご子息も又親勝りの名医である。始め公案禅にて二十年を失し、やがて法縁あって少林窟に来られ義光老師の鉗鎚を受けるようになったが、厚い公案の垢取りの為に苦しんだ。義光老師亡き後、あの烈しい大智老尼に付いて毎月上山、霜辛雪苦された。泣きの涙の参師問法であった。甲斐あって死の数年前にこの「不知」を得て歓喜された。通年凡そ三十年以上である。身についた弊害は斯くも怖いものかと、悲しい同情をしながら自分の幸せに感謝した。「総に知らず」までこぎ着けることは容易なことでは無いのだ。「総に知らず」とは前後が無くなった。「今」は確かに「今」ながら即「今」は無い。現実の有相即無相を体得したその喜びは大きかった。その笑顔は忘れられない。大智老尼の喜びも大きかった。

ちょっと補足しておきたい大事がある。現実は実相であり有相である。これを有りの侭信じ受け入れて従い切る。その物と一つに成ることを言う。同化である。自己の無い実証である。現実と言い実相と言っても縁の様子に過ぎない。寄せ集めの仮の姿だから塊ったものは何も無い。これを無相という。実相即無相。無相即無我。このことを自覚した時が「見性」である。

公案の弊を超えることが出来たのは浅羽大居士の菩提心が強かったからである。思えば先生が懐かしい。誠実で本当に熱心な方であり惜しい方であった。とにかく間に合って良かった。安心して死に任せる力を具えたから決して迷わぬ。閻魔と談笑して楽しんだことであろう。岡山市の名刹　曹源寺（池田公の菩提寺）に於いての喪儀に、吾人が次のような香語を唱えて引導を渡したのは何年前のことだろうか。藩侯の菩提寺故に一般の葬儀をした例はない。浅羽大居士が初めてであった。ここ曹源寺にも参禅に来ていた法縁による。

多年研鑽昇龍門。　多年研鑽す昇龍の門。（この道のためにさんざん苦労された）
幻化色身依旧朗。　幻化の色身、旧に依って朗なり。（生死無常、当たり前の真理を明白にした）
即今空医王翁哉。　即今空じたり医王翁なる哉。（さすが即今底を体得した大名医である）
恁麼消息総不知。　恁麼の消息総に知らず。（総て分かり切った貴方には、ご無用、ご無用）
喝　それでこそ。
語尽出東山月哉。（かたりつくしていずとうざんのつき）　まるで毎日飄々として東山に出る月のように爽やかである。
波呑空月遊海中。（なみはくうげつをのんでかいちゅうにあそぶ）　大海は月を弄び、我が世界として遊んで居る、それが貴方だ。

理屈から離れねばならぬ根源的理由が分かれば、決して理智に遊んではならぬ。遊ばれてはならぬ。その弊を打破するには「今・只」するの上は無い。凡眼は哀れにも「不知」或いは「総に知らず」と言われれば無力にして馬鹿にされたと思う者もいる。看る眼無しとはこういうことである。智藏禅師に「不知最も親し」と言われた法眼禅師は、この一句で大悟された。法眼禅師は法眼宗の開祖である。欠伸老は、五家七宗で法眼宗が最も良い、と言われた。禅の要訣は唯「不知」の体得にあって他無し。

ただし、やたら訳の分からぬ語句を投げかけて学人を翻弄する師家をぶっ飛ばしたければ、台本通り芝居を打って、ぐずぐす抜かしたら間髪を入れずぶん殴る手段にはなる。そのためならなおさら腹で打坐した力の方が強力で効き目があるぞと。古仏はみな身命を掛けてこのことを示唆しているのだ。

時を無駄にするは大きな殺生戒と知る者は読め。読むな。読むな。読め。参。

棒頭に眼有りや

そこの道場へは行くなと古参が忠告したにも拘わらず、菩提心熱烈な女性が押し切って行った。それなりの自信があったからだ。そして声を枯らしてやってきた。肩から肩甲骨全体、上半身全体が内出血していた。どす黒い鬱血は胸まで廻り、見るも無惨な様子であった。訴えられたら間違いなく傷害事件である。

警策で打って良い安全な箇所は僅かなところしか無い。幾ら自発で来たと言っても、内容を大事にして、打つにあたってはよほど注意しなければならない仏行である。一日に百発以上滅多矢鱈に難癖着けて叩かれたそうだ。骨膜炎にでも成ったら大変なことになる。それを厳しい禅修行だと売りにしているらしいが、その内健康を害して警察沙汰に成りそうな乱暴な公案道場だったらしい。だが希望者は結構居るとのこと。人間の不可思議さと言うより外ない。どちらもどうかしていると言われても仕方がない。宜なる哉。初発心が正しくないと見渡しが利かない為、外見の厳しさに惑わされることになるから気をつけた方がよい。

或る寺の上堂で、ひと見識のある僧が問答に及び勢いよく飛び出して、

「蚊子鉄牛を咬む時如何」と鉄牛禅師にぶっかけた。こ奴一筋縄ではいかぬと見て一手引き、身を縮めて恐れのスタイルをした。ここが恐ろしい落とし穴である。その僧、してやったりと調子に乗って、

「呑却し了る」と突っ込んだ。意気は大いに良い。鉄牛は言下に、

「這箇の一棒を余し得たる。（この一棒を受け取り損ねるなよ）」と言うや否や、覚えのある腕力で一棒を喰らわせた。ところが当たり所が悪く、即死してしまったのだ。即そこで、

紅葉落る時山寂々。　　晩秋の山は如何にも静かだ。（案に悟りを振り回したのを戒めた。）

芦花深き処月団々。　　どんな所にも月はある。（持ち物を捨てら明白になったろう。）

提起す向上の那一刀。　　更に上の上が有るを忘れるな。（どこまでも油断するでないぞ。）

虚空砕けて七八片となす。　　真箇成り切れば虚空も無し。（生死も真如じゃ。死につくせよ。）

の一句を以て引導とした。見事な一句である。

鉄牛とは死なぬ、動かぬ、何者もどうすることも出来ない牛で、計り知れない大力量の英霊漢の代表語と思えば良い。この牛に因んで「鉄牛」と言う同名者が多いので注意が要る名前である。

蚊子は血を吸う蚊で、小童を言う。

「子ネズミが虎に咬み付いたらどうしますか？」そこで鉄牛が「あな恐ろしや」と恐れのスタイルをした。自己無き自在さを身を以て知らしめた。と同時に、相手の力量を試す恐ろしい試験薬である。するとつい乗せられて、

「虎を一噛みで殺したでござる」と大きく出た。

鉄牛は間髪を入れず、虎をかみ殺すほどの大ネズミより、更に大きなネズミが居ることを知れと、一棒を与えて済度しようとした。これ大なる慈悲である。悟りにぶら下がっている見苦しさを救わんとしたのだ。向上の那一刀を授けんとしての涙であっても、打ち所が悪ければ斯様な事故になる。ましてや活句無き者が仏祖眼を生み出し得る筈がない。具眼の師が現れたら正に命取りに成ることは必定。

祖岳門下にも同名の者がいた。一度だけ遭ったことがある。南井白巌居士は、
「そんなに無闇に叩くでない！と欟隠老師に幾ら叱られても叩く奴じゃった。彼奴(あいつ)が熱烈に坐禅しているのを一度も見たことが無い。とにかく叩きたがる変な奴じゃった」と嘆いていた。棒頭に眼の無い者に警策を持たせてはならぬ。そこもどうやらその門流らしい。危ないところには近づかぬ方がよい。

そこでそんな痛い目に遭ってのご褒美なのか「見性」したと言われ、うっかり此処で口にしてしまった。それから大安売りの「見性」談義が数ヶ月続き、仏法を侮ってはならぬと古参に些(いささ)か虐められることに成った。本人は苦笑しながら「馬鹿馬鹿しいことをしました。もう勘弁してください」と本音を吐いて終わった。

こんな妙な新興宗教的道場が現実にある。気をつけて禅界を見守らねば、それが坐禅かと言われたら仏祖が気の毒であり、仏法が滅亡する。事は重大である。警策の神聖と威儀さえ分からぬ者が参禅指導などすべきではない。先ずはそんな師家と無茶叩きする乱暴者を撲滅する必要がある。

公案はこのようにひどいことにも使われるのだ。天下の真摯なる参禅者は、決して仏祖を悲しませてはならぬ事を肝に銘じて欲しい。諸仏祖師方はみな灰頭土面、童子の膝下を拝し、命がけで修して命脈を単伝された偉人である。その人にして本当の神聖さが分かり、慈愛を以て指導ができるのだ。決して身体に傷つけては成らぬ。道元禅師宣わく、
「この行持あらん身心自らも愛すべし自らも敬うべし」とあるではないか。況んや他人をや。況んや仏祖の種芽をや。

更にみんなが仰天したのは、「この五日間で悟りたいか。言うとおりにすれば悟れる」と。こうなると「見性」を何と心得ておるか厳しく詰問せねばならない。ここにどうしても正邪をはっきりさせるために法戦が必要なのだ。金儲けを企む輩も多く居るから「見性」大安売りの口説きには余ほど注意が要る。このような無謀な事を言うたりしたりするのは、祖師方の苦労を知らないが故である。参。

菩提心と警策

趣の変わった警策話がある。是非聞いて貰いたい。今言ったような馬鹿話ではない。巌頭・雪峰・欽山の三人は法友で常に行動を共にしていた。巌頭と雪峰は既にぶち抜いた作家であり長兄である。雪峰は菩提心勇猛、綿密なる苦心の人。巌頭のお陰で千五百人の衆を度す大宗師となった人じゃ。欽山はやや身体も虚弱な感がする。しかも機根が鈍重で未だもたもたして二人を悩ませていたようだ。

そこで二人は図って師匠である荒っぽい棒使いの達人、徳山の処へ連れて行って開眼させんとした。参師聞法に当たって徳山の問いに擬議した瞬間、すかさず徳山は痛棒を食らわせた。それ見たことか。千聖も避ける、涙に任せ相手かまわずの徳山ぞ。只で済むはずが無い。そこでも抜けなかった。部屋へ下がった欽山が、
「打たれてもそれは仕方が無いが、余りにも叩き方が酷(ひど)すぎるではないか」と愚痴ったのだ。癖が厚いととかく涙は分からぬ故に、ついヘタリついでに愚癡が出た。吾人も多々怨んだ覚えがある。三度や五度は誰もある筈だ。そこで兄貴分の巌頭が更に鉄槌を加えた。
「お前は本当に情けない奴じゃ。それでもって後日誰かに、俺はあの徳山に会ったなどと言うなよ」と。師匠の尊い涙が分からぬばかりに、とかく偉人の顔に泥をぬる。そんな事は許さんとなり。さすが巌頭ならではであり大きな厳愛である。

私怨でうっかり評すると人格が露呈して恥を千歳に残すことになる。慚愧、慚愧。
のち欽山は洞山良价禅師に参じて大悟。本懐を遂げて徳山の有難味が本当に分かったのだ。目出度し、目出度し。碧巌五十六則の［欽山一鏃（きんざんいちぞく）］は小気味の良い法戦であり、確かな実力が光っている。だが次があった。

六十歳再行脚の趙州老古仏がこの若手に、更なる奥義があるなら学ばんと参じて礼拝した。大法の為に身を捨てての菩提心である。聖人中の聖人である。これを聞いた巌頭が又々欽山を叱って曰く、
「あの老古仏に礼拝させるとは何事だ。学ぶべきはお前であろうが」と。持つべきは真摯なる法友である。

しかし時代が悪かった。法難の時代は暴君が好き放題する。あの英傑巌頭は河原で首を刎ねられた。権力者が自我・欲望をむき出しにすると、大切な偉人をも気に入らなければ抹殺する。世も末である。嗚呼。
切られた時、「ああ痛た！」と叫んだ。下手だったか殊更に鈍刀で切ったか。大悟した者が土壇場でそのような羞恥なことを口にするとは可笑しいと巌頭を擬議したのが日本の白隠であった。
霜辛雪苦の後、巌頭の真意が分かった時、ちょうど橋の側であった。歓喜した白隠は欄干に飛び上がって「巌頭まめだまめだ！」と高声したと自白している。白隠禅師にしてこんな時も有ったのだ。

悟った者はスーパーマンの如きだと妄念すること白隠禅師にして是の如し。痛い時は痛いに決まっている。全身丸ごとになるか、相手立てて苦しむかが、徹と不徹、疑と不疑の差である。麻三斤と同か別か。形しか見えぬ者には人格の内容は分からぬ。誤って祖師を擬議すること莫れだ。
誰か清風明月を疑わんや。何をか清風明月とせん。直下（じきげ）に清風明月を払う。求心止む時、即無事。無事是れ貴人とあるではないか。清風是れ聖人の声。巌頭まめだまめだ！

大叢林とは

大智老尼がいきなり、
「お前は大叢林とは如何なるを以て言うか？」と。
法しか無い大智老尼には修行者の日常、今今が法でなければならない大前提がある。いつも出し抜けだから油断も隙も有ったものではない。即今底以外に法は無いので当然である。当然、煩悩菩提、生死涅槃を百雑砕して本当の仏法を体得せしめんとする意気込みはただ護法の涙でしかない。常に真剣であるから涙は厳の厳となる。
「お前、この少林窟を小さくて貧弱な道場だと思って居るだろう！」と心臓を衝かれた。返答次第ではえらいことになる。
「さあ、どうじゃ。言ってみろ！」
「例え百人、千人居たとしても、真箇の菩提心が無ければ仏法護持は出来ない。人の数ではなく、菩提心の有無、強弱に有るので、大菩提心の者が居れば大叢林だと私は思う」。これが吾人のぎりぎり一杯の返答であった。
「お前、本当にそう思って居るか！」この気迫は何時も吾人の菩提心の程を確かめる、いや高める熱勢である。真箇の菩血提涙である。その眼光は容赦無しの、眉間一寸に刃を突け着けて迫るものだ。
「欟隠老師はな、一人でも本物の菩提心有る者が居れば大叢林だと言ったぞ！」大智老尼の眼に涙が有った。
どうやら「それが分かってやっておるならまあ良かろう。抜かるなよ！」の言わず語りで終わった。立ち去る後ろ姿を合掌して拝した。当然、熱烈になっている。涙、涙。合掌。

伝統ある大叢林は沢山ある。そこに祖心が有るかとなると、老大師が少林窟道場を開闢された故からして限り無く怪しいが、そんなことは吾人にも少林窟道場にも関係無い。「只」即今底のみ。

汾陽は大衆わずかに六人。趙州は二十人。藥山十人。楊岐派の祖、楊岐会禅師はぼろぼろの荒れ寺に住した。曰く、

「楊岐たちまち住して屋壁疎なり。満床尽く布く雪の真珠。うなじを縮却して暗になげく。良久して曰く、翻って憶う古人樹下の居」と。元古仏もこの句をいたく愛している。龍牙曰く、

「学道は先ず須くしばらく貧を学すべし。貧を学して貧の後ち道まさに親し」と。

大智老尼は檪老の大菩提心を全身に担って天地虚空を分外となさず。惨悔、惨悔。菩提心、菩提心。

愛すべきにして学ぶべからず

子供の成長期にはその時どきの発達摂理があって、今言うべき事と、聞かせてはならない事がある。教育も全ての技術も教えその事が、今必要か、妨げになるか、大切な時節がある。算数なら、先ず計算の仕方をきっちり教えて自在に計算できるよう指導することである。先に解答を教えてしまうと計算する気がしなくなり、その子を駄目にするからである。特に方便に就いては早くから聞かせてはならぬ。しかし濡れ衣を着せられる危険を避ける為に時期が来たら必ず能く教えておかねばならぬ。

例えがっしりと成長した大人であっても、経験の無い危険な道具などを使う場合は特に注意が必要である。無智によって生ずる予期しない事故等が付きものだからだ。怪我はするし、材料と時間が無駄になり、おまけに機械を壊してしまうではないか。起こってからでは遅いのだ。効率よく最速安全方法を学んでから実地に応ずべきことは言うまでも無いことである。

しかしとかく自信過剰な者ほど指導を受けようとしない者が多い。人に向かって言うことは好きで巧みでも、人から言われることも、人の言を聞くことも嫌いな者が居る。これらは常に批判的な聞き方しか出来ない輩だと思って間違いない。彼らは明らかに精神の歪であり徳性の低さと不安定性が原因である。菩提心が無ければ大方このようになってしまう。要するに年と共に自我が強くなると言うことだ。

自己を究めるには何と言っても菩提心が無くてはならない。そして正しい方法が無くてはならない。それには熟達した指導者が必要である。何でも教えれば良いというものではない。弘法大師も、言うべきは言え、言わざるべきは言うな。つまり是か非かを弁えよと。

ここに記す吾人も容易ではない。事がとても危険で有ることを先に伝えておかなければならないから、前段が斯く成った。それは次の評唱である。ここに極めて峻厳で大切な老大師の示唆を記しておきたいからだ。謹んで読んでもらいたい。

曰く、「一休・良寛の禅は愛すべきにして学ぶべからず」

諸人、如何と看るや。老大師の言葉である。偉人の涙である。我等に仏祖の誹りを受けさせぬよう切実な菩血提涙の吐露である。早くから吾人はこの言葉を耳にしていた。聞く人の内容によっては怪我をする危険をはらんだ劇薬である。

檪老は両師を否定しているのではない。立派に一隻眼を具した宗師であることを充分うけがった上で、大切な言外の消息を我等に知らしめている。これを上乗の作家と言う。作家とは優れ者のことである。

畢竟なんであろうか？　自己の胸襟より持ち来たって、仏道護持の大切な本分より照らして看ることで

ある。解決策はただ一つ。身命を賭した菩提心の照魔鏡にしか寄る辺は無い。
もし見過ごしては成らぬこの一訣を見いだせば、はや道を誤ることは無い。何を愛すべきか。何を学んではならないか。
両禅師の心眼は明晰であることを重ねて言っておく。決して軽く看てはならぬと言う事である。老大師のこの一句が心底より有り難くなる時節を檪老は待っているのだ。両師が檪老に出会って居れば全く変わったであろう事を確信する。
要点はどこまでも初発心を忘れてはならぬと言う事だ。大燈国師の「吹毛常に摩す」を時時とせよの底意、容易ではないぞと。吹毛とは吹毛剣のこと。一吹きで刃上の鳥の毛がスカッと切れる法剣であっても磨き続けよと。臨濟大師も死に望んで曰く、「吹毛用いおわって須く磨すべし」これが有り難い。
法有るを知って、身有るを知らずだ。忠（誠実）を以て禅と為し、孝（実行）を以て戒と為す。厳を以て愛と為すが法である。慈愛が即治生産業となり世の光明と成らねば禅の価値は無いぞとなり。
諸人、檪老の厳愛が見えたか。参。

ドンブリ酒

開枕（かいちん）後（叢林は九時眠りにつく）の或る寒い夜坐。檪老と自照居士、互いに身を忘れての打坐。そこへ南天棒は二つのドンブリへなみなみとついだ酒を持って現れ、
「是れを飲んでやれやれ！」と。
禅に道徳論などを持ち出す輩は法を滅ぼす者と知るや知らずや。道徳論は常識論であり単なる因果論の範疇に過ぎない。無縄自縛である。これを超越する道は因果の無自性を体得すること。即わちその物に成り切って「見性」することである。事の大事さは天地の差である。
こういう話をされる時の大智老尼の眼は、「只」聞いているか否か。自己なき様子を伺っている殺気人の眼光である。恐ろしや、恐ろしや。

事の善し悪しは縁次第、人次第である。それをして力と為し菩提心と為せば何ぞ嫌う底やあらん。もし縁に流される鈍根の者ならば、見聞覚知の奴隷となり名聞利養（みょうもんりよう）の世俗の念からは救われぬ。
立場・酒・女・金・名誉も縁に過ぎない。囚われたら一生を棒に振るやつである。薬毒同時である。しかし世を荘厳している必要な要素である。用い方一つでどちらにもなる。菩提心の本（もと）には用は無い。これを活かして実地に救いとなすのは打坐で鍛え抜いた力のみである。
ドンブリ酒の味は如何にと。知るものは語らず。「常に星を見る人、語を用いず」と古人も言っているではないか。自ら足って他を見ず。「今」「只」あれと言うことだ。「即念を練る」とも言う。君もやれと言うことだ。

叢林（そうりん）の食事とタコ刺し一杯

檪老は大法護持のためのみの方である。つまり上求菩提、下化衆生その人である。この心身有っての衆生無辺誓願度、煩悩無尽誓願断、法門無量誓願学、仏道無上誓願成が達成できる。檪老の菩提心とはこの実行である。

或る時、大智老尼は発心寺の老大師を尋ねた。檪老は顔を見るや、
「よう来た。さあ上がれ。と言って私の手を引っ張り上げるようにして、いきなり生卵を二つ、コチッと割り、お椀についで醤油をちょろっと落として、
「さあ、これを飲め」と言うて勧めてくれた。
その時の嬉しかったこと、有り難かったこと。今でもよう忘れん」と。

それはそうであろう。老大師の慈悲と菩提心を頂けば万劫の餓えを消(しょう)ずだ。それにひもじいぐらい辛いことは無い。貧すれば貧するの格言は正し。

叢林(そうりん)の食事に対しては少なからず心配していたようである。医者としては栄養面において見過ごすわけにはいかないのは当然であろう。

吾人の叢林時代は東京オリンピック直前の時。バブルの始まる前であった。朝は天上粥、昼一汁一菜、晩は素麺だけ（うどんのみ）。百日禁足の間は厳しい。新参者は栄養失調になって当然の状態であった。古参は立場上融通が効くから危惧するには及ばなかったが、却って放縦になり、界隈は不埒な雲水で成り立つ悪弊は恥ずべき姿であった。

平成の今日は如何様な叢林食かは分からぬ。が、我が道場にても明らかに昔とは違う。

当時の勝運寺も粗食は自慢に値するほど際立って貧しかった。病体の檪老は補いの為ちょくちょく出かけ、タコ刺で一杯やっていたそうである。この地のタコが特に気に入っていたようだ。老尼曰く、「檪隠老師は御医者さんじゃろう。口が肥えていたからのう。それに病上がりの体じゃろう。書き物などで無理されていたから必要じゃった」と。吾人が中学より小僧に出されたのも極貧故に口減らしのためであった。

この身を養って行く上で、人々の体調や様子があるし、食のあり方にしても決めて縛るは融通と働きを阻害するので、時には体の要求に従って食する方が良いこともある。病ともなればこのことはとても大事である。檪老にはタコ刺しと一杯は確かに必要だったのである。今今の事実が法であり命である。これを自在にするのが救いである。解脱の働きを言う。この身を忘れて自在にすることと思えば良い。

笑い話ついでに一言。瀬戸内海の幸はタコだけではなくどれも美味い。だが高いぞ。されど美味い。

あら楽し　思いははるゝ身はすつる　浮世の空にかゝる雲なし　　呵々大笑

檪老と酒

檪老は南天棒同様、酒をうまく活かして大活躍をされたことは有名である。「檪隠禅話集」は「南天棒禅話」や「参禅秘話」「参禅漫録」以上に面白い。「酒禅」の章がある。「釈尊の飲酒観」や「古英雄の酒」とか、「酒と禅僧」などと色々博覧強記にまかせて意義ある酒法談が満載。そこで自分の事を次のように言っている。

「六十五年の習慣だから絶対禁酒も悪かろうとの説もあるから、一杯だけを許してもらうつもりだ」と自己申告を宣言しておられる。毎日一杯は飲むぞと。本題は次である。面白かったら笑って欲しい。

檪老の行くところは大禅会である。東京駅に迎えに来てくれた法友との再会の喜びに加え、遠路を労うために即一献と相成った。これは分かる分かる。現在と違い大阪から十二時間以上もかかっていた時代であるから、その意気や察するに充分ではないか。誰でもそうするはずだ。

しかしだ。これは僕がおごる。では今度は私がおごるよ。これが続き次代にボルテージも上がったようだ。愛飲家の常である。実に愉快だし結構なことだ。問題は次だ。

会場についていざ提唱を始めようとしたら酩酊して出来なかった。よほど興に乗り一献が過ぎたようである。さすが檪老だと感心敬服したのは、吾人が聞いていた通りを、正直に書いて「大乗禪」誌だったかにあけすけに公表されていたことだ。

自分の失態を素直に詫びながら、それを法財として闊達自在に巧みに説かれていたのには如何にも余裕しゃくしゃくたる威厳と威光を感じた。自己無き大自在底の働きや是の如し。檪老ならではと感服した。

まあ読んでみることだ。

これらは聞いた話ではなく欠伸老の一文である。ついでだから載せてみる。

［馬琴曰く、「一杯は人酒を飲む」（許す）。「二杯は酒酒を飲む」（無駄じゃ、許せぬ）。「三杯は酒人を呑む」（罪の上の罪）］とある。ここらは欠伸老の酒観であり全面同感のご様子である。

弘法大師も厳寒の際は酒一杯を許すとある。また、李白一斗詩百編とか、ゲーテも半生に葡萄酒一万本飲んだとか、芭蕉も黄門様も、山岡鉄舟もキリストも、孔子も嗜みつつ大活躍の力にしたことなど、その博学多才な知識には驚くばかりであり面白さは一入（ひとしお）である。

しかも今上げた全ての書籍は記憶だけで書かれた物だ。所々に記憶違いもあるが極上の内容からすれば一切問題では無い。但し、引用する段には一考した方が良い処もある。それにしても欠伸老の記憶力と博学や驚くばかりである。我れもあやかりたし。

欠伸老の結論として、酒は人々が自由にすべきものだが、決して過ごしてはならぬと、医者として立派に臨床的に詳しく説かれている。面白いだけでは許（すま）されない。酒に礼節ある者は酒に飲まれることは無い。

欠伸老が生身をもって活説法され示された慈悲や涙なしでは許されぬ。されどあな面白や。

自照居士曰く、「儂は八歳の時分より呑んで居る。それを今更止めよとはチト無理だ」と。直ぐ隣り当たりの親戚に造り酒屋があった。ハシゴを登り、麦わらのストローを突っ込み、出来たてのほやほやを幼小より嗜んでいたと聞いている。何と、時代の違いとは言えこんなに子供達は自由だったのかと感心した。実に能く道を愛し酒を愛し、常に法談して楽しく飲まれた人であった。

「南船北馬五十九年。生也全機現（しょうやぜんきげん）、死也全機現（しやぜんきげん）」と、自分の棺桶の蓋に自らしたため、五十九歳にして人世の幕を閉じた。癌だと聞いている。この見事な絶筆の上品な棺桶蓋は今も勝運寺のどこかにある筈である。本堂の片隅にずっと掲げられていたので能く覚えている。

欠伸老の弔電に曰く、「君、笑って瞑せよ」と。自照居士は母方の爺様である。

頑固爺様は、正月三日間は一日に一升は呑んでいたと義光老師より聞いている。吾人の酒好きは父方のあの頑固爺様と母方の爺様譲りにて、遺伝性であることは間違いなさそうである。今のところ酒で体を壊したり入院などはしたことがない。それほど飲んでは居ないと言うことだ。

だが一度も遭ったことも無いのに、飲み過ぎて三度も入院した、などと書いて誹謗する者が居るのには慨嘆する。暗闇から石を投げる卑劣の漢に成る莫れだ。法縁の無い者は可愛そうに思う。本当の意味で自分を大切にして貰いたい。自己を捨てる勇気が無ければ本当の自分を大切には出来ぬ。とにかく菩提心を増長するよう飲めば最高である。

吾人常にいう。或る時は食欲増進剤、或る時の一杯は疲労回復剤、或る時は睡眠剤と自己弁護。

酒話で義光老師の暴露談を思い出した。自照居士は実に筆達家だった。南天棒に厚遇されていて、参禅に行くと一杯勧められては代筆をさせられていたそうである。その数も三百や五百どころではなかったとのこと。貰った者は偽物をつかまされた事に成る。忙しい南天棒を擁護した故のこと。悪気は無いので少しばかり同情する。ところで贋物との見分け方だが、妙に達筆だったら自照居士のものだと思ったら良い。下手くそ物が本物と言うことだ。

呵々大笑。

キツツキや　枯れ枝さがす花の中

父の苦笑

欠伸隠老師は東大医学部次席卒業者である。神童として誉れ高く幼小より大部の書籍を読み漁って居られたと言う。博覧強記とは将に欠伸老のことであろう。家系が医者系だったらしいから知識は想像を遥かに超

えていたに違いない。漢字に就いてもその造詣は相当の実力者である。
槐安国語提唱録で、大燈国師の或る文字に対してもの申し不適正を論じておられる。境地互角なので臆するものはない。勿論槐安国語は関山国師が中心になって編纂されているので、両国師が間違ったとも思えぬ。が見逃さず指摘される鋭さはさすがである。
それ程の方であればこその知識と境界で提唱されているのだから素晴らしい。吾人の父も尊崇置くあたわずだあった。

或る時、それでは自分もと、欠老の博学に期待して「号」をお強請りしたそうだ。すると欠老は何の躊躇も推敲もなく、「そうだ。忠海だから忠海にしよう」と、あっさり「忠海」と付けたそうである。このことを道環老より聞かされた時、そんな面白いことが有ったのかと欠老の別の顔を知った。これは愉快だぞとばかり早速父に真偽を確かめに行った。無風流な記憶の出現に些か困惑していた父の顔が可愛くておかしかった。
「ほんまに欠隠老師はさっぱりしていたな。なんちゅうてもひとっつも考えること無しに忠海と来たわい。断るわけにもいかず・・」初めての最後の顔であったが、吾人の表現を以てすると、蘊蓄の腐りかけ。欠老の電光石火と途轍もない無邪気さを理解しかね、多少の不満も漂った顔だった。
「それで忠海の号をどうしたんですか？ 使いましたか？」と意地悪く吾人が聞くと、
「ただのうみだから忠海には違いないが、忠海だから忠海という号ではな・・」と訳の分からぬ困り方の返事であった。笑ってしまいそうなその「号」とその付け方こそ欠老の専売特許ではなかろうか。名は体を現す、と言うが欠老にはそんなケチな名も体も無い。欠老の一言一句は全て純金である。

父の切なる願いは「忠海」で終わったが、大智老尼の「大智」も兄の「龍山」も欠老が名付け親である。普通名前はその人柄を重ねてみるものだから、希望や願いが大きいほど含蓄があって喜ばれる。吾人もある程度漢字をいじるのでその点は多少考慮して［号］を付けている。
ところが欠老にとって名前は他と区別するための婆々和々、つまり音の符牒に過ぎない。言ってみれば何でも良いわけだ。名相に囚われないとは元来この事を言うのだから、笑うわけにはいかぬ。
何の意も無い程美しく尊いものはない。将に欠老即「法」である。父には本当の欠老が大き過ぎて見えなかったのだ。信頼尊敬もその程度であったことは残念であった。徹底には自己は無い。ここに修行の内容が現れるというものだ。
「申し訳なかったが一度も使ったことが無いな・・」と、後悔にも似た欠老とのほのぼのとした思い出のひと品であった。父の「号」は元古仏二世の孤雲禅師を慕っていたので「孤雲」と自分で付けたものである。
「大智」は欠隠老師の弟子となり出家する時に与えられたものだ。ところが爺様は「大智」などとは不届千万、もっての外だと却下されたらしい。有名な「大智禅師」を汚すと受け取ったようである。
ところが「老大師が折角付けてくださった名前だから」と毅然としてあの頑固爺様の言を退けた。さすがに欠老が見込んだ野生の道人である。「忠海」「大智」「龍山」と並べてみると結構な号とも思えるが、

老大師の人格よりイメージに落ちた父の気持ちも分からぬでも無い。躊躇無しの「忠海（ちゅうかい）」、何となく音調が似ていて檪老の豪放磊落、闊達自在そのままの生き様が、忠海のタコ刺しと一杯に重なり、面白い偉人と共に父を偲んだ。このことを知っているのは道環老と吾人だけのはずである。檪隠老師は本当に底抜けの人であったことは疑いようも無い。時の総理を初め政財界の諸仁が稽首されたのも能く解る。南無檪隠老古仏

無相定（むそうじょう）

今では全く兎の毛ほども問題にする宗教家がいないが、老大師滞在時は「正信論争（しょうしんろんそう）」で禅界が二派に分かれて大議論の真っ最中であった。昭和三年（1928）から始まり、昭和十年（1935）の永きに続いた。駒沢大学学長　忽滑谷快天（ぬかりやかいてん）を中心とした学問派と、只管工夫、体得を旨とした実践派の義光老師や義衍老師や祖岳老師方から始まった論争である。

学問派によって公案否定、見性否定、悟り否定もここからである。故に「そのまま仏法」や「形真似坐禅」を形成して諸仏祖師方を酷く汚してしまった。その害毒は今日に及んで公案弊害と並び大きく仏法を歪曲させている。今日どれほど多くの参禅者が迷わされていることか。

言うまでもなく仏法は実地の修行なくしてあり得ない。絵に描いた餅と本物と論ずる論理も言葉もない。初めから正邪は決まっており、争うべき課題ではなかったのである。しかし非なる仏法は見過ごせなくて、真摯なる御師家様方はあえて議論せざを得なかったのである。

義光老師曰く、

「祖岳（原田）さんから、お前さんもやるかと言うて来たので、儂はもうとっくに刀は鞘を離れたと言うたら、儂もじゃと言うてな。それから始まったんじゃ。それで七か八稿目の原稿を書いている時に檪老が部屋へ来てな、

「それは大事なことじゃ。大いにやれやれ」言うてな、儂をけしかけとった。儂は檪老にな、

「このような大事を、老師はなぜほっとくのですか」と言うたら檪老はな、

「無相定の者は争わんのじゃ」と言われた。儂はハッとしてその瞬間、筆を折った」と。

世界を呑吐した老大師の偉大さに心底稽首された義光老師の顛末である。

あさ緑　すみわたりたる大空の　ひろきをおのが心ともがな　（明治大帝　）

平成十六年、膨大な私費と時間をかけて当時の全資料を纏め［曹洞宗正信論争］として世に出した奇特人がいる。山口県の龍昌寺住職・竹林博史老師その人である。無相定に導き、争いの無い世界にするために今本当の正信・信仰・宗教・平和を論ずべき時ではないか。その好資料である。が全く、何処からも何の響きも無いそうである。これではテロは無くならぬ。嗚呼。

檪老とバイオリン

道環老曰く、

「檪隠老師は一杯飲むと実に楽しそうに、子供のように無邪気にバイオリンを弾いておられた」と。意外なことを聞いてしまった。そう言えば老大師の家系には医師を始め学者が多く居るが、音楽的素養も豊かにあるようだ。檪老の曾孫（ひまご）さんたちは音楽家も多い。

そのことについては義光老師からも大智老尼からも一切聞いていない。老大師の個々の様子を全く問題にしていなかったからだ。相手を見ていなかったという証明であり具眼の証拠である。

欟老が修行の要点として口を酸っぱくして説かれているのは、「相手を見るな」と言う事である。相手を立てて見た瞬間、自己が発生する。相手立てる癖が悪知悪覚、妄想・妄念・妄覚の根本であるからだ。まさに禅の要諦であり急所である。自己を立てずに「今」「只」する。これが仏道修行であるぞと。

楽しみとかの問題ではない。全て一瞬の事実の問題である。この世も、人生も、真実も一瞬の様子である。言い換えれば、目前の事実を除いては人生も社会も平和も成り立たないということを欟老は身で教えているのだ。即今底に成れ、[心]を綺麗にせよ。それが菩提究尽であり大平和であるぞと。

覚者の諸行は悉く覚上の「事」で迷悟に関わらない。老大師は常に縁に応じて跡形がない。これを「自己が無い」と言う。自己無き時、自己ならざるなし。思い出した歌がある。

烏黒く鷺は白しとみるままに　直なる盤に玉がコロコロ

釈尊は真相（真理）は文字や語句には説けないと言われた。否、人々分上、露堂々故に、更に説くべき法は無い。これが楞伽經に説かれた「四十九年一字不説」の真相である。欟老は一字不説を実で説いているのだ。

欟老とバイオリンなんて、美女と野獣のような。否否、梅に鶯、如何にも瀬戸内海の島々と静かな潮風を感じさせられるではないか。欟老がバイオリンか、バイオリンが欟老か。実に絶妙な音色、誰か聞く。

書の涙

欟老は大法を得させたいばかりの涙づくしである。雪竇禅師の頌を書して訴えて居る涙は重い。能く注意してもらいたく、故に記してみる。実に個性的で素晴らしい揮毫であるが、涙は中身である。

「一を去却し七を拈得す。上下四維等匹無し。徐に行て踏断す流水の声。縦に観て写し出す飛禽の跡。草茸々。烟冪々。空生巌畔花狼藉。彈指して悲しみに堪えたり舜若多。動著すること莫れ。動著すれば三十棒」

碧巌六則の頌である。雪竇禅師の境界と七翰林の冴えはいかにも見事だ。褒めざるを得ぬ。言いようも比べようも無いそんな途轍もない偉大な働きをするものは滅多に居ないぞ。祖師の涙を見て取れと、欟老は内心べた褒めして居る。真意をちょっと説いてみる。

取り上げたり捨てたり、上じゃ下じゃなどのごたごたしたものは何一つ無い。流水の音さえ踏みとどめ、道無き空を自由に飛ぶ鳥の足跡さえも捕まえるほどだ。どこまでも雲門禅師を称えての賞賛である。

なに、人事では無い。そんなことは何でも無いことよ。よく脚下照顧してみよ。ほれ、眼前に草がぼうぼうに生えて居るでは無いか。火をたけば何処にも煙が立つ。何に拠ってかだと？

因縁所生の法に決まっておる。法は万物である。万物は万事。物の外に見るべき法も聞く法も真理も無いぞ。みなこの即今底の真相がはっきりしないから徒に心を労して迷うている。ここに達するまでの雲門の命がけの菩提心が尊いのだ。努力なくしてあるべきや。努力を間違えて、他に向かって求めると悲しいことに成るぞ。

舜若多を見て見よ。永年月岩の畔で他に向かって坐禅した。可惜許。帝釋天がこれを悲しみ哀れんで天から花を降らせて覚醒を促したではないか。是れ仏祖の慈悲である。こんな無駄な坐禅はするなよ。もししたら「三十棒」をくらわすぞと。

雪竇禅師のこの大慈大悲の痛棒が分からぬ者は仏祖の児孫では無いぞと、欟老は雲門、雪竇の熱血を伝えんとの涙である。吾人は碧巌中この頌が一番好きで、毎朝詠じて菩提心の糧にしている。

余談だがこの雲門をはじめ、保福・長慶・翠巌は雪峰下の豪傑である。碧巌「翠巌眉毛」の則はこの三傑が道のために真訣を競っていて面白い。そこへ雪竇と圜悟の二大老が大法久住のために見事なアドバイスをして錦上に花を添えている。因みに玄沙・鏡清・太原孚上座も雪峰下である。

あの　倶胝をぐゅうぎゅう虐(いじ)めた実際尼も雪峰下。その倶胝を大悟させた天龍、雪峰の兄貴分の巌頭、欽山、老古仏の趙州、臨濟を追い込んだ睦州、そして臨濟を大悟させた大愚、仰山、蜀の十七僧を悟らせた妙信尼、龍牙、潙山下の劉鉄磨、紫湖、長沙等まだまだ英雄豪傑が沢山居た時代である。

弘法・傳教両大師が渡ったのは残念ながらこのちょっと前である。正師に会わざりしを無念に思う。会っていたらこの国はもっと良くなっていたに違いない。

今日真実の道を尋ねる者極めて稀である。自分の子供さえもほったらかす時代に、どうして世界平和が有り得ようか。善悪全て心より生ず。徳力を養い、精進努力の功徳は時空を超えた枯れない花である。日本のみが発信できる大平和を成す道が確かにある。

何事も豪快

欟老は揮毫を頼まれると、「よし、分かった」と躊躇なく引き受け、みんなで準備に入り、大変勢いよく気合いを入れて書かれていたと言う。

墨汁を大きな灰皿のようなものに注ぎ、ガチガチになった大きな筆を口に入れて噛み砕き、おもむろに墨汁につけてたっぷりと滴るような筆を、まことに大胆に、勢いよく書かれていたさうだ。御実家で書くときは奥さんを相手に墨について色々蘊蓄を語り、使い分けていたらしいが。

義光老師の揮毫準備は、ある時から全て吾人がした。義光老師が書かれる時、側(そば)で大智老尼は欟老との書きぶりを比べてはいろいろもの申していた。

「欟隠老師はそこの所で・・　もっと力を入れてた。グッと勢いをつけて！」と、大智老尼は身振りしながら書いている側からぶっきらぼうにそのような批評とも比較とも指導ともとれる発言をしていた。老大師の豪快な書き振りがよほど好みに合っていたようである。

欟老の書きぶりを見ていない吾人は、大智老尼の口から態度から現れる老大師の書きぶりが目に浮かんだ。書いている側から言われる義光老師は、

「書かん者が・・　黙っておれ・・」と大智老尼を制しつつ淡々と書かれていたのが目に浮かぶ。

義衍老師（吾人の叔父）は長穂を自在にして独自の書風を完成された巨匠である。華麗にして独特な線質は絶古今であり吾人も惚れ込んで居る。禅者は書を頼まれる立場なので多少の使い手でありたいものだ。

まさかバイオリンを習ったとは思えない。書もまたそうで決して習ったものではなく、聞いて学び、見て習得するというまさに才あるが故の自然な様であろう。大智老尼は、

「欟隠老師の字は境涯辺(きょうがいへん)だからな。独自の筆勢(ひっせい)であり書き振りだからなあ。ああいう書体はマネができんのよ。義光老師の字は上品で綺麗すぎるんだ・・」とか。

掛け軸を取り替える度に懐かしそうにままそのようなことを言っておられた。遂にバイオリンのことを聞くことがなかったのは、覚者のすること為すこと全てこれ仏作仏行と体達していたので、個人の立ち振る舞いなど眼中になかったのだ。そこまで漕ぎつけていたから、老大師は大智老尼に厳しかったのである。

大智老尼が大成したのは、老大師滅後間もなくであった。

袈裟衣は仏祖意に非ず

暫くは侍者が付いていた。とても綿密な人だったと言う。法要が終わり袈裟・衣をたたみ仕舞おうとすると、

「よい、よい」と言うて簡単に衣桁(いこう)に掛けて済ませていたそうである。衣桁とは部屋の角隅に置いて袈裟や衣を簡単に掛けて置く優れ物である。

神社仏閣も袈裟や衣も大切なものには違いない。大切にするのと、それらに使われるのとの違いは天と地の差がある。使われるとは自己の本分を喪失して、心を奪われ囚われることと思えば良い。

日はまなこ　虚空は体　風はいき　海山かけて我が身なりけり

これが老大師である。それをそれと知ればよい。それを自由自在に実(今)を受用する底こそ真の報恩底である。実とは即今底であり実相のことである。今の事実に成り切ると、実相としての塊物が無いことに行き着く。働きその物に成り差別に成り切ると相手が無くなる。これを無相と言い、平等と言う。ここで初めて認める物が無いことを体得する。このことを悟らせて大安楽の境地を得させるのが檪老の菩血提涙であり諸仏祖師方の悲願である。

でなければ坐禅は時の無駄遣いとなり死物と成る。形ばかりの行持や袈裟衣や豪華な建物を有り難がるようになるのだ。仏祖意の神聖が無ければ真実は無い。世俗の思想や論理に翻弄されて却って世人の笑いを被り、俗人に憐愍せられるぞ悲し。

馬祖下に鹽官国師なる禅傑あり。華厳教に精通した座主と同席した折り、座主が早速自慢の華厳教を説き始めた。ここで正邪を画する力が無ければ法の人ではない。国師は既に座主の無眼子を見抜いていた。為に救わねばならぬ。

「何が説いてあるのか」と。座主曰く、

「ひと口で言えるものでは無い。重重無尽の法が説かれている」と。悪智悪臭紛々。忽ち国師は払子を立て、これで真正の法を伝えようとした。

「これは何と言う法に当たるのか」と。檪老が汚れたフンドシを示したと同じである。座主は詰まった。たったこれだけで息の根を止められたのだ。見たままではないか。憐れに思った国師は更なる涙を注いで曰く、

「思而知、慮而解、是鬼窟活計、日下孤燈、果然失照、下去」字の通りだ。思いを巡らせて知ったり、考えで理屈を作り上げたものが何になる。これらは全て糟妄想に過ぎん。太陽の下で蝋燭を照らして何を見ようとするのだ。阿呆らしいことをするな。さっさと立ち去れと涙の一喝。

熱血なる求道心を促すための鉄槌である。理屈を捨てて身を翻し、[その真意は何か]と迫り来たるを願っての親心であった。

鹽官禅師の真意は、実地に当たって理屈は如何に役立たぬかを知らしめ、見聞覚知、即今事実のまま光明であり重重無尽の法であることを直説したのだ。これでこそ禅は本当に活きてくる。だがその慈悲は通じなかった。可惜許。縁無き衆生は度しがたし。

至道無難禅師の母親は相当の実力者であった。当時も軟弱者の修行者が多かったようだ。語る価値が有るか無いかを分別するに、「三八九とは何ぞ?」とぶっかけて仕分けした。仙涯和尚は○△□を書いて「これ何ぞ?」と。雪峰は三個の玉を転がして[これ何ぞ]と。悪戯も眠りを覚ますためには仕方がない。全てこれ真実を知らせたいばかりの涙である。本当に素直な人は滅多に居ないものだ。

檪老がトゲのささった指をわざわざ目の前で指し示されたのは何のためぞ。禅聖のいちゝは全てその

ための適切な示唆である。例え一瞬たりとも袈裟衣を粗末にした、などと思ったら禅を語る資格は無い。
実を自由に受用するとは「今」を自在にすることである。容易のことではない。正念相続の結果である。袈裟衣や寺の大小が眼にちらつくようでは到底無理な話である。仏法僧の神聖は何処へやら。人の努力を無視して恥も外聞も無く寺を乗っ取る和尚も居る。将に末法である。

何故にかくなりし身と折々は　姿に恥じよ墨染めの袖
月影に命をかくる猿よりも　沈みはてたる我が心かな

通幻寂霊、黄檗、臨済、睦州、徳山等が居たら打ち殺されるであろう。どのてにしても自我の元を徹底坐り殺すしか無い。その人は誰ぞ。殺すべき者は何処に有る。さあ、速やかに言えゝゝ、と檪老の声がする。

古人曰く、禅者の行履（あんり）は日常底を凌駕し、とにかく綽々（しゃくしゃく）として余裕と自在がなければならぬと。物、金に捕らわれていたら出来ない相談だ。衆生に憐愍される宗教家であってはならない。身を削って金子を貯めたが飢饉にあえぐ人を救ためにに二度全財産を擲った。三度目にようやくあの一切経を世に出したのが鉄眼禅師である。曰く、
「頓に清風明月の外を超え、鑊湯爐炭裏（かくとうろたんり）（地獄の如き処）に安住す」と言うた。事を自在にするとはこのことである。鉄眼の喪儀に三万人の衆がその徳を偲んで集まった。貧乏を物ともしない本当に腹が据わらぬと「今・只」に導き、世界平和、大安心の境地を得させることは出来ぬ。禅僧の価値は無いと言うことだ。
檪老曰く、「よい、よい」と。檪老のこの言、うっかり軽く見てはならぬ活句である。要注意、々々々。

口に血を含んで語ること莫れ

本当の求道者なら天下の大宗師を尋ねるのは当然である。正師にあらずんば学ばざるに如かずである。一隻眼を具すことすら容易ではない。況んや大成（大悟）することは並の努力で得られるものではない。この一大事因縁、正法護持を責務として檪老は義光老師・大智老尼を仕上げるべく療養を兼ねて勝運寺に長期逗留して鍛えておられた　。

そこへ或る熱烈な修行者が現れた。立派に一隻眼を具え、宗要を自在に説ける大器であった。惜しむべくは悟りがぶら下がっていて、「自分はぶち抜いた」と言う自負が紛々としていた。確かに一度自己を忘ずれば天下太平となる。法を得た。もう修行は要らぬと言う大自負が生ずるものだ。安心に腰を掛ける奴じゃ。平和ぼけすると乱の起こる危険が有ることを忘れてしまう。裏を返せば、全て法であり空ではないかと自分流に法を作って得々して法を説くようになる。ここが危ないのだ。

論は義にあにず、義は論に非ず。事実と理屈は世界が違う。このことがはっきりしなければ理に落ち自分の法理に酔うてしまう。この手合いは皆鼻孔遼天、自信満々、大我慢となり実が伴わぬ。達磨九年面壁、一字不説、祖師西来意の本当の消息が解らぬからだ。これを「悟りの暗窟」と言いい、大捨すべき大きな持ち物が有ることを言うので、古人が悟後の修行を重んじられたのだ。

臨済四世の風穴大宗師と牧主の問話で、「牧主曰く、断ずべきに当たって断ぜざれば返ってその乱を招く」と。ここで師の風穴は大いに喜んだ。今まさにそれに当たる。断ずべきを断じ、殺すべきを殺さねば本当に救えぬ。真空妙有の闊達無礙、度衆生は出来ない。檪老はその大器を惜しみ、大成に導くべく次のように説かれたそうである。
「口に血を含んで人に向かって吐けば、まず自ら汚れていることを自覚せよ」と。檪老にして初めて言える金口である。「断ずべきに当たって断ぜざれば返ってその乱を招く」檪老満身の菩血提涙の血滴々を眼

前に見る。ああ、涙々。

部屋より出た時、その人は気配が無くなり別人のようになって下山したという。のち、名実ともに天下の大宗師となり有名になった方である。されど今や亡し。牛頭を彷彿とさせられる。「転た悟れば、転た捨てよ」が欠伸老の真骨頂であり菩提心の実践以外に無い。大燈国師の「無理会のところに向かって究め来たり究め去るべし」遺偈の「仏祖際断して吹毛常に摩す」である。

「ここが大事なんだ」と大智老尼より耳にタコが出来るほど叩き込まれた。いや、タコだらけだ。正法体得の正路だからである。

因みに「仏祖際断して吹毛常に摩す」とは、大悟して更にどこまでも即今底を練り続ける。菩提心の日常底を言う。趙州禅師一生の行履を禅者は決して忘れては成らない南針である。これが本当の度衆生である。道元禅師もいたく趙州老古仏を稽首されているのは大悟の後の練りにあり努力にある。努力、努力。

欠伸老の仁王立ち

こうして老大師を慕っていろいろな人が訪ねて来た。或日、欠伸老は玄関で仁王立ちになり、ご自身の胸を叩き、

「お前の胸の中には蛇が居る！」と大声で怒鳴り、其場で逐い返したそうだ。見たことも無い老大師のお姿に驚いたという。其場に立ち会った人は皆そろって、「あれは凄かった」と。

聞くところによると、大勢の門下の間で様々な確執があったようである。老大師に参じながら、老大師を困らせる人たちも居たということだ。争うことを最も嫌っていた方だけにとても胸を痛められた。お歴々揃いであれば、中には組して気の合う者同士の集となる。集は執となり衝突する。甚だ見苦しいが参禅の士にしてこの弊あり。これが世の姿である。ただ本当の菩提心無きが故のみ。

「東京にも魔党が居る」と義光老師への手紙に書かれていたから、目に余るものが有ったのだ。真摯なる門下生は甚だ迷惑したであろう。平何とか海なんちゃらいう居士が居た。漢文を能くし、欠伸老も原稿の便宜を彼に担っていた処がある。知力を誇り会を牛耳らんとした策士の才もあったため揀択の念、いささか人心を惑わした。発菩提心は灰頭土面であり上求菩提、下化衆生であろうに。嗚呼。

義光老師を排斥する怪文書もかの者が書いたと噂されている。それにより義光老師は嫌気がさし、高槻の少林窟道場から身を引かれたと聞いた。その一物有る怪文書を一度見たことがある。

欠伸隠老師を、否諸仏祖師方を地下に泣かしめてはならぬ。とにかく老大師からは、誰が何をした、誰に何をされたといった話は一言も聞いてないと義光老師も大智老尼も言っていた。却って哀れんでおられたという。欠伸老の無量の慈悲や尊し。

釈尊における提婆のごとく、伝統二千六百年の今日まで、祖師方が受けた法難は数知れない事実である。欠伸隠老大師は本当に衆生本来わが子なりで、すべてを愛して止まざるの境界であった。どうしても老大師広大無辺の慈悲心を伝統しなければ世界は滅ぶしか無い。諸仏の悲心を看取されたし。道友の菩提心を切に祈るのみ。南無欠伸隠老古仏。稽首百拝

老大師の家風

又々門外不出を破って吐露す。

「欟隠老師はな、碧巖の提唱に当たって、圜悟の評唱も著語も立派だがことごとく盲従しては成らんぞとワシに注意されたぞ。往々に抹殺せねばならぬ所が有るとも言うていた。なかなか素晴らしい著語は少ないとも言うとった。

老大師の境界から見ると圜悟の糟(かす)が皆見えるんじゃ。しかし圜悟は大した境界ぞ。それ以上の欟隠老師だと見抜く者が本当の法の人なんじゃ」と。老大師の偉大さを篤と力説。既に了々。灼然。

確かに小気味よく大宗師の圜悟をも取って投げている。これで仏法久住と圜悟禅師をはじめ三世の諸仏祖師方は大歓喜していること間違いなし。何故なら、真の作家は「法有って、身有るを知らず」だからだ。

大智老尼はこうして鍛えられ育てられたのだと、欟隠老大師を更に身近に感じた。諸仏の如く欟老は菩提心を専らにして、時々即今底の神聖を汚さぬよう努力せしめることであった。ここに仏道修行の根幹を定めた家風にこそ、老大師の大力量を確信することが出来る。

深く読み解いて言えば、即今底の神聖を汚さぬよう即今を堅持するには菩提心無くしては有り得ない。即今底とは六根（眼耳鼻舌身意）の作用自体を言う。今、今、自在に変遷活動そのものを言う。六根の作用そのままそれが宇宙の大活動の証明と思えば良い。これを成住壊空(じょうじゅうえくう)と言う。変化に自性が無いので宇宙は変化自在である。ここを道元禅師は「無常は仏の御命なり」と仰せられた。死んで死なぬ大きな命と言うことだ。

作用自体に自己の無いことを徹見するを「見性」という。「見性」するには即今を離してはならない大前提がある。菩提心と即今底と六根が真箇一つに成ったらば、悟りの方からやってくる。これが本当の法である。身心脱落の実体であり真相である。徹するとはこの実証であり自覚である。

菩提心が堅固であれば必ず仏法は護持される。先ず是の事を徹底信じてかかれと言う宗旨が欟老の家風であり、少林窟道場の禅風である。この大事を解ってくれよと言うのが欟老の真骨頂である。誰か泣かざらん。

老大師の提唱は尽く慈愛の血滴々にほかならぬ。槐安國語・碧巖の提唱録にも所々に慈愛故の長嘆息が露呈している。それはまた菩提心無きを慨嘆しての獅子吼である。慨嘆は大きな愛である。みんなを救いたいからである。第四十則「南泉株花(なんせんしゅか)」の序文などもその一例である。特に勧めておくべきは、「槐安国語提唱録」の「欟隠後語」である。

五百年間不出世の巨匠にして初めて説き得た解脱への確かな南針であり絶古今の傑作である。「末後天下に告げたき一大事がある」から始まる絶倫の風光は諸仏の復活底に他ならぬ。但し、多くの漢文体は一般を甚だ悩ませるものならん。しかし「只」読め。腹で読め。読まずに読め。何百回も読むべし。

しかも、一頭地を抜きん出た境界でもって、あの博覧強記の頭脳で祖師方の心底を披瀝して見せ、余すところなく喰わせてくれている。まことに有り難いことである。

例えば、臨濟の家風全体、三要に纏められている。三要は三玄の働きであり機要である。三玄とは、

一、体中玄（法身仏）。これを平等と言う。
二、句中玄（報身仏）。これを差別と言う。
三、玄中玄（応身仏）。これを没縦跡と言う。

「今」は何時も「今」である。時、所、位、身（自己）同時一体の作用であり働のことである。臨済大師が、一つもの「今」の無自性空を自在に見せて度衆生する様子を、欟老はこのように解析して見せている。

その纏めが次である。

「挙すれば則ち公案事々成弁す。外に向かって馳求す、癡漢々々」と五祖法演の一句で悪知悪覚を蕩尽せしめている。要するに菩提心を挙して即今底たれ、と祖師の心印を一括りにして仏道修行の安寧を図っておられるのだ。これが檻老の力量である。

大智老尼曰く「檻隠老師には何処にも糟が無いぞ！」と。とにかく檻隠老師はそれ程の越格の大宗師である。博覧強記故に、加薬が多すぎて見慣れぬうちはまことに読みづらいが、噛むほどに仏法の深淵にして一切の問題を解決してくれる光であることが分かる。絶妙の指南書である。

特に要注意は、「盲従は法身の敵じゃ」との檻老のこの一句である。真意は、「書を尽く信ずるは書無きに如かず。師を尽く信ずるは師無きに如かず」「宗教を尽く信ずるは宗教無きに如かず」「禅を尽く信ずるは禅無きに如かず」「生に任着すれば生無きに如かず」である。今の事実こそ疑いようも無い因果丸出しの神聖そのもの。これが真実であり最も価値ある尊厳故に、他に何をか求めればみな地獄となるぞと。何が故ぞ。対立して人あい争い、苦が苦を生むからだ。「今」「只」有るべしとの意なり。参又参。

神に盲従・盲信して殺戮に走るは、人たる由縁を破戒して狂気となすからである。確かに「信は道源功徳の母」である。だが盲従・盲信は人類崩壊の鬼母であることを知れよと。発心正しからざれば万劫空しく施す、とは古仏の真血である。初発心が如何に大切かを自覚せよと言うこと。他に求めた信仰は自我の陶冶には成らぬ故に決して安心和平を得ることは出来ぬ。

とにかく「己に足りて他を待たぬ境界」を得る為には、暫く正師に従って不惜身命の努力をせよである。深く信じて、篤行ずる外無い。

菩提心、菩提心。合掌。

檻老の遺偈観

禅僧が亡くなることを「遷化」と言う。生を変え身を換えて大平和を願い度衆生される故に死と言わず「化を遷す」（別の処で説法する）と言う。禅僧の喪儀には今生締めくくりの「遺偈」なる一句を呈する慣わしである。大智老尼が余命尽きる数日前、浅羽大居士が来られ、両傑は常の如く談笑するついで、「老尼さん、そろそろ遺偈を頼みますわ」と。如何にもそれを楽しみにしている模様であった。

老尼笑って曰く、「遺偈か。そう言えば有名なのが有ったな。大燈国師のあれだ・・」咄嗟に出てこなかったので吾人が「仏祖裁断して吹毛常に摩し、機輪転ずるところ虚空牙を咬むでしょう」と言うと、

「そう、それよ。そうでなくちゃならんが、遺偈と言うたのが気に入らん。常がそれでなくちゃ。あの大燈が本当に遺偈にしたとは思えんがな。どこまでも自然がいい。ワシの生き様が遺偈じゃないか。檻隠老師も檻文老師もそんなこと言わなかった気がするが・・」些か妙なことになってしまった。確かに檻隠老師も檻文老師も遺偈らしきものは無い。が檻老にはこんな一文があった。文面は別として、

「本当に尽くし切った者は少ない。遺偈など書いて先をてらうはみっともない・・生や全機現、死や全機現に対して何と言い訳すじゃ・・言い残したいものが有るは宜しくない。有るのは慈悲のみじゃ・・」のような檻老らしい遺偈観であった。

因みに義光老師・大智老尼の遺偈は、喪儀に則するため吾人が遺稿を引用して間に合わせたものだ。今暴露するも面白し。「あの大燈が？　遺偈などと変だな？」と大智老尼。どうしても誰かが仕立てたなと言わんばかりであった。その可能性大である。しばらく三人は遺偈論に興じて遂に書くことは無かった。

菩提心の糧に道元禅師の遺偈を記してみる。杓底（しゃくてい）の残水を河に返されて万世の為に決して無駄遣いをされなかった真箇大慈悲の巨匠である。

五十四年、第一天を照らす。箇の盤跳（ぼつちょう）を打して大千を触破す。

咦（いい）

渾身にもとむる無し。生きながら黄泉に落つ。

（**五十四年**は余り意味は無いので軽く見る。**第一天を照らす**とは嫡々相承、悟りの端的を言う。その為に労した多年の苦辛を見て取らねば元古仏は地下に泣く。**箇の盤跳を打して**とは、自己を忘じ切った脱落身心の軽快さのことで、何もかも飛び越して何も無い。そして**大千を触破す**と続く。宇宙丸ごと握りつぶして目に立つ者は何も無い。無いと言う者も無い。**「咦」**とはフフンとせせら笑うこと。多くは詰（なじ）ることに使う。**渾身にもとむる無し。**当然である。有ったら可笑しい。**生きながら黄泉に落つ、**とは粋な挨拶である。黄泉とは地下の泉。冥土を言うが、道元禅師にそんなケチな意は無い。生とか死とかそんなことはワシは知らん。ご無用々々々。ちょっとご無沙汰するよ）と。

面白いことに師匠の如浮禅師の遺偈によく似ている。興味ある方はどうぞ。山僧は、

我れ死ねば　焼くなうずめな野に捨てて　痩せたる犬の腹を肥やせよ（檀林皇后）が好きだな。

涙の一喝

少林窟は三方が山。新緑又紅葉の季節は格別の感がする環境である。落葉時期は掃除三昧となるは道理。一汗かいて老尼の座卓でお茶となり、欟隠老師の話題から実地の修行内容に入っていくのが常である。突然玄関に人の声がしたので行ってみると、古参の一人が真剣な面持ちで立っていた。すぐ相見と成り、包道の士一丸となって聞法に力が入る。

「能く来たね。菩提心に恥じぬよう一心不乱にやるんですよ」と至極暖かい説意であった。彼は微塵の笑顔も無く真剣に合掌して、

「はい、これから一生懸命やります」と言った瞬間、老尼の顔が一変した。

「こら！　これから遣ると言って遣ったものは居らん！　時を惜しんで来た者が、これからとは何だ！

欟隠老師の菩提心がまだ分からんのか！」間髪を入れず立ち上がった彼は全身の合掌をして、

「はい！　今から遣ります！」

「よし！　本真剣で遣りなさい！　お前も直ぐ禅堂へ行け！」我々が部屋を出る時は、老尼は既に横になっておられた。

欟老は菩提心の塊である。菩提心は今この一瞬に自己を忘れて取り組むことである。真剣な努力なくして菩提心であるはずがない。大智老尼は欟隠老師の生き写しである。諸仏祖師方の心印はこうして伝統されてきたのだ。祖師方はまさに偉人なのである。我等も又その人ならんや。否、何人も既にその人ならんや。菩提心、菩提心。

すぐ来い！

何時間たったろうか。「直ぐ来なさい」と呼び出された。気合いの入った我々には時間観は無かったが、

日が陰っていたので可成り長く空しく過ぎた様子が窺える。大智老尼は穏やかに法話を始められた。

「欟隠老師はな、ワシが少し音信不通していたら、「菩提心が鈍っては居らぬか」と能く手紙が来た。欟隠老師の菩提心がいつもワシ等に注がれていたんだ。鈍っているのが直ぐ分かるんじゃな。

お前達は口では一生懸命やりますというが真剣身が足りんのだ。とにかく自己を空じ切るには徹底「今」「只」やらんと駄目じゃ。気か緩むと癖の自己がすぐに煩悩・雑念に連れ込む。正念相続が容易でないのじゃ。油断するでないぞ」と続いた。そして、

「欟隠老師はな、百千万の疑団も煩悩もたった一つの意根から発する。だからたった一つの意根を解決すれば良い。つまり成り切れば意根が切れて疑団が破れる。一切の疑団が本当に解決するんじゃと言うてワシの菩提心を駆り立ててくれた。その通りじゃった」と。全財産をはたいての大説法である。そして、

「徹底そのものに成り切ると元来一つものであったことが判明するんだ。あれこれ考えずに「只」やれば良い。真剣に打坐しなさい。真箇打坐に成ったらそのものがその物の真相を教えてくれる。欟隠老師と相見底じゃ」と何時もの熱説法をぶっかけられた。

多少の菩提心は起きやすいが、その程度の菩提心は直ぐ世念に負ける。どうしても決死の菩提心が起きてこない時、この劇薬は実に有り難たかった。確かに事（今）と一つに成ると自己が無くなる。自我との戦いは菩提心というとっときの武器が無くてはならぬ。菩提心無くしては勝ち得ることはできないのだ。

大慧禅師は「大悟十八返、小悟その数を知らず」と言うたが、そんな悟りは皆ウソだったと自白して曰く、「千疑万疑ただ是れ一疑、話頭上の疑、即わち破れば千疑万疑一時に破る」と自身が真訣を吐いた。かくして初めて三界の大導師となった。師匠はあの巨匠圜悟である。長い間祖師の言句に囚われて大いに苦しんだのだ。故に師匠の真血である碧巌を焼き捨てた。後人を慮っての涙が分かるか。参。

「話頭上の疑」とは心意識のごたごたのこと。大慧を苦しめた元じゃ。徹した瞬間、一切が作夢の如く消滅した。それを実証した金口である。一念（一瞬）から万念が生じ戦争も起こる。最も恐ろしき事である。だが、たった一念の正体を徹見すれば万事が光明となるのだから、いちいちに成り切る努力を怠らねば良い。「今」「只」することだ。その事に一心不乱であれ。

永嘉大師も「実相を証すれば人法無し。刹那に滅却す阿鼻の業」と保証された。「実相を証する」には「今」の事実に成り切るよう努力するしかない。菩提心の犯すべからざる神聖さを知るべきである。菩提心とは不惜身命である。

菩提心、菩提心。

さもありなん

まだまだ書きおきたいこと多々あるがここいらで止めにする。これよりいよいよ「少林窟法語」より抜粋した老大師の真骨頂に突入することとなる。宝の園に入るに似たり。されど義光老師・大智老尼厳選の句々にて総て孤高である。絶古今、涙と菩提心の結晶である。高きこと須弥山の如く、堅きことダイヤより堅いぞ。「少林窟法語」故にさもありなん。発心正しからざれば万劫空しく施す故に、正の上にも正でなくてはならぬからだ。一度や二度読んだぐらいで解せるものではない。

法の為には何物をも砕き、総てを切り尽くす金剛王法剣でなくてはならぬゆえに、これに勝るもの無しとことん熟読玩味されんことを。とにかく是れを噛み砕けば千山万関も百雑砕、豈に難きことあらんや。

古人曰く、「鉄饅頭を咬破して百味具足す」と。

しかしこれから完成させる「全集」は欟老ならではの博識とあの七翰林を凌ぐ文才と境界故に、大変面白い故事も沢山あってこれまた格別な法味が充満している。

読むは易けれど内容は重い。吾人常にいう。語句の意味を探ることなく、菩提心を高めることと着眼を深めるためのみ。「只」読むこと。読んで実地に行ずるのみ。

乞う、百読して灼然（しゃくねん）（確かに、確かに）、満身の打坐あれば必ず万劫の飢えを消ずるを疑わず。

勉旃（べんせん）、々々。（努力、々々）

飯田欠隠老師語録　抄

入道見性

納は明治十九年東京駒込避病院に医たり、コレラ病の死甚だ多く甚だ速し。一日七百に上るを面り目撃し、無上迅速を恐怖し、我身もかくなりはてなばいかゞなりゆくらん、人生果して何物ぞ、死後如何と、万感万悶一時身に迫り、暫時も安所し難く、断然職を辞して安芸国御許山佛通寺観白室寛量禅師に投ず。

時これ臘八に際し、苦修精励古人に譲らず、或時は猛虎岩上に打坐して夜の徹するを忘れ、或時は身を活龍の池に投じて打眠を覚破す。勇猛の衆生成佛一念に在りと信じ、驀直進前して一歩も退かず。時に白糸の瀧を見て殆んど所知を忘ぜしむことありしが、未だ安眠を得ず。一夜定中満身の無、無無を知らず、自己を求めるに不可得なり。

やったやったと大いに叫んで、直に観白の室に入りて所解を呈す。師一見して「汝徹せり」と印可さる。手の舞い足の踏むを知らず。我囚地一下は我に非ずんば知らず。知らざる者は知らずにして止むべけんや。行くに必ず道あり。道を行けば必ず到る。疑う莫れ謗する事急なり。

時人を待たず。人を見るな。行いを見るな。癡人は知らず。知らざるを咎むるも益なし。只彼をして我を知らしめ、我と同化せしむるの急あるのみ。我は只菩薩の血涙あるのみ。来接せば自ら了然たらん。

この時投機の偈あり曰く、

「無々々々、語盡き理窮まる、忽然脱落、一聲空に遼ず」翌日また曰く、

「地邊逍遙、月白風清、歡喜湧躍、古聖を疑わず。」

禅は涙である

近頃禅の著書が続々でる。皆よくできておる。蘭菊色を争うの観がある。只惜むらくは涙がない。涙がないと人が感ぜぬ。感ぜねば徹せぬ。自ら泣かねば人を泣からしむことはできぬ。孔明出師の表をよんで泣かぬものはない。

所詮涙を以って書くより外はない。禅は涙である。涙なきは禅ではない。二祖が達磨の前に腕をきり、六祖が母を捨てゝ黄梅に赴く。涙の中の涙である。禅が末法の今日まで、懸絲の命脈を守っているのは、皆涙の結果ならぬはない。よく思ってみよ。名利に走りて己を欺くようなことが、夢にだもできようか。

容易の観をなすなかれ

禅なくんば法なし。法なくんば人なし。人なくんば国なし。この禅今まさに亡びんとす。これを忍ぶべくんばまた何をか忍びざらんや。老生いとわず涙ずくめの文を草する決して偶然ではない。只涙あるの士が知るのみじゃ。

病があれば薬がいる。皆是れ祖師の涙である。只涙あるの士ありて、能く此涙を瀉瓶的（一器の水を一器に移す）にうつすことができるのじゃ。涙とは何ぞや。抛身捨命である。無上菩提心である。勇猛の一機である。但容易の観をなすなくんばよし。

釈尊見明星成仏の事

ああ二千五百年前、時は是れ十二月八日なり。夜は将に明けなんとす。此の時釈迦はヒマラヤの中腹、尼連禅河の西南一里の地、仏陀伽耶にあり。菩提樹下金剛坐上に端坐せり、寒天冴え渡り、闃（ひっそり）として静なり。

恰も東より明星出ず、忽ち釈迦は見たり。自己無き時自己ならざる無し。宇宙は全自己となりにけり。大悟せり、身心脱落せり。

十九歳以来の希望は総て満されたり。大解脱門は開けたり。この嬉しさを何にたとえん。大に叫んで曰く、大地有情我と同時成道と。世は皆仏なるぞ、やれば誰でもやれるぞ、我は既に得たるぞと。

この実験的證明あるに非ずんば誰かよく喚起せん。ああ恩大難酬。我等は只大菩提心にむちうちて不借身命と誓わんのみ。

勉旃々々

今じゃ、今じゃ

見明星即ち涙の眼なり。大地有情と同事成道の獅子吼、これ涙の口なり。たれかこの涙とならざらんや。今この行持の涙に参ぜざらんや。これ即ち、二千五百年釈迦老師の涙なり。即ち、二千五百年後、我等が現成の涙なりと勘破せよ。涙は超越底のものなればなり。奮起せよ。奮起せよ。更に猛く奮起せざるべからず。

これ決して容易の涙に非ざるなり。これによりて己墜の真風はたちどころに復活さるものなりと知れ。世界はこの涙によりて統一さるるものなりと知れ。涙なくんば禅なし。

少林をして世界統一の中心点となせ。万国万民はこの涙をまつこと大旱の雲霓（雲や虹）も啻（それば かり）ならざるに非ずや。今じゃ、今じゃ。

恰も好し。今や臘八（十二月一日より八日までの大坐禅）来なり。臘八は来れり。此の日釋迦は明星を見て大悟せり。見る時、誰か見ざらん。

その間何物かある。看時不見暗昏々。（看る時見ざる、暗昏々。本当に看る時、見るという者が無い。その物と一つに成っていると言うこと）誰か慚愧の涙なからんや、臘八は叢林の骨髄なり。この身、この時に向って度せずんば又何れの時にか、知而故犯の罪を殞せん。臘八の時、満身臘八になればよい。その自覚が直に是れ再来人じゃ。

我れ少林窟を設けたる所以は、唯この一箇半箇を接得して、正法眼藏を断絶せしめざらん事を期するにあり。是れ即ち仏々祖々の遺嘱なり。骨に銘じて忘れべからざるの一大事なり。高く眼をつけて其の人となれ、其の人となれ。

至祷々々

大医王の診断

抑(そもそ)も我等の禅堂は畢竟病の起原を撲滅して真の健全無病の身心を作り出す、最高の病院というてもよい。

全体世間で健康という詞を用いておるが、大医王（釈尊）の診断によると、真の健康者は一人もいない。つまり時がくれば死なねばならぬという條件付の健康ではあるまいか。さてその死がいつも思ひがけない時に来て人を驚かす。

この故に仏は、生命は呼吸の間に在りといひ、如露亦如電といふて、我等に覚醒を促しておる。

ああ肉慾の奴隷よ、少しく夢よりさめよかし。

山のはに影傾むきてくやしきは　空しく過ぎし日月なりけり

人心自在

釋迦は正・像・末の三時といふことをいふた。これ仏の涙である。正とは證なり。仏を去ると雖も、教あり、行あり。正しく證果を得るものあるを、正法時となす。

像法とは像は似なり、法儀行儀行われず唯教あり行ありて證果なく、像似の仏法行はるる時を像法といふのである。證果なきの教行はほんものでない、似て非なることをしらねばならぬ。

末法、末とは微なり、転た微末にして、ただ教ありて行なく、證なきを末法といふにある。今正にその時に当っている。

時に正像末ありと雖も、人心は自在なり、無自性なり。釈迦が正像末を説いたは時代を利用して、我等の怠慢心を戒しめ、裏面には我等の惰眠を覚さしめんとの興奮薬と見てもよい。

玉あられ学びの窓に音立てて　驚かさばやさめぬ眠りを

真風地に落つ

禅海の濁乱は、今日最早や、其の極じゃ。未得謂得の増上慢、白昼に横行し、公案の大安売をやっておる。狗肉をうって、衆盲を引く。真風地に落ち、正見かげだにもなし。古人は地下に泣いておる。夫　禅は仏法の総府なり。的々相承又何処くにかある。禅なくんば法なし。法なくんば人なし。人なくんば国なし。

此の禅　今将に亡びなんとす。これを忍ぶべくんば、又何をか忍びざらんや。

人を思ひ道を思ふの真情をくんでくれよ。

正門より入れ

看よ古来の仏祖未だ坐禅によらずして、成仏作祖せしものあるを見ず。深く信じて正修行すべきである。即ち坐禅は入仏の正門なり。正門に入らずんば、あに正殿を拝するを得んや。正門〻〻。傍門をけってこの門に入れ。

雲さけて月をはき出す時鳥

決して修せよ

坐時に無上の力あることはよく解ったが、いかにしてこの境地に体達し、自覚し得べきや。修行者の心得方最後の一決である。これを一大事因縁というてある。これを好むはこれを知るにあり。これを知るはこれを楽しむに在りと、孔子はいうた。楽自得底である。

耳に聞き心に思い修す時は　いつか菩提に入るぞ嬉しき

これより聞かさん。聞けよ聞けよ。これを思えば茲に在り。思うて決せよ、決して修せよ。聞思修より

三摩地に入るとはこゝじゃ。三摩地とは畢竟じゃ。極地に達して求心の止んだ処じゃ。

正邪は即菩提心の有無

要は菩提心じゃ。菩提心がなければいかに名論でも龍を画て瞳を点ぜぬじゃ。正人邪法を説かば邪法かえって正法と成る。邪人正法を説かば正法かえってが邪法となる。

深く反省せねばならぬ。大いに戒慎せねばならぬぞ。

菩提心を発せよ

古来の仏祖、菩提心を発せずして成仏作祖せしものあるをきかず。されば菩提心は仏祖を生むの母である。

今仏祖の母になれるのである。すぐ菩提心を起こせばよい。この心は仏性具足のこの身の起せばいつでも起さるることになっている。左に向いた首を右に向けるより易いのである。世念が強いから、之が起らぬ。起ったといふても、いつも世念がぶちこわしている。世念と菩提心とは正反対じゃ。いつも衝突して世をみだし人を苦しむじゃ。これが禅を永くやってをる者の中に沢山ある。

あしき人みる度ごとに泣く菩薩、よき人になれよき人になれ、じゃ。

釈迦の時にも九十六種の外道があった。人心の荒み切ったを転ぜしむるは容易でない。

ここに仏道の価値がある。万難を排して一箇半箇でも真乎菩提心のあるもの作り打さねばならぬ。人の化度し難きことよ。

蹉過する勿れ

「光陰むなしく渡ることなかれ。」石頭大師の血滴々じゃ。蹉過する勿れじゃ。いくら働いても牛馬もはたらく。菩提心なければ、皆むなしくわたるじゃ。菩提心を高く見よ。

世界中の智恵を総合してきても、一瞬の菩提心には及ばぬ、およばぬ。世界はつきることあり、有量有辺なり。とても比較のかぎりあらざるなり。各自其價をしれり。世界の人類は、石ころも同様じゃ。いつも宇宙と離れておる。生ながら死でおる。われらの菩提心は、相隨来やおともがある。宇宙僕たりじゃ。死んでも生きておる。死もまた宇宙なり。菩提心は死せざるなり。このあわれむべき人類を救はざらんや。

天性の価値

禅をやるのなら、先ず菩提心を起すがよい。菩提心がなければ禅をやっても駄目だ。今の禅者に菩提心の名だに知らぬ者がある。十年労して一日の効なしじゃ。それは正師がなくて、聞かす者がないからじゃ。

菩提心無き奴が、菩提心を聞かす事出来るものではない。菩提心のことを言うと、恐れて逃げる。あまり事が大きいからだ。大きい事が小さい処にある事を知らぬ。ダイヤモンドは小さくても価値がある。此吾人のからだに菩提心が充ちてをる。元来菩提心は生まれつきのもので、無くしょうと思っても、無くすることの出来ぬものじゃ。是がなければ、人を止めなければならぬ。天性もって生まれたものじゃ。

それまでいうてをかねば、驚くから前置きしてをくのだ。菩提心とは、無上道を得て、宇宙を救い盡すという事じゃ。

さぁ驚いたろう。いや宇宙といえば、十五億万人どころではない。天の天蓋までも救う心じゃ。救われるのじゃ。

禅ノ命

見性は見性したものでなければ知れぬことじゃが、まず定義を知っておくことが肝要である。そうでないと胡乱(イタズラ)に修行することになる。磁石なくして大洋を航するような者じゃ。どこをさして行くべきや。

時鳥(ほととぎす)　啼きつる方は山ならん　梶とりなほせ夜の舟人

心に真妄はない。元来心は真妄を離れたものだ。見性してみると窮屈なものではない。宛転自在を意味したものじゃ。狭いものでも、固まったものでもない。即自己の広大なるを知るがよい。心と仏及び衆生と、是の三に差別無しというに至りてはこまかに自己を説たのである。大なるかな見性じゃ。

見性の方法

菩提心を起して自己を知らねばならぬという事が分って来たが、自己を知るにはどうしたらよいか。どういう修行をしたらよかろうか。ただ三つある。是より他にはない。此方法は実はすぐに目的となるのじゃ。併しそこまで行くには多少の時間が必要じゃ。

みだりに修証不二ということは許されぬじゃ。法はそれであっても人がそれに相応せねば今時の役にはたゝぬ。「英雄首(こうべ)を回せば即ち神仙、又、退歩一番、仏地を勃跳(ぼっちょう)す」ともあるが、法ばかり見て、人を見ぬから実地に当って大きなくい違いが出来る。胡椒丸呑にはできぬ。やはり着々修行してゆかねばだめじゃ。

三とは何ぞ。只管打坐・公案工夫・戒法護持。是れが仏祖の命脈じゃ。皆知っておる事じゃが、是丈けにまとめる人がない。又たとえ此三つを知っていても、三つに就ての真意義が分って居らぬ。

そこでなんぼやっても無駄骨ばかりじゃ。しばらく三と分るるも三即一じゃ。離れることは出来ぬじゃ。一つわかれば皆わかる。一つわからすには必ず三つによらねばならぬ。ここが大切なところじゃ。

只管打坐

坐禅をする事じゃ、只管とはヒタスラと読む、余物なきことじゃ、只坐る事じゃ。何もそえ物がない事じゃ。自己というかたまりものの認めようがない。只坐禅するばかりじゃ。思うにもあらず、坐するという事もない。只坐するばかりじゃとは坐相がないという事じゃ。

身心脱落せよ

相とは、見るものと見らるるものがあるのじゃ。坐禅が坐禅を見ることは出来ぬ。そこで八面玲瓏じゃ。邪魔者が一つもない。坐禅から行住坐臥に打って出る余地がいくらでもあるのじゃ。すべてが坐禅をしてをる時のように自己のかたまりなしに活動することが出来る。

にくい時はにくい坐禅じゃ。にくい相手がない。かたまりがないから如何様にも転ずる事が出来る。是を身心脱落という。坐禅が直に身心脱落の姿じゃ。社会が皆坐禅をしてをる事がわかる。

俳句禅

何のその百万石も笹の露。一茶の句。

加州公の前でよくいふた。財も位も死の前には笹の露ほどもないと菩提心を促したのぢゃ。公はさすがにこの句を悦ばれた。

是道や行く人なしに秋の暮。

惟然坊ぢや、知音稀に有りぢゃ。

電(いなずま)に悟らぬ人の尊さよ。

とは芭蕉が小成に安ずるなと、瞥地の智通、星光り悟りを諫めてくれたのである。

かやを出てまた障子あり夏の月。は千代の反省。

できふできどちらでもよきふくべかな。蕪村

できあいの山ですますやけふの月。

不昧因果の安住を菩提心でこなしてをる。

月一つ影色々のおどりかな。

おどる時(活動)はわれはない。われなき時宇宙我ならぬはない。直にこれ菩提心の實證ぢや。あゝ大なる哉あゝ尊いかな菩提心。これあればたれりである。これなければ皆ゼロよ、衣架飯袋(いかはんたい)よ、不異鳥獣木頭(ふいちょうじゆうもくとう)ぢや。

誰でもやれる

古人が、「行ずれば則ち証其の中に在り、自家の珍宝外より来らず。」と云いしも、たしかに分かった。手の舞い足の踏むをしらんや。

「所謂坐禅は習禅に非ず唯是れ安楽之法門也。菩提を究尽するの修証也。」とある。

坐禅は結果である。手段ではない。元古仏も、「悟来底の法なり」ともいうてをる。天桂は、「坐禅の坐禅なり」ともいうてをる。坐禅以前よりの坐禅であった。豈坐臥に拘わらんやじゃ。知らぬものが知らぬまでじゃ。これによりて知らさねばならぬ。悟らせねばならぬ。やれば誰でもやれるに決まってをる。

如浄古仏曰く「只管打坐して身心脱落なるべし」また曰く、坐禅は身心脱落也、只管打坐して始て得べし、焼香礼拝念仏修懺看経(しょうこうらいはいねんぶつしゅさんかんきん)を要いずと。

「正当坐時(しょうとうざじ)」は坐禅するばかりじゃ。只管とはタダなり。タダとは餘物を交えざるの義である。只管の二字最も着目すべし。

「正当坐時」は全分の坐時にして、微塵計りも余物を交ゆるを許さざる、これその物の本性なりと知るべし。

禅の極致

禅の極致は只見性にあるじゃ。見性を除けば禅はない。禅の巍然として頭角をあらわすじゃ、只この見性の一つにあるじゃ。禅は仏法の総府といふもそこじゃ。他流の仏法は名相ばかりじゃ。畫餅(がびょう)飢をいやすに足らずじゃ。

釋迦の十二年難行苦行、只見性のためのみじぞ。十二月八日見明星は直に是見性である。大地有情と同時成道と叫んだも面白きことじゃ。是より四十九年横説竪説の大自在を得られた。しかも見性せよと説いた迄だ。見性はとけぬ。そこで四十九年一字不説といふた。達磨九年面壁これ何ぞ、面壁と見性と同か異か、直指といふも遅八刻じゃ。

直と云へば遅速の念がある。只我等は坐禅すればよい。そをして大悟すればよい。

「仏曰、人若し三世一切の仏を了知せんと欲せば、當に法界の性を観ずべし。一切唯だ心造なり」と。坐禅のことと知るべし。只兀兀地(ごつごつち)(はげ山の如く枯れ木の如く)打坐するとき、見性成仏露堂々。

奮起せよ

畢竟どをしたらよいか。只其物々々に成切って自己を忘ずるまでじゃ。これを大死一番し来れといふことである。平四郎（へいしろう）といふ草履取り。主人に草履で頭をうたれ、口惜くおもい、吾にも仏性あり、磨かばなどか光らざらんと、支那に渡り無準禅師による。彼文字を知らず。禅師は圓相の中に丁の字をかいて與へ「これに成り切リ喪身失命し来れ」と命ぜり。

平四郎九年端坐して工夫純熟し、天地一枚の丁の字となりにけりき。何物に當っても、無碍自在の境界を得て、嬉しさ、いはん方なり。帰朝して松島の穴の中にて坐禅せり。今も法身窟とて現存せり。時賴行脚の途次穴の中に発見し、師事して瑞巌寺の開山となす。法身国師即是れなり。上知と下愚を論ぜず、只志の一つにありじゃ。今この四字の標語も只直下に成切りなば、直下に承當せん。平四郎九年の消息にもまさるを得ん。

盤山の大悟

昔、盤山市中にいでで、人の猪肉を買うをみる。曰く精肉一片を与へよ。屠者刀を擲て曰く、何れの処力精底ならざると。盤山きき得て省あり。これ常に思ふてやまざりし故なりき。殆んど所知を忘ぜんとして未だ安眼をとげえざりき。山上山あるをしる。

後ちに、一日人の葬式に鈴を振って、紅輪決定枕西去（紅輪決定して西に沈み去る）。未委魂霊往那方（未だ魂霊那方（いずこ）にか往くを委（りかい）せず）。誰も皆一度はこのうきめにあふものうっかりしておる。いまはのときにうろたえる、と唱れば幕下の孝子哭して、哀々、と云を見る。

盤山只聞くばかりにして、耳ありや、自己ありや。忽焉として大悟して馬祖の印可を得たり。嬉しかったろう。亦且つ此事の容易ならぬをしるがよい。

海印信、頌して曰く

哀々相應便承當。（哀々（あいあい）として相い應じ便ち承當す。）

畢竟魂霊往那方。（畢竟魂霊那方（いずく）へか往く。）

踊躍自然全體露。（踊躍自然（ゆうやくじねん）として全體露る　。）

始知遍界不曽藏。（始て知る遍界曽て藏さず。）

と若し徹せずんば何かならん。刻苦光明必盛大なり。

芭蕉はいふた、

　塚もくだけ　わが泣くこえは秋の風

この間何もものありやと参じみよ。哀々の声あるのみ。

露に泣く千點の涙。風に吟ず一様の松。

かくて盤山は法柄をにぎり、天下にこ號し度生三昧に入る。衆に示して曰く、

心月孤円、光呑万象。（心月孤り円にして、光万像を呑む。）

光非照境、境亦非存。（光は境を照らすに非ず、境も亦た存するに非ず。）

光境俱亡、復是何物。（光境俱に亡ず、復た是れ何物ぞ。）

心月とは心月なり、心月の一法を證するとき、宇宙心月ならざるはなし。

本当の嶮峻

棒とはぶんなぐることである。何故ぶんなぐる。それは棒を喫したるものが自知するのみじゃ。ぶんなぐれば痛い。痛い刹那に何物かある。妄想があるか、悟りがあるか。実参実究して知るがよい。徳山は棒つかいの名人である。「道得三十棒、道不得三十棒」と叫んでぶん殴った。人はこれを嶮峻の手段というが、そうではない。説きすぎておる。児を憐んで醜を忘ずる模様がある。実はダルマのようになんにも言わず、ぶたぬ方が、本当の嶮峻なのである。只今時の学人根機弱きがために棒の入用がいるのである。

南院の棒折るるや

「僧、馬祖に問う。如何是れ仏法の大意。」祖便ち打って云く、「我若し汝を打たずんば天下の人、我を笑い去ること在らん。」あゝ馬祖なるかな。誠に是れ老婆知識の針箴（至れり尽くせりの手当）である。

「僧因みに、南院に啐啄同時の用を問う。」院便ち打つ。僧不肯はず。院便ち趕出（追放）す。僧後に雲門の会裡に到って前話を挙す。一僧有り云く。「南院の棒折るるや。」打ちかたが手ぬるいということじゃ。其の僧谿然として省悟す。

また風穴は南院に、「棒下の無生忍（一度死んだ奴）、機に臨んで師に譲らず。」といわれて大悟した。

みるものはこれだけでもみるであろう。縁はどこにあるかしれぬ。只源泉混々不捨昼夜にやっていけば、いつかぶちぬく時が来るに違いない。

単になれ

理想は実現の前段階じゃから、やはり理想が先決問題じゃ。一番大事じゃ。しばしばいう如く、聞思修より三摩地に入るとは此処じゃ。

耳に聞き心に思い修すときは　いつか菩提に入るぞ嬉しき

只坐禅する暇なきものは、その場その物を修養の材料としてその場その場の「単」になればよろしい。白隠は地限り場限りといいました。前後際断であります。てっとり早く「今」！　たった「今」！　聞くとき聞の「単」になりきればよいのであります。法縁深きものは一言で大悟した例が幾らもあります。

鳴かぬ間や　空一杯のほととぎす

花を見る時花になる。花が我か、我が花か、斯間自己を求むるに不可得じゃ。

愚にあらざれば狂

たゞ因果無人の安全弁をおすことをしらぬ。真空妙有のすき透った眼鏡をかけることを皆忘れてをる。因果は差別じゃ。妙有じゃ。無人は平等じゃ。真空じゃ。一方に偏堕するのが夢じゃ。この夢がさめぬので人が苦しみ世が乱れるのじゃ。無いものをはっきりと見えて居るというものは愚にあらざれば狂ではないか。

仏の命

元古仏曰く、「人若し三業に仏印を標し、三昧に端坐する時」（身心脱落して）、「辺法界仏印となり、尽虚空悟りとなる」とある。また曰く、「仏法の中には生即不生といふ。（生に自己なければなり）。「滅も一時の位にてまた先あり、後あり、これによりて滅不滅といふ」（滅に自己なければなり）。「生といふ時は生より外にものなく、滅といふ時は滅より外にものなし、（宇宙には全く小自己なくして、全大自己の生滅なればなり。）また曰く「生死は仏の御命なり。」

これを厭ふて捨てんとするは、即わち仏の御命を失わんとするなり。これに止まりて生死に着すれば、これも仏の御命を失うなり。（仏はつねに活動変遷して止まざるものなればなり）仏のありさまを止むるなり。厭ふことなく、慕ふことなき省力の処、即得力の処、この時始めて仏の心に入る。但し心をもてはかること勿れ、言葉をもて言うこと勿れ、（身心脱落し了われば何の思うことも言うこともない）。坐禅は安楽の法門なり。人生観即宇宙観の極致なり。これぞ即わち禅の要領である。

仏見法見を打破せよ

鉄牛は支那のことゝばかり思うまいぞ。思いがけないところに満ちゝてをりはせぬか。この故に雪竇曰く、「這裏に環って祖師有りや。自ら云く、有り。喚び来って老僧が与に洗脚せしめん」と。いやしくも仏見法見あれば、入地獄如矢じゃ。達磨さらに達磨を求むる理あらんや。本来無一物、何處惹塵埃というも既に塵埃じゃ。

払ふべき埃もなきに箒持つ　人の心ぞ塵となりぬる

天桂笑って曰く、

払うべき埃もなしという人を　払わんための箒なりけり　　呵々大笑。

正師に着け

「古人云く、発心正しからざれば、万行空しく施すと。誠なる哉この言。行道は導師の正と邪とに依るべきか。機は良材の如く、師は工匠に似たり。縦い良材たりと雖も、良工を得ざれば奇麗未だ彰われず。縦い曲木と雖も、若し好手に遇わば妙功忽ち現わる。師の正邪に随って悟の偽と真とあること、これを以て暁かなるべし。」

機とは学人のこと、学人は良材のようなもの、師は大工じゃ。大工が悪けりゃ、あたらよき材木をめちゃめちゃにする。菩提心ある種草を邪師めが枯らせてしまう。

反之、良い大工は曲った木でもそれぞれに役にたゝする、りっぱにしあげる、強将下には弱卒なしじゃ。乍併、爪牙未だ備はらざる師の正邪を勘破せよというのは無理じゃ。唯択法眼を具した勝友の指図を受けるのが肝要である。借問す、今禅界に果たして正師ありやなしや、いと覚つかなき問題である。

尋ね廻るな

たとへば十字街頭に親子相逢うが如し。別人に向かって是と不是とを問うを要せんや。たゞ嬉し涙あるのみじゃ。千古の重一時に脱却したまでじゃ。この味いは見性したものでなければ分らぬ。只知るものが知る。知らぬものが知らぬ。

君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人が知る。

実に知音稀なりじゃ。打坐ばかりではとかく残り物がありやすい。公案の力をかるにあらざれば今時の劣根器では残りなく洗い流しすることが出来ぬ。自然の要求やむを得ずじゃ。大慧も大悟十八小悟不知数というておるが、やはり残り物があったのじゃ。身に覚えのあることじゃ。

正念相続

由良之助が祇園のかへるさ、山科の茶店の親父から、川蝉の画賛をたのまれた。直ちに筆とりて

濁江の濁りに魚は潜むとも　など川蝉の取らで置くべき

とやったが、書き了りて、あゝしまったと叫んだ。もし敵方に見つけられたら敵は打てなんだのだ。

この歌には意気がある、敵打ちの微意を示してをる。果然として一武士に見付けられた。これが幸に赤穂後室の探偵で、味方であったからよかった。天祐とやいひつべし。

彼は盤珪に参じて印可されたものの、また山鹿流の兵法を瀉瓶（しゃびょう）し来たれり。その極意は平常心是道の五字である。彼は不倶戴天の復讐禅をやった。途中の苦心惨憺はたれも知らぬものはない。

この人にしてすでにこの油断がある。正念の相続しがたきを知るがよい。千仞の功を一簣に缺（か）くことがあるぞ。猛省せねばならぬ。

「只」やれ

さて只管打坐が直に只管公案じゃ。両々相対して真個不疑の地に至るじゃ。太虚の廓然として洞豁（どうかつ）（広々としてからっほ）なるが如く、豈強て是非を加うべきものあらんや。

もし真個に満身無と化しさらば、何の処にか自己を求めん。無、無を知るのみじゃ。自己なきとき何者にとわん。問うべき相手がどこにある。

公案には気をつけよ

室内は悪辣が上に悪辣ならんことを要す。人情を交えたら法は滅尽する。今のは半ば教えるのじゃ。なんぼやっても同じこと、否、漸く入れば漸く遠ざかるまでじゃ。いわゆる蟲歯の呪いにもなりはせぬ。

転悟（うたたさとり）転参（うたたさんず）とは転捨（うたたすてよ）よとみてとれ。室内は思想の捨てどころと思え。今のは何か覚えてくる。これがすぐに重荷になる。公案をくい過ぎて食傷するもの麻の如しぢゃ。

即今でぶち切れ

古人は皆直截じゃ。燭は切るによりて光を増すにあらずや。この故に白雲は何といっても「未在々々。」白隠は片手の声で切断した。倶胝は只一指を立て一生受用不盡じゃ。無業は一生「莫妄想」と叫んだ。臨濟の喝、徳山の棒、直ちにみてとれよとなり。古人は只一則じゃ。

今のようなごたごたした多くの公案はなかった。

万古の窟是

大燈国師遺訓に曰く、「真風地に墜つこれ邪魔の種族なり。」と誰か寒毛卓立せざらんや。少林窟幸に恩を知り恩に報ゆる底の山上有山の一句子ありて千鈞（せんきん）（計り知れない重さ）を一縷に繋ぐ。是即ち万古の窟是なり。乞ふ、天下是を諒せよ。

高きに登る者、若し山上有山を蹉過せば何によりて宇宙の全体を看破するを得んや。正法眼蔵は只滅亡に帰せんのみ。是を忍ぶべくんば何をか忍ばざらん。

誰も打つ。誰も喝す。狂人も走り不狂人も走る。走る形は同うして走る所以のものは大いに異なる。百丈再参、馬祖の一喝。宗門の興亡此の一刹那にあり。三日耳聾す。誰ぞや誰ぞ。豈尋常の観を為すべけんや。

「唯」の一字大難大難

公案禅もあながち否定するのではない。只一則を痛快にぶちぬき、千処万処一時に透る底の自在力をみねば、実智に向って何の用をなさぬぞ。一則通りまた一則、三四五六はてしはない。印可をうけてもこれこれらの人じゃ。毒矢は久しく身に立てず。只直に抜き去れば可なり。矢は直短を論ずるいとまあらんや。

「大慧曰、趙州の無字「唯」挙せよ」と。この「唯」の一字大難大難。

無難禅師の歌に、

無といふもあたら詞の障りかな　無とも思わぬ時ぞ無となる

即今何物かある、速道、速道。

恥羞ありや

祖録は祖師の涙である。これを読まねば涙が無いのである。孝子とはいえぬ。虚空は盡きるとも修行はつきぬ。見惑は頓断破石の如くなるも、思惑の断じ難きは藕絲（レンコンや納豆のように捉われの糸を引くこと）の如しじゃ。古人も、「我が解は釈迦に譲らずと雖も、行は羅漢に及ばざる遠し」というてをる。うっかりすると因果を廃無するぞ。祖録をみて古人と同化するが修行の最高資糧である。

「五祖曰、吾れ参ずること二十年にして方に恥羞の二字を知る。」猛省一番せよ。

白隠禅師の消息

一歩を誤れば、児孫を喪せん。恐るべきことじゃ、白隠の越の英巖の於ける鼻孔遼天に見よ。其時は確かに俺は是れでよいと決定したに違いない。金屑貴しと雖ども、眼に入れば翳となる。見よ。正受の室に入り、悪辣無比の鉗鎚を蒙りし事を。何と出て来ても「穴倉坊主」と罵るばかりじゃ。痛棒を喫する事雨の如しじゃ。一日托鉢して門に立つ。立って立つ事を知らず。老婆にぶんなぐられて絶後蘇えり。南泉遷化の話に徹し、大歓喜、手の舞い足の踏む処を知らずじゃ。

白隠が飛騨の大会で七十人入所さしたというので、東嶺があやしみて一々点検してみたら、ほんものは三人のみなりしと。原の松蔭寺の木像のつらつきは実によりつかれぬが、随分老婆をやったもの。年のせいでもあったろうが、九十まで長生きしたから。

しかし彼が「槐安國語」や「毒語心経」、「荊叢毒藥」などをみると実に驚くべき大見識で、中々よりつかれぬ。白隠の吼本をみると、どの則でも千七百則を打破するにたるというてをる。階級的に公案を売ったものではない。一々の公案に大賊機を蔵して居ったに違ひない。

白隠下の四十七人にも、大機用を有せしものは、東嶺、遂翁、峨山の三老のみじゃ。余は存する如く亡ずる如くじゃ。峨山下に隠山、卓州が居た。それからそれ枝葉が生じ今日に至った。見地の公案理会に馳せて真実を失ってきた。要は法子の濫造と公案の安売りに因するのである。不見言、書経三写烏焉為馬。（知って居るだろう、言い伝えや書き写しなど、初めは烏だが焉となり馬となる。とんでもないことに成るの意）

猶且つこゝに寤寐恒一（忘れてはならない）の難あり。正受はいきなり林を推倒して「何というぞ」と威音王以前、威音王以後、末だ一人の寤寐恒一ならざるものあらず。「咄、儞、何というぞ」と云われて、こゝで残り物がすっかり取れた。

是が真の「囚地一下」じゃ。知る者が知るじゃ。一日正受は千仞懸崖の処に至って、林を搦住（引っ捕まえる）して云く「世尊云く、我に正法眼蔵涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付囑すと、是れ何辺の事を明むや。」最後の大試験じ。

林即ち一掌を与う。こゝで見て取った。正受は林を印可した。林に囑して曰く、「儞宜しく我に嗣いで此庵に住すべし。」と即ちこれ印可証明なり。其後林は故あって正受を辞して松蔭に帰らんとす。

正受は相送って二里ばかり行く。親ら手を取って云く。

「苦哉、苦哉。佛法将絶。汝勉旃。誓当打出真正種草一両箇。以挽回古風焉。必莫多求。多求大器難成。切莫忘却此一言哉」。林伏拝。聴師之懇誨。感涙浸襟。

面授面稟（以心伝心）に非ずして何ぞや。誰か之を疑はんや。正受白隠の喜び知るべきなり。

拙老の宿願

今日に衲僧と居士とで、七十人印可とりがをる。拙老年来の宿願は遍参である。一一点検して龍蛇を格したい。これ甚だ嗚呼の沙汰（夢事）なれども、大法の存亡に関する故、なにを顧みる遑はない。

遍参はしたいが事情が許さぬ。さりとてやってくれるものはない。涙を呑んで時を待つより他はないが、こゝに坐ながらにして師家の正邪を勘破する便法がある。

何ぞや。流れを酌んで源を討ぬるのである。弟子を見て師を判ずるのである。

趙州六十、再行脚の時誓えらく、譬い百才なりとも、我より劣れるものには、我れ彼れを救うべし。譬い七才なりとも、我れよりも勝れんには我れ彼れに問うべしと。

今日この語を以って事とする者が一人もない。勝他我慢の輩のみである。正師の得がたきも無理はない。文溟和尚は紫衣の僧正じゃが、この事のために東嶺和尚のところに来り、乍入叢林の一沙弥となった、ありがたいことじゃ。

どうも皆店だしが早すぎはせぬか。地位が高くなると下問を愧じるようになる。大燈は二十六の年、雲門の「関字」で痛快にぶち抜いた。大応も、「我れ汝に如かず。」と證明した。しかも二十年間乞食して聖胎を長養した。死んだのが五十六じゃ。十年間の仕事が今に生きてピチピチしてをる。今日これに似たる正師ありや。なければ法が亡びる。どの手からでもこしらえねばならぬ。

正師と天然外道

永嘉大師は涅槃経を読むうちに大悟したが、玄策に「無師自悟は天然外道じゃ」といはれて、わざわざ六祖の所へ證明をうけに行かれた。いかに古人が證明に重きをおいたか知れる。これがなければ法は忽ち亡びる、龍蛇混雑何を以て正邪を分たんや。

文字を先とせず、解会を先とせず、格外の力量あり、過節の志気あり、我見に拘わらず、情識に滞おらず、行解相応する、是れ乃ち正師なりと。

聖胎長養の大事

格外の力量とて、只むやみにぶんなぐることでない。聖胎長養から練りにねり上げた穏密の田地である。百丈、臨済もこれがために再参した。十八破家散宅（全てを捨てる。大悟のこと）の趙州もこれがために六十再行脚した。虚堂はこれを路頭再過（道をしっかり確かめる）というた。

いわゆる徳雲比丘は別峰に相見すの境涯である。古人も「仏には入るべく魔には入る能わず」というてをる。賢くはなれるが、馬鹿にはなれぬ、格外の力量は、常人の気のつかぬところじゃ。

皆ウソじゃ

大慧曰、「大悟十八、小悟不知数」と。皆ウソじゃったという事じゃ。俺は雷電を見て悟った。けつまづいて悟った。俺は経を読み悟った。古人にもコウいうのがあった。多くは是れじゃ。感情や理会で、当つ競べして確めるのだから、択法眼のなき、わかろう筈がない。

どうしても正師の證明がなくては、玉石混同をまぬがれぬじゃ。

囚地一下

雲門は誰が来ても「話堕せり」といい、三角は「蹉過了也」というて奪った。殊に恐るべきは百丈再参じゃ。初め野鴨子の過ぎ行くを見て、馬祖に鼻をつまゝれて、忍痛の声を発した時、悟ったと思ったのが、後に自由の分を失うて馬祖に再参した。此時馬祖の一喝に三日耳聾すとある。ほんとに囚地一下の

起った処じゃ、正師の證明がなければ危険である、

自受用三昧

満身坐禅なれば坐禅が坐禅をするので、人というものがなくなる、宇宙は全自己となることが自覚されるのじゃ。自己、自己を殺すべきや。自己、自己を救はざるべけんや。本当の坐の証明じゃ。夢遊病は忽ち全治するを疑はぬ。

雪竇が「薬病同時」というはこゝじゃ。時間は短くても、本当にやれば何事にも、何物にも通ずる。念普観無量劫、假令（たとえ）、暇がなくて結跏趺坐が出来なくても、本当にやれば何時でも同じ境涯で働く事が出来る。愉快なものじゃ。語黙動静体安然（ごもくどうじょうたいあんねん）。これが仏祖の自受用三昧というものじゃ。

汝の無字

昔天台僧某、栄西に「草木成仏」を問うた。栄西曰く、「草木の成仏は且く措く。即今汝の成仏は如何」といわれた。趙州の無字は且くおく。即今汝の無字はどうじゃ。あしもとから鳥がたつ。自尿臭（じにょうしゅう）を知らずじゃ。禅寺に行くと玄関に照顧脚下とかいてあるをみる。猛省一番せねばならぬ。

菩提心は禅の命である。これなければ餓ゆ。今は菩提心を払って無い。禅は亡びざるを得ぬ。

仏祖の大忠臣たれ

古人皆身命を抛って真風を護持してをる。元古仏曰く、「二祖の断臂は尚易かるべし。六祖の割愛は難中の難」と。黄檗も殺した。洞山も捨てた。日本の懐奘も母の死を顧みなんだ。元古仏も泣いてほめたまいき。所謂大義滅親者にあらずや。菩提心あるに非ずんば誰か能く忍びんや。正に是れ抛身報恩の好時節に非ずや。

来れ、我党の士。来って我等と道交金襴の如く、一致団結して仏祖の大忠臣たれよ。

勇猛精進

生死事大無常迅速なり。たゞ勇猛精進の一機あるのみじゃ。慚愧せよ、慚愧せよ。退転する勿れ、退転する勿れ。前後際断。今じゃ、今じゃ。

汝等諸人、身命を惜まず、更に勇憤の度を加えて、所謂大燈の無理会の三字を決してわするること勿れ。

至禱　至禱

長慶の境界

実に愉快であったろう。投機の頌を見てもわかる。

也太奇、々々々。　何と素晴らしい事よ。
捲起簾来見天下。　簾を捲き起し来て天下を見る。
有人問我解何宗。　人有って我に何の宗をか解すと問わば。
拈取拂子劈口打。　払子を拈起して劈口に打たん。

実に自信力に強いことが見えてをる。玄沙（げんしゃ）がこれを見て、これは意識の註述（つくりごと）じゃと破（ひてい）した。これは玄沙一流で截人見血（ひとをたしかめる）の手段である。靈雲にもこの手を吃（くら）はした。敢て従（みとめ）ず。老兄が未徹在（みてつざい）なることを、というたことがある。今の宗師にこの手段を弄する人が少ない。そこでニセ物がたんとできる。

さて長慶は直に一頌を呈した。

万象之中独露身。　万象の中独露身。（乾坤只一人）

為人自肯方自親。　為人自ら肯って方に自ら親し。

昔年謬向途中覓。　昔年謬って途中に向かって覓む。（今迄のを皆捨てよ）

今日看来火裡氷。　今日看来れば火裡の氷。（求心止時元無事）

そこで玄沙が始めて許した。さあこの独露身が長慶門下の鎖口訣というて叢林の胸腹病じゃ。万象を払うか、万叢を払はざるか、挨拶じゃ。長慶時代にも皆これでお悟りをもぎとられたとのことじゃ。

諸兄試に道うてみよ。既に是れ独露身。何の払、不払とか言はん。と一掌を与うるの勇気があるか。然しこれは誰でもやる手じゃ。簾を捲き上げる時の長慶になって見ねば皆画餅じゃ。長慶になれるかな。只七枚の蒲団を坐破し来れ。吾等と共に語らん。咄

時節のくるまで坐れ

仏性の義を知らんと欲さば時節因縁を観ずべし、時節若し到れば仏性現前す。時節とは身心脱落なり。意有ば自救不了じゃぞ。時節のくるまで坐りきることじゃ。其の因縁は人によりて遅速がある。

石鞏の馬祖に於ける頓中の頓じゃ。菴原平四郎は三日でやった。長慶、香厳二十年。香林十八年かゝった。柿が熟して自然に落ちるようなもの。時がくればきっと落ちる。

只坐禅は是れ仏行なりと深く思い取り、時節の長短を念とせず、坐禅するばかりだ。趙州は「若し悟れなんだら、衲の首を切り去り大小便を汲む柄杓となせ」と誓ってをる。只其の久きに堪える根機が中々得にくい。先ず大願心が本である。無常迅速じゃ。

大綱国師

大綱国師は熱心なる念仏信者であった。或日、聴講者の中に慧舜尼あり。講了って忠告した。上人教理は説く事詳しけれども、画餅餓を療するに足らず。心源に体達せずんば、徒らに他物を求む。可惜乎。

和尚大に服して、尼に導かれて了庵に参じた。一日海浜に出てゝ子供等が、

あれもない、これもない、磯打つ波。と謡うを聞て忽然として大悟した。先入主たる念仏を捨てゝ禅に入るということは、一寸出来にくい。まして尼女の勧めに於てをや。法によって人によらずとは此人の事か。

法然上人

元来法然は智慧代一の法然坊とも謂われて、偉い人じゃが、まだ禅が来ない前だから、念仏宗を唱えたのである。窃に禅を慕うて居たものが、翼短くして大空をかけるに由なく、縄短くして深泉を汲ぬに由なしというた。是唯禅に逢はざりしが為なり。彼をして禅に遇はしめば、一虎を群羊の中に放つが如く、各宗みな殺しにされたろう。可惜乎。栄西に先つ事三十五年。

不思量底

坐禅をして何をする、何もせぬのじゃ。只坐禅をするのみじゃ。「只」兀兀打坐するのじゃ。坐禅と我とが親しくなる、ツイ一つになる。坐禅が独立する。此の独立が直ちに大自在となる。こゝを不思量底を思量するといったのだ。

了然尼

武田信玄の孫じゃ。宮仕えへして奇生木と呼ばれる。天性にして禅を好みしが、強いられて嫁す。三子を産まば離縁しくれよと約す。二十五才までに三子を産み、夫のために妾を与え、自らは出家した。女の最も断ち難き恋愛と嫉妬とを、ウマク自在にせり。道心強ければなり。駒込の白翁を訪う。美なるを見て許さず。遂に焼きごてを顔にあてゝメチャメチャにして許された。鏡の裏に書して曰く。

昔遊宮裡焼蘭麝。　昔宮裏に遊んで蘭麝を焼く。（名香）
今入禅林燎面皮。　今禅林に入って面皮を燎く。
四序流行亦如此。　四序の流行亦た此くの如し。（今生の出来事）
不知誰是箇中移。　知らず誰れか是れ箇中に移ることを。（本来空）

人と物と無自性なるに体達し、自己を忘ずるに非ずんば、誰か此語をよくせん。曹渓境裡塵埃を絶すじゃ。歌に、

生ける世に　捨ててたく身や憂からまじ　ついの薪と思はざりせば

薪も我も自性はない。たく身と伎倆と、音相通じるも亦面白し。白翁の印可をうけ、泰雲寺を武州落合村に立つ。六十六にして目出度遷化せり。蓮月は此尼よりあやかりしや。

「了然尼」禅家には同じ名が沢山ある。気を付けるがよい。これは道元禅師の法子じゃ。元来道元は深山幽谷、一箇半箇の師訓により、法子は余計にこしらえぬ。懐奘、僧海、詮慧、了然尼のみなりき。伝記または詳しきを知らずと雖ども、其那一人たるを知らば、境界推して知るべし。元高麗の人。久しく師に参じて得法の後、羽州の玉泉寺に住せしとか。懐奘の兄弟、道元の子じゃ。問わずして知るべきのみ。何か残って居るだろうと思って詮索している。

趙州底

今は今迄に非ず。今は尤も新しきなり。清きなり。今の無字に直覚せよ。趙州と相見底なるべし。疑すれば三十棒。只管打坐は直に只管公案（ムー）なり。只管活動なり。

呼狂呼暴任他評。桃紅李白色自然。（狂と呼び暴と呼ぶは他の評に任す。桃紅李白自然の色）

善悪の定義

此に於て善悪の定義が必要となる。「法性に順じて心起るを善と謂う」。自己を忘じて天地も一体じゃ。衝突の仕様がない。心を起すとは、法性無我、平等中の差別に安住することなり。之に反するを悪という。

とかく賊仲間、悪人同志は仲良きものなり。盗跖(とうせき)曰く、「富者は仁ならず、仁なる者は富まず」と。孔子は之をほめたりき。かような真理を万国に通じてしらせたいものじゃ。

禅の極地

再問す、見性とは何ぞや。他なし。自己を了するの意なり。元古仏は、「自己を了ずるとは、自己を忘るるなり」と言っておる。白隠は、「忘れ忘れて忘るるも忘るる」というておる。元来自己無し。何ものを忘るるぞ。

退歩一番して回向返照(えこうへんしょう)せば、脚根下すでに忘、不忘を離れたるを知って、思わず大笑するの時節あらん。此処を「万法来たって我を証する」という。自己と言うかたまりが、人及び物に元来なき処へ、此の大活動が出来るのである。これを「自己の身心及び他己の身心を脱落せしむる」とは言うなり。

ここに於てか天地と同根万物と一体と言う平等心が起こってこねばならぬ。同じものほど親しきはなしじゃ。どうしても自己を殺され得(うる)ぞ。刀刀を切ることが出来ぬぞ。身心脱落は即三界唯一心じゃ。

外道となるな

人により長短はあるが、いつか至れるに違いないことを信ずるの大信根がなければならぬ。歩みだす一歩で江戸までとどく。坐禅は坐禅なりじゃ。心を外に向けたら万劫たってもいたる事はできぬぞ。外に向かって求めるを外道というじゃ。坐禅は坐禅なり。経行は経行なり。生也全機現じゃ。その物その物に徹するのじゃ。

余念を交えず「只管打坐して身心脱落なるべし」と元古仏はのたまいき。坐禅のときは身口意の三業が坐禅ばかりになって己を忘るるを身心脱落というたのじゃ。つまり本当に坐禅になることじゃ。

不見の見、不性の性

畢竟見性とは、自他の隔歴がとれ、入我我入のもとに、平等の大悲を生じ、世の為に邁進するの意である。

勿論無量無遍である。絶対無限である。そこで見るべきものがないから、不見の見じゃ。見るべき性がないから、不性の性じゃ。久遠劫よりの見性じゃ。元来相手がなかったのじゃ。皆脱落底のおたがい同志じゃ。どうしても相犯すことが出来ぬ筈じゃ。水水を湿すことが出来ぬ。切っても切れない中じゃ。

それらが直に三宝(仏法僧)の本徳となって現わるるのじゃ。ここまでこねば見性はむだごとじゃ。否、見性してはおらぬのじゃ。

因果無人

境を使うか、境につかわるるか。物を物とするか、物に物とせらるるか。一即一切じゃ、一切即一切じゃ。因果を信じる者は因果を使いうるじゃ。無人無我なるが故に信ぜざるものは因果につかわるる。有我執着(ががあればしゅうちゃくする)の故に。断常二見に住着する故に、順逆皆因果の標本と知る時、心爽然として彼に使われず、動かされず、直ちに因果を以て組織する万天下の主人公となることを疑わぬ。

ここに愛と敬とは流出して宇宙は一大ホームとなり、和気あいあいとして天下太平なり。皆これ因果を

信ずるものの賜物なり。仏といい、菩薩といい、因果を信ずるものの他はない。三界は我が家じゃ。その中の衆生は皆我が子じゃと言い出した。釈迦も因果無人と信じたに外ならぬ。

無常に気付け

雪竇大師は、「三分の光陰二早く過ぐ（人生は早い）。霊台一点揩磨せず（大したことは何もしていない）。貧生の遂日区々ら去る（だらだらと日々は過ぎゆくばかり）。喚べども頭を回らさず（勿体ない人生をしたものだ）。いかんせん（覆水盆に返らず）。」となげかれた。元古仏大清規にこの詩を出してござる。

無量寿経には、「冥より出でて冥に入り、苦に入る。大命当に終らんとする時、懼悔交々至る。」とある。こゝを和泉式部が、

冥きより冥き路にぞ迷い入る　はるかにてらせ山の端の月

というたのである。どうも気が付かぬ奴には手のつけようがない。

法は人にある

釈迦も国王が親族だから、いつでも食は得らるるが後世を思って、一夏馬麥（極粗食）を大衆と食されたことがある。どうしても贅沢は出来ぬ。そこで法はますゝゝ盛んになった。

しかも白隠は長命じゃ。寺を大きく作っても、入物がなければ飾りものじゃ。無用の長物じゃ。錦包毒石という祖語がある。これらをいうたものであろうか。

寺は破れても道さえ行なはるれば必ず出来る。決して憂うるには足らぬ。なに破れたら破れたままでもよい。楊岐の昔を思えばどこの寺も一等じゃ。寺がよくなれば信が起こらぬとか、信は荘厳よりおこるなどというは坊主の我田引水じゃ。寺を見に来る奴なら来ぬほうがよい。法は人にあるのじゃ。寺にはない。

道の極致

只あるべきようになりきって自己を忘ずる。是れ道の極致じゃ。されども無始劫来粘着縛着の自己を忘ずるの容易ならざることを忘れてはならむ。丸呑みは禅家の禁物たるを知れ。古人多年の霜辛雪苦じゃ。三到投子、九上洞山じゃ。錐股して睡魔を殺す慈明あり。

忘れては寒しとぞ思う床の雪を　払う暇なき人もありしを。楊岐晋山じゃ。

少林の雪にしたゝたる唐紅に　そめよ心の色あさくとも。二祖の断臂を思はざる可けんや。自我を殺すに最も力ある妙術は、仏々に伝えて邪なることなきは即ち坐禅道である。

坐禅妙用

「此の法は人々の分上にゆたかにそなわれりといえども、未だ修せざるにはあらわれず。証せざるには得ることなし。放てば手にみてり一多のきわならんや。」

坐禅によって自己を放下す。即ち坐禅ばかりになった時の境界じゃ。数量をボッこえている。これを身心脱落というじゃ。

「語れば口にみつ、縦横極まりなし。」口を以て身と意を代表した。身口意三業の働きが自己のない証明

となって現成す。是を脱落身心という。皆坐禅の力ならざるはない。至祷　至祷

大法王となれ

海は水を辞せざるが故に能くその大を成すじゃ。不撓不屈(ふとうふくつ)でやってゆけば、忽然として也太奇也、太奇と踊り出す時節がくるのは請合だ。その時大法王じゃ。

生死事大、無常迅速じゃ。余念を交ゆるいとまがあるか。只古人の血滴々を肝に銘じ、骨に刻して猛進するより外はない。鹿を逐う者は山を見ず。

「只」打坐せよ。これが標本じゃ。

これは老大師のほんの一部である。［全集］完成をお待ちあれ。

仮称［飯田欠隠語録全集］

仕　様

大きさ　B5版
全　五冊
一冊　約一千頁
一冊価格　一万七千円（全巻発注の場合は一冊一万五千円）
完成次代　逐次発刊
全巻完成年数　七年
出版社　青山社
発行　少林窟道場

以上全く予定です。が既に全ての原稿は出版社に渡り少しでも読みやすくするために諸先生方に内容の列記方法などを検討して頂いているところです。

問題が実に多いため遅々としていますが着実に進んでいます。ご期待下さい。

希道　謹言

飯田欞隠老師略年譜

文久三年（一八六三）四月二十二日、山口県都濃郡花岡に父片野興兵衛・母みちの五男として出生。
明治二年（一八六九）七歳。地蔵院石田慶蔵氏につき読書、習字、算術等を学ぶ。
三年　八歳。和歌を詠ず。
六年　一一歳。伯父の死を悲しみ漢詩を賦す。
十年　一五歳。飯田家の養子となる。（周防、下松、飯田柔平（浪花、適塾初代塾頭）の養子となる。）
　三田尻福田病院所属の医学校に入学。
一四年　一九歳。上京、東京大学医学部入学。
一八年　二三歳。優等第二番の席次で卒業。
一九年　二四歳。駒込病院医員として奉職中、コレラ流行。一日死者七百人。人生の無常切実。偶々香川寛量老師の駒込龍光寺にて、一日の説法が縁を結び、遂に職を辞して安芸国仏通寺に到り、寛量老師に解脱の本懐を求む。昼夜寝食を忘れ、猛修行の結果、遂に蝋八曉天、換骨脱体。師の印可を得。
　帰郷し養父の病を看護する。
二二年　二七歳。法友の言に従い、東京・道林寺に南天棒老師を訪ね師資の礼を執る。これより十数年全国諸方歴参と医術の研究に寧日なし。
二六年　三一歳。埼玉県羽生町にて医院を開業、町田氏の娘佳都子と結婚。
三十年　三五歳。静岡県島田市伝心寺の江湖会に西有穆山禅師大導師のため来山、直に随喜相見。この年、居を島田に移して禅師について洞門の宗風を探り秋野孝道、丘宗潭、筒井方外師等と道交する。
三一年　三六歳。南天棒老師の印可を受く。然るに、猶お自ら足れりとせず、仏書祖録に参ず。且つひそかに只管打坐を事とす。
三三年　三八歳。穆山禅師横浜に移られたため、自らも島田市の医院を閉鎖して上京、神田猿楽町に寓居。楠田病院長楠田謙三氏に請われて禅要を説く。
三五年　四〇歳。南天棒老師、西宮海清寺に移住。自らも西宮に移転開業。美濃の国虎渓山に在って独坐。独りいよいよ苦修錬行。自己を全忘し忽然として遂に大悟大徹。古人も至り難きに至り得られた大菩提心、只知る人ぞ知る。「南天棒、仏法夢にだも知らず」と正法の一句を吐却す。以後も只菩提心、菩提心と、満身の法勇を鼓吹す。為に時の人、菩提心居士と称す。
三八年　四三歳。日露戦役中、出征遺家族の無料診療に従事する。
三九年　四四歳。九月上京、岡田自適（名医）邸に寓し、昼間は医術研究、夜間は居士大姉の鉗鎚に精励。大正四年（１９１５）　五三歳。『南天棒禅話』刊行。
五年　五四歳。中館長風（軍医総監）、岡田自適両居士より出家をすすめられる。
七年　五六歳。安芸の国、敬峰和尚の心印を伝う。故に白隠―遂翁―春叢―文常―敬峰―文敬（欞隠）と　なるも、足れりとせず後に暗に破棄す。
九年　五八歳。『槐安国語提唱録』第一巻刊行。
十一年　六〇歳。趙州老古仏にあやかり、小浜市発心寺にて出家。導師は原田祖岳老師なり。
十三年　六二歳。『無門関鑽燧』刊行。
十四年　六三歳。埼玉県秩父郡吉田町、東陽寺に住職。
十五年　六四歳。大阪池田の大広寺に師家として聘せられる。
　昭和二年（１９２７）　六五歳。二條厚基公の創唱により貴族院議員中心の慧照会設立。議長官舎にて開講。鍋島直暎侯等熱心に参禅。二條公薨去より麻布一本松、賢宗寺にて開講。次いで大石大典居士を中心にした「興禅護国会」を指導。碧巌録開講、来聴者数百人に及ぶ。日本最高最大の権威ある大禅会となる。
三年　六六歳。『槐安国語提唱録』全七巻完結。

五年　六八歳。大阪天王寺真法院に卜居す。東京真風会、老松会、慧照会、興禅護国会、大阪達磨会、池田大広寺、広島国泰寺、呉神応院、長野県貞祥寺、盛岡報恩寺、秋田市満願寺、花巻宗青寺等を巡錫（じゅんしゃく）（指導）。席暖まる時無し。

六年　六九歳。高槻市に少林窟道場落成。『参禅秘話』刊行。

七年　七〇歳。興禅護国会にて提唱中、急に舌もつれ言説通ぜず。直に帰宅、静養加療。別府より忠海勝運寺に転地療養。義光・大智を鉗鎚がてらここで多くの著作に専念。『碧巌集提唱録』刊行。

八年　七一歳。伊牟田欟文剃髪して少林窟第二世となり各地禅会を代講せしむ。『普勧坐禅儀一莖草』『趙州録開莚普説』刊行。

九年　七二歳。二世伊牟田欟文老師少林窟道場入窟。『参禅漫録』刊行。

十年　二世欟文老師遷化。「時節因縁なるかな」と独語される。

十二年　七五歳。九月二十日午後十時四十分、西宮の自宅にて入寂。

著書及び遺稿

『欟隠禅話集』
『南天棒禅話』
『無門関鑽燧』
『槐安国語提唱録』
『碧巌集提唱録』
『参禅秘話』
『参禅漫録』
『普勧坐禅儀一莖草』
『趙州録開莚普説』
『禅友に与ふるの書』（昭和一八年）
『証道歌提唱』（昭和三六年）
『般若心経止啼銭のこころ』（昭和四九年）
『般若心経恁麼来』（昭和六〇年）
『仏祖正伝禅戒鈔提唱』（昭和六一年）
『参同契・宝鏡三昧拾唾』（昭和六一年）
新版『趙州録開莚普説』（平成七年）
『禅交響楽』（未刊）

・・・・・・・・・

父、飯田欟隠

小松（こまつ）　妙子（たえこ）

”お金を全部あげなさい“

散歩で父について、いつものように海岸近くに来ると、一人のおじいさんが屋台の傍で一服しながら、餅菓子を売っていた。平和な時代の平凡な幸福な寂しさがただよっていた。屋台には腰かけ台があった。父は「こんにちわ」と、おじいさんに声をかけながら坐った。私も一緒に腰をかけた。父はおじいさんの身の上話を聞いていた。孫が幾人とかいて、どうとか話していたが、私にとって面白くもないので、ぼんやりあたりを眺めていた。

すると父が「貴様(父は子供たちは誰にでもきさまと申しました)銭はもっているか」と聞く。「はいここに入っています」と言って例の鹿皮の袋の中から、いつものがま口を出した。「そうか、じゃそのお金をおじいさんにあげなさい」と言う。「いくら出すのですか」と聞くと、のぞきもしないで「みんなじゃ」と父は言った。

私は母から「うちは貧乏だから、貧乏だから」と言われて倹約をモットーとして毎日を過ごしていたが、父のいうことは絶対命令なので仕方なく、中に入っていた札も銀貨も差し出しました。おじいさんはびっくり仰天して、それこそ眼を白黒させていた。父は「ではそのお菓子をみんな下さい。おじいさんこれでみんな売れたのですから早じまいにして帰りなさい。うちで一杯のんで下さい」といった。

おじいさんは私に餅菓子を沢山つつんでくれたが、重くて重くてもちきれない。「お父ちゃん、こんなにどうするのですか」「みんなにあげたらいいだろう。貴様も食え」。ふとうしろを振り返ってみたら。おじいさんは手を合わせて拝んでくれていた。父は何事もなかったかのように、またステッキをついてかえった。私は両手で重い餅を抱えながら……。ちなみにその頃餅菓子一つが一銭だった。

”どうじゃ、うまいか“

私は何故か字をかくスピードが速かったので、父は口述速記をさせるのに重宝がってよく私をよびよせては口述させた。私も父の役にたつことをよろこんで、原稿用紙とペンをもつことは嫌ではなかった。それに、たまには父も私をねぎらってくれるつもりなのか、寒い日には「今日は貴様に何かうまいものを食わしてやろう、とりそばはどうじゃ」といってごほうびをぶらさげて私をよろこばせることも忘れなかった。

母は家でたのむ職人用以外は店屋物をとることは御法度のように嫌がった。母にはすまないとは思いながら、私はうれしくてうれしくて寒風をついて、うどん屋へ走った。関西では、そば屋とはいわないでうどん屋という。それに父のメニュウはいつも夜食の代名詞のようにとりそばだった。私がふうふうおいしそうに食べるのを「どうじゃ、うまいか」といいながら、にこにこして食べ終わるのを待っていた。

”試験なんかどうでもいい“

父の呼び出しは夜といわず、夜半といわず、しかも待てしばしがなかった。大てい母が伝令に来た。「妙子さん、お父さんがまたお呼びだよ！」と気の毒そうに障子のむこうに立った。夜半に起こされるときもあるが、そんな時は父が自分で来た。「お父ちゃん、眠い」というと「人間は三時間寝ればそれで足りる。それ以上寝ることは酔生夢死で無駄な人生だ」とさとされ、なるほど私たち兄弟がいつもあつまって話すことは、父はいつ寝るかわからない。自分たちが眼をさますと本を読む声がする。大きい声でふしをつけて読むことが好きで、家中どこからともなく父の読書の声がきこえてくるのがなつかしいと話あった。

その日は一たんハイと答えたものの、明日の試験のために勉強していたので、「今日は駄目」といって

しまった。すると「どうしてそんなことを言うか！」といって珍しく烈火の如く怒って声を荒げた。「だって明日試験なんだもの」と私は珍しく口答えした。「貴様の試験なんかどうでもいいんじゃ。父さんの原稿を書くことの方がどんなにか大事なんじゃ。それが貴様にわからんか！」と言ってその怒り方はかつてなかった。

常日頃、勉強などしたことがないので明日の試験をどうしようかと、とうとう泣きだした。すると父は「そんなことで泣くやつがあるか。人間一生のうちで泣いていいのは親が死んだときと……（泣いていたのであとの言葉をききかえすことができず、わからなかったが、もう一つ泣いていいときがあった）だけじゃ。貴様のその醜い泣き顔を鏡でみて来い。夜叉の面じゃ！」

母はおろおろととりなしてくれたが、一たび怒り出した父は、どうしてもペンをもたざるを得ない情況まで私をおいつめた。結局朝方二時頃やっと解放されて寝ることができたが、勉強する時間などあろうはずはない。女学校三年くらいのときだったろうか。

”心の底が見えてくる“

私の少女時代の心に残った父の言葉がある。女学校一、二年生といえば反抗期の最中だったが、今でいう部活の時間があった。放課後、日本間でじっと坐るというだけ一時間だった。坐禅というのでもなく、ただ眼を閉じてしずかに息をして、ひたすらに坐っていなさい、というのがその会の目的だから、何となく自分から選んだ時間ではあったけれども、何のやくにたつのだろうと。

私は家に帰って何故そんなことをしなければならないのかと、父に矛先をむけて聞いてみた。

父曰く「池に波がたっていると底がみえなかろう？波が静かになれば池の底が見えてくる。それと同じじゃ。心が波だっていると、自分の心の底が見えぬ。自分の心が静かになれば心の底が見えてくる」。なるほどと納得した。さすがに上手に話てくれるものだと、その時もわが父ながら感心して尊敬しなおしたことが頭にいつまでも残っている。

〈小松妙子／大正元年生まれ。飯田欞隠の三女〉

（『欞隠顕彰会会報』より抄録）

後語

「時節因縁は三世の諸仏も計り難し」と。これ禅家の常套語である。山僧が［飯田欠隠語録全集］編纂の大業を志して三十年に垂（なんな）んとす。今日漸く時節因縁の当来である。時間の長短を見る暇は無かった。三十年はアッと言うまであった。是の如くして古今無双の老大師とその境界を周知してもらわんための一梓がこの拙著である。

今や老大師が「興禅護國会（こうぜんごこくかい）」を指南し国難を救われたことを知る人は稀である。当時誰も知る日本最高の権威ある大禅会であった。だが山僧は釈尊嫡々相承のその偉人に相見出来なかった憾みは如何とも致し難し。

瑩山禅師遺訓に曰く、**「正法眼蔵涅槃妙心、仏の在世と異なることなし。故に仏生国に生まれざることを恨むこと勿れ。仏在世に遭うわざることを悲しむこと勿れ。昔し厚く善根を植え、深く般若の良縁を結ぶ。之に依って大乗の会裡（えり）に集まる。実に是れ迦葉と肩を並べ、阿難と膝を交ゆるが如し。」**と。嗚呼、歓喜、歓喜。

欠隠老に会わずと雖も、偉人の真訣を縷々拝聴する好時節を篤と得た山僧である。恰も世尊に逢うが如く、霊鷲山上、迦葉尊者と親見するが如くである。快哉、々々。

欠隠老は海辺にあっては漁人の如く、山中に在っては樵夫の如く無碍自在な祖師であった。その指導力は、理を論ずるに於いては語極まるまで、事に当たっては我を忘れて徹底。説いても作用しても跡形無く、屡々醜を忘れて闊達自在。これ全て大慈大悲である。

或る時は汚れフンドシを鼻頭に突きつけ、或る時は法要中に子等を率いて飛行機を見せしむ。或る時の一掌（顔を張り倒す）は褒めて徹底活かし、或る時の一掌は、命がけの決意に追い込む。これを把住殺人刀（はじゅうさつにんとう）と言う。各の如くとんでもない手段は身を忘れての熱血からであり、やり口は仏祖も予測が付かぬ働きである。誰か汗顔感泣せざらんや。この心眼無くんば大法は滅ぶのみ。嗚呼。

雲はれて後の光と思ふなよ　本より空に有り明けの月

これ欠隠老はいつもながら良い歌じゃと褒め、しばしば用いて我等の注意を促されておる。涙、涙。

欠隠老は仏法の堂奥を護持せんと卓々たる境界を以ていちゝゝ古人を照破し邪路を訂正している。即わち碧巌提唱に曰く、「圜悟の評唱、著語、古人の語句等、全て盲従するは危険なり。おうおうに排斥すべき処あり。云々」と。故に応・燈・関已後、五百年間不出世の巨匠と評せらる。

沙石集に曰く、

死にたればこそ生まれたれ　生きたらば死にまし
かしこくて死してんける　けふに死ぬらふに

此処に至ってはどんな博学知識も何の救いにもならない。いよいよ窮していよいよ迷う。これは皆自我の妄想・妄念・妄覚からである。本当に救われるとは、これらが明白になった境界を言う。自我が溶け落ちて初めて本当の人間性が輝き出す。絶大な愛である。愛より強き者、美しき者は無い。人と人、国と国信じて親しければ何ぞ争うべきや。世界花と化して泰平を謳歌す。これに勝る麗しきは無い。みな願うところではないか。

欠隠老曰く、**「世界は統一されるべきもの。この大愛、この真、この誠をもってなり」**と。まさにまさに。誰か之を疑わんや。過去を超え、宗教思想を超え、老若男女民族を一度は凌駕せねばならぬ。

自我に勝ち得て初めて自ずから虚空掌中に帰し、天上天下唯我独尊たる神聖に目覚めるは必定。なに、人々日常、即今底の事よ。これを「平常心是道（へいじょうしんこれどう）」といい「日々是好日（にちにちこれこうじつ）」という。

世界の混沌は皆菩提心無きことと教育の誤るに有り。世の諸問題みな心より生ずる。このことを知らさねば、自らを律する大切さを忘れてしまう。心清ければ天下泰平である。これが檪老の全てであり仏祖の内容である。本当に自律して自己責任がとれれば全ての問題みなケリが付く。

テロや如何。ただ自我の妄念により命の神聖さが解らぬが故、狂人と成り暴徒となる。彼らも人である。彼らもやはり尊厳大である。知らせぬ罪、教えざるが故の罪、救わない怖さを自覚すべきである。檪老否諸仏祖師方の涙を無駄にしてはならぬ。大菩提心のもとに本当に正身端坐せよ、が檪老の結語である。

自律無き民族は滅ぶ。滅ぼされる。将来世代の苦難と悲惨さを深く思い、「今」を慎まねばならぬ時である。

「檪隠老師全集」を能く読み、能く行じて貰いたい。「千里の目を窮めんと欲せば、更に一層楼に上るべし」と古人も言えり。

「人々分上豊に具われりと雖も修せざるには現れず、証せざるには得ることなし」道元禅師

知る人ぞ知る。我が国に斯くの如き豪僧にして古今無双の傑僧ありしを誇りとす。

この拙文をして偉人の片鱗を看取され得ば望外の喜びとせん。南無檪隠老古仏。合掌

我れ鈍重にして慚汗踵に到る。されど護法の念、一日たりとも忘ずること無し。

嗚呼、慚愧々々、咄。菩提心、菩提心。これを以て結語とす。

寒月を望んで言を忘ずる時、孤船粛々未だ泣かずして去る

維時　平成二十七年十二月二十三日

奉祝　平成天皇八十二聖歳御生誕日

七十六衲

希　道　識